（表紙）

廿一代
忠尚一
元和七至
寛永十一

町田氏正統系譜　廿九

藤原姓町田氏正統系譜巻第廿九忠尚一

●忠尚（タヽナホ）

初忠共　梅千代丸　出羽守

○元和七年辛酉二月二日、誕生於武州江戸櫻田邸、

父　太守中納言家久公、母宮原吉兵衛平景辰之女（景辰初魔島士、後為當家臣、子孫籍於河邊郡川邊郷）

○寛永元年甲子之春、為久幸之後嗣相續町田嫡宗、

時忠尚（時梅千代丸）生而五年矣、　家久公有十六男、而

忠尚　公第六之子也、是時忠尚至自江戸、直入于

伊作地頭館、忠尚生母宮原氏亦從而來就館、當日家久公光降伊作館、盛開慶筵奉賀嗣續、因託町田勘解由次官久則・町田甚兵衛尉久守・肥後長次郎盛行・町田彌兵衛尉久興、以宜輔翼忠尚之顧命、咸謹聽命、是時、　家久公給忠尚田禄二千石贍之、且忠尚幼沖之間、収久幸之舊領高山地頭、而給石谷私邑・伊作領地如故矣、始　貴久公賜忠榮伊集院上神殿村暨魔島諸名廿一町之地、　義久公増封久倍市山内一之宮・長羽之二村・大口内長尾村・東郷内山田村・大村内新開村等數邑、到于久幸以伊作内伊與倉村・中原村、易賜一之宮・長羽之二村、凡其與石谷私邑、忠尚所食合為六千餘石也、丁斯之時、甲第為新橋（其廣輪一町廿四歩後為島津圖書第）・中第為千石馬場（其廣輪七段一畝廿五歩、是後慶安中喜入攝津一旦居之）・下第為西田（其中今島津矢柄久宅居之、其他、）雙枝鎗一棹（カマヤリヒトサホ）（両鎌鎗亦云山劔、象、割為五个所）鍛匠伊勢大掾下坂光廣有銘、身長六寸八分、左右枝長、柄装金紋無花桐頭、鞘頭銀鐏大乗妙典一軸（表裏画釋迦涅槃像）等、忠尚所齎來也、

町田大概記曰、名字親類中も談合共有之、圖書跡次之儀可被相定之儀にて候、其時御曹子を御養子『本ノマヽ』と太方被申候、皆〻申事にも知行過分に御持候者、其儀も可有之候、役分ハ相上リ候、町田殿之家知ハ二千石ニ而候、不似合被仰様と太芳申候、既に為後生金銀之用意有之躰候、自然者、　御公儀江茂被申上養子為被相定人もや可有之候、跡忽に申出事にてハ無之候、唯　御公儀江被成御尋可被聞召候、若又親類中に跡次ハ誰にて候する哉と御尋候ハヽ、町田勘解由殿近〻之親類にて候、如此御座候て可然之由、何茂令申候、依其儀、圖書殿懐より、此使町田弥兵衛可仕之由被仰候、重〻斟酌仕候、既に圖書殿者存命之時より萬事被頼候、殊に高山之地頭被指當候、圖書殿留主如何様成事有之共、圖書代に高山に罷越可承之由、　上様御意を以、圖書所に出入候、然處に跡次之儀、使成間敷之由被申候哉、是ハ連〻被頼置候儀も徒に罷成候、強而右懐より被仰候、左候ハヽ、然〻之人を被相添、則伊勢兵部殿江右之通可申入候、依之白濱伴松被頼せ候、両人右様子を伊勢兵部殿江申入候も、右之通に圖書殿懐より被申上候、頓而兵部少輔殿より御公儀江被申候、其後町田駿河殿參會候へハ、駿河殿被申候者、勝兵衛殿御跡次ハ御曹子梅千代殿に兼日相定候、別人之誰人と被申候而者如何之由被申候、右懐より　御公儀江被申候も、前〻如申、跡次　御公儀江被得御意候由、駿河殿江申入候、其にて前〻養子談合之時、御曹子と太芳より被申候者、勝兵衛殿より兼而爲聞儀と存合候、其御返事可被仰出候、半松老、町田弥兵衛尉可罷出之由被仰出候得共、弥兵衛尉事者其時分病中、輿にて行躰に候故、御屋形に不參候、依其儀町田甚兵衛殿・半松両人被罷出候、圖書殿爲跡次御曹子梅千代殿、町田殿事ハ代〻對御家被盡忠節、圖書殿迄無比類御奉公之筋目候条、如斯御定候由被仰出候、左様成御返事時者可承候由、圖書殿懐より依注進、町田勘解由殿・肥後長次郎殿・町田弥

兵衞罷出承候、圖書殿跡次者梅千代殿に御定候、其年江戸より梅千代殿被成御下、伊作に被成御住候、其時分　黄門様も御前様・薩州様御若年之時、以御同心御在江戸被成候時分にて候故、梅千代殿御懐同前に御養子ニ御定御座候得者、無程此方江被成御越候、其日　黄門様も被成御光儀、町田家次之御祝不淺候、左様に候而、其脇町田勘解由殿・町田甚兵衞殿・肥後長次郎殿・町田弥兵衞尉四人に承候者、町田圖書殿跡次に梅千代殿四歳之御時御定候、御幼少之儀候条、町田殿取立可申之由、從御公儀承候、無餘日　黄門様・御前様以御同心被成御打立、阿久根に被成御逗留候、其内に從爰元被仰上候、高山之地頭有子細、圖書殿に被指當候、被相果候跡に、梅千代殿御幼少にて地頭役如何之由御申候、阿久根に御逗留之内に、高山之地頭職被指上候、圖書殿老中役分之知行二千石御給之儀相定候、右之知行爲御給之儀、加治木彦右衞門阿久根に御使進上有之候、頓而御船も阿久根より出申候条、右知行之御祝言佐土原八右衞門被成御登、黄門様大坂に御着船にて、御逗留之内に、佐土原八右衞門大坂にて知行御給忝之由、從梅千代殿被成御申候、

按大概記謂太芳未知何人、或謂疑久幸之室税所氏之寡號、書以俟考

○寛永元年八月、忠尚以石谷邑裏井手下・迫戸口・礫島（ソノテ）・島廻・岩下・後迫・堀・近道・外園・笠松等之水陸田（タハタ）凡十五石無段米、饒米（オヨヒヨネ）・塩・豉（ミソ）・薪若干件、為先人久幸之日牌料、寄附石谷永福寺、町田勘解由次官久則・町田甚兵衞久守・肥後長次郎盛行・町田彌兵衞久興連判書以與之、是忠尚承統之初政也、

○三八四　町田久則外三名連署寄進状

知行名寄目録

井手下　畦町四十二
上田壹段二畦廿七歩

籾拾壹俵壹斗　石谷村
下ノ上村屋敷付
孫六

瀬戸之口同十二
中田九畦拾八歩　　籾六俵壹斗　圖書屋敷内　弥次郎

同所　同十三
下田三畦　　籾壹俵貳斗　同　同人

つふて嶋内　同五十一
下田壹段二畦　　籾六俵　久木崎門之内　彦三郎

嶋廻　同十五
下〻田壹反一畦廿二歩　　籾三俵五升　永福寺之内　藤六

同所　同廿
下〻田壹段　　籾三俵　同　同人

岩下　同一ツ
下〻田拾貳歩　　籾貳升　浮免　善右衛門尉

嶋廻　二反四せ廿八歩之内
下田壹反拾四歩　　籾六俵貳斗　下村之内　孫六

後か迫
下畠六段廿二歩　　大豆壹斗八升　久木崎門之内　藤六

同所
下畠二畦四歩　　大豆五升　彦三

ほり
山畑貳段廿歩　　大豆貳升五合　民部太夫

近道
下畠壹段貳畝　　大豆壹俵壹斗　九兵衛尉

下屋敷壹反三せ六歩　　大豆壹俵一斗四升　上村屋敷

外その
中畠壹反八歩　　大豆壹俵壹斗五升　下村之内　孫六

笠松　六せ十八歩内
下〻田壹段拾五歩　　籾壹斗九升　同　同人

合籾大豆四拾五俵五合
高ニシテ拾五石　但無段米
一上白米壹石八斗者、御霊前并寺主一日ニ五合充、
能米ニシテ貳石三斗四舛者、但外三合ヘリ、
一能米九斗者、但一日ニ二合五勺充、調菜一人分、
一能米壹石四斗四舛者、一ケ月ニ壹斗貳升充、御酒、
一能米貳斗貳升者、味噌樽一ツ調分　但鰍塩篭、

一能米五升者、塩壹斗八升代、一ケ月ニ一升五合充、

一能米壹斗七升五合者、錢シテ壹貫文、茶貳斤代、

一能米壹斗貳升五合者、薪之代、

合米五石貳斗五升者、但俵ニシテ三拾表、

右者、隣月庵主之霊前爲日牌料被相付候、於後代吳儀有間敷者也、

寛永元年八月日

町田弥兵衛尉(久興)(花押)

肥後長次郎(盛行)(花押)

町田甚兵衛尉(久盛)(花押)

町田勘解由次官(久則)(花押)

永福寺

○寛永元年十一月廿三日、忠尚(時梅千代丸)重修石谷邑前谷熊野權現社寶殿(傳見上、光俊譜)

○三八五　前谷熊野権現社宝殿棟札写

右奉為天長地久　御願圓滿、殊者大檀那藤氏梅千代童子御息災延命　子孫繁昌　御武運長永　勝利自在　領内安全　人民快樂　一切災厄　未然解脱心中御願如意滿足矣、仍意旨如右、

導師法印權大僧都政意認之、

寛永元年甲子霜月廿三日

當奉行衆　町田勘解由次官久慶

同名藤右衛門尉忠貞

大工　武元兵右衛門清方

鍛冶　野村六郎左衛門尉

助衆　町田休右衛門忠

肥後長次郎盛行

若松民部左衛門久宗

四本主殿助重秀

中馬二右衛門尉重張

加治木彦右衛門經宣

川野休右衛門

肝煎　新十郎
加治木隱岐入道
脇大工　岩下伊與助
神主　山田治部大夫

○是歲、寛永元年十一月、　家久公率夫人及公子三人向江戸（夫人島津備前忠清之女、公子三人、一又三郎忠元即光久公、一岩松丸即忠尚之兄式部大輔忠直、一萬千代丸即忠尚弟玄蕃頭忠紀、）　翌二年乙丑二月至大坂、於是、忠尚遣使與力佐土原八右衞門追及大坂、奉謝賜世禄領邑之恩、

○寛永三年丙寅三月、　家久公至自江戸、是月、公賁臨于忠尚之第焉、今日　公之側室宮原氏不能用娛　公、却犯威嚴、蓋婦人苦懷妬心之所致也云、

○寛永三年四月廿三日、忠尚生母宮原氏卒（宮原吉兵衞景辰之女、家久公側室也）　法名高岳妙崇大姉、葬石谷永福寺、置牌於同寺、

町田大概記曰、　黄門様被成御下國、梅千代殿六歲之御時懷被爲相果候

○寛永三年閏四月、　家久公之京師、六月、見　大御所秀忠公於伏見城、同月廿五日、　大御所朝於天皇（御水尾帝）　秋八月十九日、　公為權中納言叙從三位、是日、勅旨賜　公衞府御太刀・寮御馬、九月、公還國、

○寛永三年九月十九日、吾庶町田彌兵衞尉久興使面高連長坊俊昌請託伊勢兵部少輔貞昌曰、今歲、忠尚遭生母之憂、内喪同胞至親、外乏一族之賢達、貞昌與先人久幸知己友善、幸不忘舊好、自今以後為幼子忠尚、當加哀恤而履吾大宗世々莫負朝廷之盛蹟矣、久興衷曲意愛見于狀案（蓋面高俊昌與澁谷氏親緣、因使俊昌言于貞昌欤、然則於吾本宗也、與澁谷氏有故者、粗可知耳）

○三八六　町田久興覚

『在家藏』

一梅千代殿町田之家被成御續候之事、最前伊兵部少輔殿以御校量、事能相濟、于今如斯候、筋〻懇切之儀、可被申入事本意之至候、然者、御袋堅固之

問、三四年諸篇取紛、兵部少輔殿ニ被成御無音候
賢、乍去、梅千代殿御少年之故如斯候、自今以後
之儀、對梅千代殿別而兵部少輔殿可被添御心事、
一者御曹子之御事、一者前之町圖書殿へ御懇志之
筋無御失念、一者町田之家代々無別心奉對　御當
家御奉公被仕候、跡々之事候、已來之儀、梅千代
殿御爲ニ可罷成之樣ニ奉頼候事、
一梅千代殿御袋當春御成之時、依過言　上樣之御意
被相違候、不幸而無程被成死去候、御意　被相背
之事、三原飛彈守殿被存知候、可被成御尋候、誠
梅千代殿御身体哀成御事候、其故者、父親樣者君
上之御身、常以不被得慈愛之御意、是君臣正法之
故也、母親者被成死去、其外無同抱之御兄弟、且
無同姓異姓之親、似孤獨之御身躰ニ候、梅千代殿
御事、於向後兵部少輔殿可被入御精之樣ニ奉頼候
事、
已上
（寛永三年）九月十九日　　町田弥兵衛尉

連長坊

○寛永四年丁卯正月廿四日、先人久倍之室高崎氏卒（高崎播磨守能宗入道有閑之女也、即忠綱・久幸等母也）、法名月庭榮秋庵主、葬麗島福昌寺之西山（墓銘月庭榮秋之四字、福昌寺奪叟銘文作月庭榮秋大姉）、置牌于石谷永福寺、蓋榮秋應是生前之法名（昔者生日有法名、後世婦人夫死而有院號、猶稱未亡人耳）、又萬治二年己亥、建六地藏塔於石谷永福寺、以資榮秋庵主之追薦也、
按慶長十九年、久幸之母輸幣于　惟新公、為駕儀（既出）、又町田大概記曰、久幸歿時、親戚因圖書殿懷取進止（サシツ）、即榮秋庵主也、庵主長壽、久倍歿後廿有五年而掩粧、是時蓋應八十有餘歳矣、此乃所以福昌寺奪叟祭菴主文有久守孤燈之句歟（又奪叟文中有孝孫子字、是為忠尚祖母之證也、或人疑菴主之長壽謂久倍繼配歟、如是説今更不可思議也）、
○寛永四年五月三日、前此、久幸未亡人（コウシツ）税所氏別居、公命更移忠尚之在所、蓋生母宮原氏卒故也、至是、町田久興呈狀曰、嘗奉擁佑（モリソタツル）忠尚公子之命、雖然臣一人豈敢塞其責耶、望請、別調一人為臣之補副矣、

○三八七　町田久興覚
『在家藏』

一梅千代殿御在所ニ後室被罷移之由被　仰出候事、
一梅千代殿御爲を存、諸事可申渡候、題目之儀共者、名字衆ニ可致談合候、左様之時者、被入精熟談可被仕之由、町田勘解由次官殿・町田甚兵衛殿・肥後長次郎殿へ可被仰渡之事、
一梅千代殿一方ニ御奉公可仕之由、此度被　仰聞せ候、我等事者、代〻御内之者之筋ニて候、町田殿一方御奉公曾以望ニも不存候へとも、梅千代殿御若年之御事候故、吳儀付不申上、無別心梅千代殿御爲ニ可罷成之様ニ校量可仕候、就夫、拙者一人ニてハ彼是不念之至候条、今壹人被成御加可被仰付之由申上候事、

已上

（寛永四年）卯五月三日　　町田弥兵衛尉

○寛永四年十一月、以石谷島廻田高三斛、為榮秋菴主月牌料且正月廿四日正忌日祭田、施於石谷永福寺、町田勘解由次官・町田甚兵衛尉・肥後長次郎・否笠彦兵衛・町田彌兵衛尉連判寄附狀、以授永福寺、

○三八八　町田久慶外四名連署寄進状

知行名寄□（目錄カ）

嶋廻一反四畦廿八歩内　畝廿六
下田壹段四畝拾四歩　籾九俵
石谷村　代□之内　孫六

高ニシテ三斛

右、榮秋庵主爲月牌□被相付候、毎月朔日・十五日・廿四日、一ケ日御霊供可有進献候、正月廿四日、正忌日ニ候之間、僧衆被□相應可有相調者也、

寛永四年丁卯十一月日

町田弥兵衛尉（花押）
否笠刑部少輔（花押）
肥後長次郎（花押）

町田甚兵衛尉（花押）
町田勘解由次官（花押）

永福寺

○寛永四年十一月、以石谷水陸田十三石無段米饒米・塩・豉・薪若干件、為高岳妙崇大姉日牌料且毎年四月廿三日正忌日料、給石谷永福寺、町田甚兵衛尉・町田勘解由次官・否笠形（マヽ）部少輔・肥後長次郎・町田彌兵衛尉連署寄附状、以付永福寺、

○三八九　町田久守外四名連署寄進状

知行名寄目録

見せ町　畝町一ッ
上田七畦拾四歩　籾七俵貳斗　石谷村圖書屋敷之内　弥次郎

前同
下田壹段九畦　籾拾壹俵貳斗　谷ノ門内　善兵衛尉

岩下　四反一畝二歩内　畝四十九
下田貳反拾六歩　籾拾壹俵一斗二升五合　小見門内　孫十郎

笠松六畝十八歩内　畝十四
下ゝ田五段三歩　籾貳俵六升　下村之内　孫六

隠迫
下畠七畦六歩　大豆貳斗三升　中原之門之内　彦左衛門尉

下畠壹反九畝六歩　大豆貳俵壹斗五升　下村門内　孫六

源藏畠
中畠八畝拾三歩　大豆壹俵壹斗　同　同人

西平
下畠貳畦廿歩　大豆九升　浮免　彦左衛門尉

すゝくわの山
下ゝ畠八歩　大豆五合　下村門之内　同人

ほり
山畑壹畦貳歩　大豆壹升五合　清右衛門尉

同所
山畑二畦拾歩　大豆貳升　同人

樋か下り
下畠貳畝十五歩　大豆六升　藤六

合籾大豆三拾八俵貳斗四升五合、
高ニシテ拾三斛　但無段米、
一上白米壹石八斗者、御霊前并寺主一日ニ五合充、
能米ニシテ貳石三斗四舛者、但外三合へり、
一能米壹石四斗四舛者、但一ケ月ニ壹斗貳升充御酒、
一能米貳斗貳升者、味噌樽一ツ調分、但酥塩篭、
一能米五舛者、　塩壹斗八升代、一ケ月ニ壹升五合充、
一能米壹斗七升五合者、錢ニシテ壹貫文　茶貳斤代、
一能米壹斗貳升五合者、薪之代、
合米四石壹斗五升
外米貳斗者、
一能米三升五合七勺五才へリ篭、御霊前、出家衆五人、相伴壹人・調菜一人・宮仕一人・仕夫二人、
一能米五升五合ハ右同御酒米、

一能米七升五合ハ錢ニシテ五百文、出家衆五人一日布施、
一能米貳升ハ味噌壹升代□塩之代籠、
一能米壹升五合ハ萬海苔・豆腐代、
右者、妙崇大姉毎年四月廿三日正御月忌一日分調料也、
右者、妙崇大姉霊前爲日牌料被相付候、於後代吴儀有間敷者也、
寛永四年丁卯十一月日

町田弥兵衛尉(花押)
肥後長次郎(花押)
否笠刑部少輔(花押)
町田勘解由次官(花押)
町田甚兵衛尉(花押)

永福寺

○寛永五年戊辰、隅之帖佐郷住吉村住吉神社再興勸進棟札之中

一青銅貳貫文　　町田梅千代丸
一同　貳百文　　町田圖書頭後室

○寛永五年十二月十六日、嚮　家久公降旨使久幸後室侍養忠尚左右提挈、今日町田久興上四箇條之狀、取進止於官、事見于次、

○三九〇　町田久興覚

『在家蔵』

一梅千代殿御側ニ後室可被寵居之由、去年自御(ママ)奥衆承被相調候、以來も御側へ被召置候者居所之事、
一財寶以下細〻之諸道具迄、不殘帳面相記召置候事、
一家中之様子題目之儀者、御名字中へ致談合相調候、諸事存寄之儀共、爲壹人申定候、何茂不指置、御爲と存下知仕候、自今以後之儀者、如何之可仕哉、公儀之御意次第可仕候事、
一梅千代殿御若年之故、諸事御吴見申上候、其故者、用捨仕自然も御氣任御座候へ者、御爲も如何〻敷候故、遮而御吴見共申上候事、
一拙者身躰落着之儀如何候、可仕之通御侘申上候事、
以上
(寛永五年)辰雪月十六日　　町田弥兵衛尉

○寛永八年辛未正月、　家久公在江戸、忠尚及久幸之未亡人前遣使候問　家久公起居、今月廿四日、公賜未亡人書、是歳六月二日、　公以忠直・忠紀二公子發江戸、七月至國、而以賜書於未亡人、為本年之事、因置于此、

○三九一　島津家久書状

『在家蔵』

尚〻、このかた申へく候まゝ、心やすく思ひ候へく候、よろつくう上に申候、かしこ、
立かへるあつまの春しつかなるそらつくしもおなしことふきと思ひやり候、梅もしよりも使をさしのほせにて、まんそく申候、此かた一しほぶしの事候へく候、やかてくたり候するまゝ、留す中つゝかなくこゝろをそへ候へく候、又〻、かしこ、

（寛永八年）
正月廿四日
（上包）　えとより
いゑ久
町くうしつ　まいる

○寛永八年辛未二月、忠尚重建石谷邑諏方大明神社
在飛松、傳見上高久譜、載棟札二枚于左、

○三九二　石谷邑諏方大明神社宝殿棟札写

奉重造立諏方大明神寶殿一宇、
右奉爲天長地久　御願圓満、殊者大檀越町田梅千
代殿久次息災延命　身心勇健　武運長久　領内無
事　一切災難　自然消除、心中諸願皆令滿足故也、
仍意趣如斯、
導師權大僧都殿也認之封
大工　井上筑後守
小工　岩下伊豫介

寛永八年辛未二月吉日
奉行　町田彌兵衛尉
町田掃部助
總役人　脇田貳兵衛尉
當役人　四本主殿助
河越三左衛門尉
検者　古木右京亮
右同　四本伊右衛門
大工　岩下大右衛門
社人　前田傳左衛門
大宮司町田門　武聞權右衛門
役人　杢右衛門
同　加治木六右衛門印
中押　折田丹下印
鮫島彌左衛門

○三九三　石谷邑諏訪大明神社再興棟札写

奉再興諏方社頭一宇

右奉為天長地久、殊者町田梅千代殿御壽算長命
身意健固　呪詛怨念　皆悉都除　君臣敬愛　上和下
睦　官位福禄増進自在　家内安全　恒受快樂　一
切所願如意滿足矣、仍旨趣如件、

導師法印鑁也認之、
大工　井上筑後守
小工　岩下伊豫介

寛永八年辛未二月吉日
奉行　町田彌兵衛尉
町田掃部助
脇田貳兵衛尉
總役人　四本主殿助　封
當役人　河越三左衛門尉
古木右京亮

（高山郷絵図、省略ス）

按大隅肝屬郡高山郷西方村今亡、而其麓前田村有川、川西則呼西方、其東單呼東、士農居焉、水田在焉、而西方田税凡三百三十餘石、南距地頭館可八町、是乃古西方村之遺址云、蓋久幸元和之始為高山地頭、而歿後猶遙領之、雖至忠尚寵之、獨傳領西方村、因令置村長治其産也、西方分界則如開右方、

○三九四　町田久慶外二名連署書状

一書令啓入候、仍兼日從地頭被仰渡候、御諏方御祭礼ニ付、　梅千代殿御名字中へ居頭役被仰付候、就夫、貴老事茂役儀可被相勤之由候之条、早々被差越、役所之賦可被聞召合、　梅千代殿御若年ニ御座候ニ付、我々前より可申越候段、御老中より被仰聞候之間、如此候、餘ニ御延引候之条、又々申渡候、爰元可被差越、往來之夫凡一人、　梅千代殿御領分西方村被仰付候、爰元へ滞留之飯米等も、役人前より可致校量之由候、役所之賦日記別紙ニ相添進之候、何そ差合之儀無之、於被相閉目者、來月廿日ニ鹿児島へ被成參着、可被相勤候、

此返事急度可承候、若又其元より便無御座候者、
高山西方村役人迄、早々可被遣候、爲御存知候、
恐惶謹言、

六月廿四日　　町田弥兵衛尉
久興（花押）
町田勘解由次官
久時（花押）
町田甚兵衛尉
久慶（花押）

町田安房介殿
人々御中

寛永八年六月廿九日、麑島愛宕山修理勸進之中
青銅五百匹　　町田梅千代丸

寛永八年七月三日、久幸之後室税所氏卒税所宮内少輔篤正之女也、法名花窻了榮大姉、合葬于麑島福昌寺久幸之墓、置牌于石谷永福寺、萬治二年己亥二月十日、建六地藏塔于永福寺、以資了榮大姉之冥福、

○寛永九年壬申春、家久公光降于忠尚時梅千代丸新橋之第、加梅千代丸首服、更名出羽守忠共、御家老島津下野守久元代　公加冠焉、　公賜忠共御鯛及御太刀・御脇指各一腰、　太刀劍匠備前國盛光有銘、身長二尺三寸五分有皿漕、背脊有切交痕、縁頭紫金紋合九、鐔鍜金釦紋合四、目貫・蟷螂・笄居物亦同、鞘灑金（シャクトウ）切金紋十四、芝引輪金紋合十一、鎺紋二切透、脇指相州秋廣有銘、身長一尺二寸、縁頭紫金紋合五、鐔四分一紋鏤合五、目貫・笄・鎺等同太刀、鞘装飾亦同太刀、但紋五、芝引輪金紋九、以上紋皆十文字、與目貫・笄及迫羽並純金、唯下鎺金裏（キンキセ）凡太刀柄頭云青金、鞘尾云石衝等見眞太、刀裝、然以不通俗不注玆、　是時忠尚生而十二年矣、

同二月十八日、　公發麑島如江戸四月至江戸、

町田大概記曰、　黄門様被成御下國、前之島津下野殿・比志島宮内少輔殿より町田弥兵衛、下野殿在所江被爲喚承候ハ、梅千代殿御身躰を請取申、取立可申之由承候、其時分迄者、　御曹子様何も御威嚴之躰に御座候、其上兵庫守殿・式部様之御次にて御座候、玄蕃様・安藝様御ためにハ一御増にて御子様にて、中々弥兵衛一人にて請取申、取

立申事罷成間敷候由、遮而御侘申上候、有三日承候、弥兵衛侘申上候得共、其上にも頻被仰付候由承候、左様ニ御座候者、誰そ町田殿名字親類之間、一人被成御添、参會取立可申之由申上候、其儀も被爲申上候得とも、弥兵衛一人に被仰付之由承候、無了簡領掌申上候、夫ニ付、神文被仰付、其趣ハ町田殿家次に梅千代殿と被成御定候、随分精入申取立、町田之惣領に可相守候、若又名字中之者吴儀申人於有之者、御披露申上候得、　御公儀より曲事之段可被仰付候、右之趣を以、神文仕指上候、夫より御公儀より市來掃部殿以御使承候様子、弥兵衛事梅千代殿請取申、取立可申之由被申上候、雖爲御子我子と存、幼少之儀に候条、御憐を存不断御傍に相添可申之由承候、依其儀、夜白辛勞仕候、次第に御盛人御座候故御元服、梅千代殿御在所に御成を被申上被成御元服候、烏帽子親ハ前之島津下野殿被成御當候、梅千代殿御名出羽守殿ニ御請領御座候、但十二之御歳之事也、

○忠尚幼時寫字手痕、至延寳中、與家臣森山長太夫為笥藏、騰録于後、

○三九五　町田忠共書

『家臣森山長太夫藏』

獨逢堯典日　再都漢官時　未效風霜動　空漸雨露

私　夜鐘清萬戸　忠共

（朱印）

○寛永九年八月十九日、　公擬出師兵賦各置番頭、自一番至四番各一人、五番中軍大凡頭歩合八千餘人、旗弓銃鎗称是、忠尚分限、兵賦乗馬八騎、合歩卒為百廿人餘、

○三九六　島津氏軍役賦抄

寛永九年、從東表御出陣之時

五番御旗本　　御昇百五十本

一御乗馬　　一御弓

一御鎗　　一御鉄炮

合人數貳千六百八拾一人

一乘馬八騎内廿五人ッヽ、合百貳拾人　町田出羽守殿

（本文書ハ「旧記雑録後編五」五六一号文書ノ抄書ナリ）

○寛永十年癸酉二月八日、忠尚招延福昌寺廿七世奪叟全珠和尚於次第、以修王母月庭榮秋庵主七回忌

庵主以寛永四年正月廿四日掩粧、而修七年忌、以二月八日者、正忌日有以、故用翼月八日耳、

是時奪叟法語、載左方、

○三九七　月庭栄秋大姉七回忌塔婆銘写

月庭榮秋大姉七回忌塔婆銘

大智徳勇健化度無量衆、今此諸大會及我皆已見演暢實相義、開闡一乘法、廣度諸衆生令速成菩提、伏以日域薩州麑府居住藤氏貞女月庭榮秋大姉相丁七周諱旦、孝孫子摘十真如花、獻八功徳水、就于私宅勒修多般法供養、懺摩也、誦經也、法語也、如法白業善盡美盡矣、既散筵次、一箇老塔婆出來卓然立云、我是今日教主無動如來全身也、救濟大姉七周年前迷倒畢、即今現前此所、予驀咄云、善果是善業、至矣、極矣、　右竊惟、秋大姉智夫齊后、悟總持尼、生前者久守孤燈堅政貞女之道、没後者淨磨心鏡、親入真佛之基、了々也了知々也知到這裏求甚麼忉利卒陀、天香馥郁清淨土、説甚麼泥犂奈落、野草芳菲涅槃崖、明々白々快快奇奇、這箇且置、夫向何處得仰瞻今日教主、平等利濟真慈、頌曰、　惠日光和破癡暗、七年夜雨始晴時、櫻花帶露、活真佛偏地春風見妙儀、咄咄咄、

寛永癸酉暦中春初八日　施主敬白

○寛永十年癸酉三月十三日、忠尚時忠共重建前谷山王社大山祇命・天滿宮菅原丞相・春日社天兒屋命之三祠、

○三九八　前谷山王社再興棟札写

奉再興山王御殿一宇、

右、為護持施主藤原忠共如意安全也、

寛永十癸酉三月十三日

町田彌兵衛尉久興
宮原吉兵衛尉景辰
大工
井上筑後介
導師權大僧都鏝也敬白封、

○三九九　天満宮再興棟札写

奉再興天神御殿一宇、
右、為護持施主藤原忠共所求成就也、
町田彌兵衛尉久興
宮原吉兵衛尉景辰
大工
井上筑後介
寛永十癸酉三月十三日
導師權大僧都鏝也敬白封、

○四〇〇　春日大明神御殿再興棟札写

奉再興春日大明神御殿一宇、
右、為衆護持施主藤原忠共所求成就也、
當奉行
町田彌兵衛尉久興
宮原吉兵衛尉景辰
大工
井上筑後介
寛永十癸酉三月十三日
導師權大僧都鏝也敬白封、

○宮原吉兵衛平景辰者、　太守家久公側室之父、而忠尚之外祖父也、忠尚嗣續町田家猶幼孩、是故生母宮原氏就吾之第來而擁毓忠尚也、　公命景辰為町田氏中抑、以與知家政、忠尚給景辰田禄三十餘石、既而景辰無男、忠尚以某嗣焉、子孫遂為町田氏家臣、寓居川邊郷、

○四〇一　町田忠共書状

『家臣宮原源左衛門藏』
一書申候、然者、貴所跡目之儀、此方ヨリ可家續相定候条、其分別可有之候、就其、家財等も散候ハぬやうニ可有之候、爲其如斯候、恐々謹言、
八月六日
町田出羽守
忠共

宮原吉兵衛殿
まいる御宿所

○寛永十一年甲戌二月、忠尚時忠共再建伊集院土橋村
町田邑鎮守社傳見上、梅吉譜

○四〇二　土橋村町田邑鎮守社再興棟札写

奉再興當社鎮守御殿並拝殿一宇、
右、奉金輪聖皇天地長久、御願圓満、殊者信心大
檀主源氏忠共御息災延命、身心堅固、御子孫連續
武運長久、一切凶事皆悉消除、殊領内安全、郡村
豊饒故也、

當奉行
町田彌兵衛尉久興

寛永十一年甲戌二月吉日

法印權大僧都成弁白敬

導師

當所大宮司
四本彦左右

當役人
加治木勘兵衛尉

作事奉行
加治木慶左衛門尉

大工
梶原右衛門尉

小工
井上筑後守
木下與右衛門尉

○寛永十一年甲戌二月、忠尚時忠共再建伊集院土橋村
町田邑福島大明神社福島明神見、上梅吉譜

○四〇三　土橋村町田邑福島大明神社再興
棟札写

奉再興福島大明神御殿一宇、
右、奉金輪聖皇天長地久、御願圓満、殊者信心大
檀那源氏忠共御息災延命、身意勇健、家門繁榮、
子孫連續、武運長久、領内安全、

當奉行
町田彌兵衛尉久興

寛永十一年甲戌二月日

法印權大僧都成弁白敬

導師

當役人
加治木勘兵衛尉

作事奉行
加治木慶左衛門尉
梶原右衛門兵衛尉
當所大宮司
四本彦左右
大工
井上筑後守
小工
木下與右衛門尉

○四〇四　阿多忠充・町田久興連署書状

福島大明神、寛永十一年甲戌二月吉日、再興遷供之時、從昔之棟札、古之御社ニ捨置候、右、御遷供之時、此一枚之新棟札計調置候、古之棟札新社ニ不入置候、大宮司四本彦左右之咄にて候、慶安三年庚寅正月廿七日、見究也、此棟札之外ニ棟札無之事、書札一枚相加候也、以上

町田彌兵衛尉久興　判
阿多才左衛門忠充　判

○四〇五　町田久興書状

寛永十一年甲戌二月吉日、遷宮之時、鎮守之宮之内、福島大明神御社直置候、本〻者東之方別拝殿作有之、其節拝殿作難成ニ依、先〻鎮守之拝殿ニ御社移置候、後日御闔御申候而、如昔別ニ被成拝殿作、其内ニ御社ヲ御移可被成候、町田殿役人衆後日其催共有之事、可爲肝要候、爲後日ニ候、以上、

慶安三年庚寅二月四日　　町田弥兵衛記之也、

○寛永十一年甲戌四月四日、令伊勢貞昌降旨、班賜領邑諸公子及一所衆、各拈闔以随其所自取也、

○四〇六　島津家久袖判条書抄

御袖判覺

一今度喜入久右衛門・伊勢右京亮を以被仰上候條〻内、御支配闔取ニ不成衆御座候間、賦付ニ御談合之由被仰渡候間、其由致言上候處、御子様達并奥方之御知行之儀、闔取と被仰出候上者、一所衆并誰人ニ而茂闔取之沙汰たるへき由、被　仰出候ニ

付、条々　御意之旨被仰遣候、

一御子様達之内、　又八郎殿御事者、加治木を一所ニ御給候故、惣御高之内三分二を加治木江被進、殘高者惣并之可爲闔取之事、

一式部太輔殿・玄蕃頭殿・町田出羽守殿・根占安藝守殿御居所之御知行を近所ニなされ、中途遠方之御知行可爲闔取候、知行之割損シ、諸士可爲同前候、御賦付ニ御給之知行、上中下被引合、可被相賦之事、

一一所衆者、右御子様達御同前之可爲御沙汰候、最前如相定候、北郷殿・種子嶋殿儀、闔取にて者有之間敷事、

一奥方之御知行も御子様達之御知行之なミたるへき事、

右之條々、以　御意此元談合相究、被成　御袖判候之間、此趣能々可被入御念候、

寛永十一年卯月四日　　伊勢兵部少輔

菱刈伴右衞門殿

村田郷左衞門殿

（本文書ハ「旧記雜錄後編五」七〇五号文書ノ抄書ナリ）

○寛永十一年田地丈量既畢、　公出法令十六條、班田制禄、謂之配當、先是、令收世禄百石以上四分一百石以下三分一、至是、百石以下亦準四分一例四分一即二分半、而寺社不與焉所謂半地上地也、

町田大概記曰、出羽守殿最前二千斛御給之知行、十一年被成御格護候、然處、寛永十一年御支配相替候時、千斛從　御公儀被召留千斛御給候、其時分島津下野殿より御主取支配頭ハ山田民部殿、此通之躰ニ候故、最前御給事出羽守殿御子之故如此之、町田殿より訴訟なとにて御給之知行にてハ無之候、其上多年出物彼是惣別出羽守殿御軍役少茂御懈怠無御座候、無子細處、知行を被召上事前後無之候、依此儀、遮而弥兵衞前より御家老衆江申上候、御返事自江戸相定候仕合、仁禮藏人殿江戸に御參候、黄門様江被仰上可然之由承候故、仁禮

藏人殿に佐土原八右衞門相附、伊勢兵部殿江申のほせ候、尤之出羽殿御申分被爲承候、然共千斛御留之由、　黄門様被御聞召上候条、此節ハ可爲如其候、御國に　黄門様御下向之時分、右之御申分可有御披露之御返事、兵部殿八右衞門を以被仰下候、從夫、御下向以後、　黄門様も多年御煩之故、其以後御寺領とも出羽守殿御座候、其上依御煩御奉公も無御座候、如斯之躰にて千斛之知行之御侘言も不罷成躰に候、此故、千斛計于今御格護御座候事、

○高柳家傳曰、高柳好左衞門者、本姓津曲氏、始稱順素、大隅曽於郡郷士居于松永村、幼而家貧因出仕於忠尚、剃髪為小坊主、禀性伶悧、太守光久公亟臨止于忠尚第之日、輒見之曰、奇童也、遂召而令侍左右、既而命遣京師、就道正菴學醫殆十年許、業成而歸來、則學侍醫、給禄若干石、後復命畜髪更賜名氏稱高柳好左衞門、知御藥園事矣、好左衞門娶林祖球之母妹、無子、乃養祖球之女、而妻之平田某、為己之嗣、是稱高柳好左衞門、高柳家之出身係始仕于忠尚、因附録

（表紙）

廿一代
忠尚第
二
寛永十二
至同十九

町田氏正統系譜　三十

藤原姓町田氏正統系譜巻第三十忠尚二

○寛永十二年乙亥二月、　家久公留滯伏見之際、
儲君光久公之嫡孫虎壽丸君病痘、二月十三日發伏
見、同月下旬至江戸、忠尚遣使陳賀、三月二日
家久公賜答書曰、虎壽丸罹痘、然今既回復矣、莫
復懸念也（虎壽丸君即綱久公、寛永九年壬申華誕于江戸、是歳甫五歳矣）

○四〇七　島津家久書状

『在家藏』
爰元爲見廻使者、殊虎壽丸疱瘡かろき由、聞得候
哉、無殘處被致本復候間、可心安候、謹言、

三月二日　　家久（花押）

町田出羽守殿

○本田隼人佑親紀後稱伴兵衛、本宗信濃守重經之裔、
親紀嘗學自顯流刀法于東郷肥前守重位、研精而極
蘊奥冠絶流輩焉、今覽忠尚之狀、則親紀試闘劍術
比校高下事也、

○四〇八　町田忠共書状

尚〻、扨〻刀を被取候時之仕合幽合、攝州ノ
咄を承驚申候、一しほ〳〵兵法之きとく申ニ
不及候、又肥州者黄門様まへにて、節〻御物
かたり共被申候、黄門様ことの外、こふうひ（御褒美カ）
申て候、以上、

書中委見申、仍貴所之手いたます由、滿足此事候、
急度仕立候て指出可目出候、次者、先日約束儀承
候、必〻十日より内に首尾可申候、今日爰もとへ

御座候間、委敷申候間、別儀有間敷候、必ゝ仕企可有候、色ゝ物語共可承候、恐ゝ謹言、

卯刻　　忠共（花押）

（上包）

隼人佑殿　　町羽州より忠共

御宿所

○寛永十二年、査點宗門、初製手札、人與一枚、以布管内、為大禁耶蘇法故也（按孝德紀白雉三年、編造戸籍、録民元數、此即手札之漸也）、是歳　公如江戸、龜七月櫻田邸火、

○寛永十三年丙子六月十八日、　家久公至自江戸、今月有以三原左衞門佐重庸（時重銑）女可配忠尚之命、翌日、　公亦臨於忠尚第、設吉席行婚儀、　公姫賁臨（公姫即忠尚之女兄、長今年十九、中寛永十一年蚤世、叔今年十七、然則長姉・叔姉之中耳）、　公賜忠尚御太刀一腰（劍匠等不詳）・錢一百貫文・加奈入十件・酒鍋十口、忠尚亦獻　公白金廿枚、今日會者、伊勢兵部少輔貞昌・三原左衞門重庸及妻、此佗上臈・宮人、侍筵洗塵、　公姫彈箏滿坐洋々焉、　公卜夜携姫君而還御、越明日、忠尚登麗城謝恩（重庸女今年十四歳、母鎌田出雲守政富女、寛永十五年産一男子、竟無子、天和三年癸亥八月廿七日死、年六十一、法名慈心潮音大姉、然而町田家墳寺無墓、又不厝位牌、蓋忠尚為重庸所詿、去其女大歸重庸之家、因終其宅者云）

町田大概記曰、出羽守殿御縁中、於江戸三原左衞門殿御料人、從　黄門様御定御座候、出羽守殿御年十六、奥方様御歳十四、　黄門様從江戸御下國御座候而、無程御祝儀を被　仰出候、御祝御座候、式正之御祝儀にて、御包丁人石原佐渡介御きやうの膳被相調候、御祝儀あり、次ゝ日、　黄門様被成御出、御料様其日御跡より何も被成御出候、黄門様より鳥目百貫・かな入十かん・鍋十・御腰物一腰被成御給候、出羽守殿より御進物銀子廿枚、其日御座御參之衆、伊勢兵部殿・三原左衞門殿夫婦、其外歴ゝ女房衆餘多被爲參候、終日之御祝にて、御料様御琴共被遊候、殊之外美ゝ敷様子ニ而、其日之晩に、　黄門様・御料様被成御歸館候、御仕合無殘所何へも、出羽守殿より引出物鳥目被指遣候、以上依御祝儀、銀子三貫七拾目餘入申候、

其時之役人町田喜左衛門殿・佐土原八右衛門殿ニ
而候、右之有御祝儀、
○寛永十三年丙子十一月十三日、以石谷水陸田二石
五升、為先人久幸之室花窻了榮大姉毎月忌料且七
月三日正忌日齋供、佐土原八右衛門・町田喜左衛
門連名寄附状、以授于石谷永福寺、

○四〇九　町田喜左衛門・佐土原八右衛門
連署寄進状

知行目録

石谷村之内
岩下四十七間十間　壹反五畝廿歩せ町三十三間　時壹斗八升八合　籾八表之内
下田壹反四歩　赤籾四表三斗四舛　小牧門之内　大藏助先
慶すた
下畠廿貳間十八間　壹反壹畝六歩　時壹斗五舛八合　大豆壹俵三斗壹舛　浮免之内　志摩丞先
合籾大豆六表三斗
高ニシテ貳石五升ハ

右者、了榮大師爲御月忌領、此度相定候、毎月三
日、但七月三日正御月忌、御霊膳方無懈怠慇懃ニ
可被相勤候、此中以俵子御月忌米雖相渡候、爲後
年御知行從當納被相付者也、
寛永十三年丙子
十一月廿三日
出羽守殿役所□（黒印）
佐土原八右衛門○（黒印）
町田喜左衛門□（黒印）

永福寺

○御家老鎌田政統等六人連署告忠尚以勸農善田、凡
其須要墾闢（タヒラキ）而莫敢穢蕪（アレチアルコト）、或農夫懈春耕、欺詐不可
夏作、或貪欲訴低税則者、宜召捕犯人于本府驗問
其實否自程決事也、蓋寛永十一年、班田以後頒斯
律者乎、

○四一〇　島津久慶外五名連署書状

『在家藏』

尚〻、去年与作人不相忍候様ニ堅可被申付候、追而申候、去年作り候地を當年作ましきと申者ハ、鹿児嶋へ被召寄、遂糺明、作人非分ニ究候ハヽ、其所可有追放候、以上、

急度申候、仍御藏入給人持ニよらす田地不荒様ニ堅可被仰付候、或古荒・新荒或崩成等之所、可成程仕付候様ニ可被仰渡候、春始ニハ田地之沙汰兎角不申出、夏ニ成作申間敷通申出、代成をさけ可申、たくミ仕候ハヽ、御藏入ハ下代衆給人持せ、領主より可被申出候間、可有其沙汰候、恐〻謹言、

正月九日

鎌治部少輔□（鎌田政統）（黒印）

山民部少輔○（山田有栄）（黒印）

三左衛門佐○（三原重庸）（黒印）

川因幡守□（川上久国）（黒印）

圖書頭□（島津久通）（黒印）

彈正大弼□（島津久慶）（黒印）

町田出羽守殿
御役人中

○寛永十四年丁丑九月、肥前島原・肥後天草妖賊蜂起、凡男女三萬七千餘口、皆耶蘇之黨也、我公遣兵會官軍、三原左衛門佐重庸引藩兵如島原、

○寛永十五年戊寅正月六日、忠尚奉旨出歩卒乘馬、従島原之役、本月、三原重庸與總軍攻賊所據原城、射殪數人、島津下野守久元擁兵戍天草（二月久元従公至自江戸而歸軍）、

○四一一　島原立乘馬并在賦帳

（寛永十五年）寅正月六日

島原立ニ付乘馬并在賦帳

鹿児島賦所　黒印

町田弥兵衛尉殿

町田出羽守殿より出、

一乘馬壹疋、但陣場ニ通馬、

一中間貳人、同

一兵具持四人、同　但詰とほし、

一詰夫三人、同

町田出羽守殿より出、
一乗馬壹疋、但舟元迄、　浦川内藏丞殿
一同中間貳人、
島原軍衆人數差出し留、
正月十六日、米津江參着候、
一夫丸貳人　　岡村治右衞門殿
右者、出羽守殿より被立候、右被召列候愛甲次郎
右衞門殿指出有、

○寛永十五年二月、　光久公至自江戸、以　太守公
病大漸故也、二月廿三日、　太守從三位中納言家
久公薨於廳城、春秋六十三、葬福昌寺、本月廿七
日、上使松平信綱統率官兵陷原城、鏖賊無噍類、
是歳三月十七日、　光久公如江戸、夏五月八日、
公襲封、同十三日、　公見於　大將軍家光公謝襲
封事飛報于本藩、於是、忠尚馳使江戸、以賀慶、
同年七月、從行邸御家老伊勢貞昌・島津久元遺本
藩留守御家老鎌田政統・三原重庸・山田有榮・川
上久國・島津久慶書曰、從町田出羽守殿使者被成
進上候間、幸ニ存一書令啓候ト云云、下略、蓋附書
忠尚使价還郷也、

○寛永十六年己卯、忠尚領伊作地頭職阿多郡、夏六月、
光久公至自江戸按寛永元年賜忠尚伊作者領田祿耳、已而去年公即位、今歳歸藩、故特命忠尚地頭職
也、

○寛永十六年二月廿五日、　光久公奉納百韻連歌公發
句一首於日向諸縣郡吉田郷天滿宮在鶴田村、俗省呼水流村、　忠尚
預焉于時忠共、凡十首、按是歳　公在江戸、蓋以昔日
所興行、今日納之當廟也、又按曩時天正十六年五
月廿五日、　義久公作國雅十首納諸斯廟、蓋有掲
焉之縁故者也社司押領司氏、別當觀音寺

○四一二　賦山何連歌

『諸縣郡吉田天滿宮社人押領司某藏』
寛永十六年二月廿五日

賦山何連歌

松に梅えたをつらぬる井垣哉　　光久
春のあらしになひくしらゆふ　　忠直

寒かへる雲ハ高ねに消やらて　其阿
いりかたなれや有明の月　忠共
音せしも降通りけり秋の雨　忠政
田面のはらの色付るころ　久加
せきわかつ流れを遠ミ霧こめて　重國
すむさとならしミちの末〳〵　忠通
鐘ひゝくかたにとひよる旅の宿　元綱
やゝ暮かゝるをちの山もと　重位
幾度か時雨の雲のきほふらん　祐辰
柴の戸さしハあくるともなし　宗綱
朽殘るかけひの水の音すミて　忠直
つくりあらせる岩のはさま田　其阿
ところ〳〵露に真菅の亂あひ　忠共
秋をかけつゝほたる飛かふ　忠政
月待てやすらひならす道の邊に　久加
風の涼しさたもとにふるゝ　重國
くむ酒に酔るまハたゝしはしにて　忠通
立まうからにうたふ一ふし　元綱

老をさへわすれてめつる花の陰　重位
とをさかりぬるうくひすのこゑ　祐辰
さひしさハあたりの野への春暮て　其阿
風うらゝにもわたる山あひ　忠直
さしなかす舟ハ竿にや任らん　忠政
明はなれたるそらの遠近　忠共
きけは今それかはかりの聲なれや　重國
霜をきまよふかけの松むし　忠通
月ひとりすむよもきふの秋更て　元綱
あるかなきかの道の一すち　重位
よむうたのをろかなるこそはかなけれ　祐辰
神にいのりをかくる折〳〵　其阿
難面もおもひすてしとにかわらひ　忠通
あひ見んまてと惜む玉のを　元綱
うけぬへき法にこゝろを留しきて　重位
ひま行駒にまかせぬるミち　忠政
まなくしも時のつゝミを聞馴て　重國
學ひにうとき身をいかゝせん　忠通

あさからすひめ置ミちの教にて　忠直
たゝしく家をゆつるこのかミ　重位
菊かほる籬に梅のうすもみち　元綱
山ちはきりのいとふかくなる　其阿
川音もやゝすさましく成けらし　忠共
波にうつろふ月ほのかなり　祐辰
夕露やひろふ藻くつ置けらし　忠通
袖さむかれやかりふきの庵　忠政
つらしとてなをさりに世をいとふなよ　重位
行すゑをのミたのむかねこと　重國
かハらしの妹せと花に契りきて　其阿
かすめる雨もはるゝ半天　忠共
なかき日のまたきにいつる旅衣　祐辰
越へき山は幾重たかけん　元綱
とにかくに捨はてん身もさすかにて　忠政
いますへらきのめくミある時　重位
見ぬ鳥を待えしおりや稀ならん　重國
絶せぬ國のをきてかしこき　忠直

ことのはをつらぬるこそハやすからね　忠共
いつれとかせん春秋の月　其阿
夕霧もかすミも花に色消て　元綱
真木たつ山の風長閑なり　忠通
やよひより駒音しらする郭公　忠直
遠さと小野の明すくるころ　忠政
折立やうちつれて行田子ならん　重位
みとりに續く竹のしたミち　重國
はる〳〵と落ぬる水の音ハして　其阿
またき暮ぬる谷の戸のうち　忠共
灯のひかり常なるたか野てら　忠通
佛となふるこゑそたへなる　重位
衣手に降つもりぬる雪の色　忠政
かへる木こりの道いそくなり　祐辰
暮てしも月またをそき岩傳ひ　忠直
まくらの夢さそふ小男鹿　重國
野わきたつ明石のなみにとまり舟　元綱
ミきハひたしてみつる塩とき　忠通

たまほこやおもハぬかたにふミ替て　重位
人目をしのふ恋の哀さ　忠政
はちらふまたハかけなきほとなれや　忠共
くせとなしつゝまろねをそする　其阿
おこなひにをこたらぬこそ道ならめ　忠通
君とひとゝのえにしをもしれ　重位
身のさちハたゝそれそれに生死て　祐辰
とめるゆかりのかとそならへる　重國
爰かしこちまたを餘多わかち置　忠共
めくるまつりのけふやあをかん　忠政
をしやるやかさり車のかけならし　忠直
萩すゝきおるかへるさの袖　元綱
月すめる野もせのミちの露しけミ　重位
いかはかりかはすたくむしの音　其阿
あかなくにやすらひかりの小鷹狩　忠政
水瀬のかたは暮そのこれる　忠通
するゑ〳〵もなを白妙の瀧つなミ　元綱
かきりありてやはるゝ五月雨　久加

物いミの日數のほとやつもるらん　祐辰
あさの衣をぬきも捨けり　其阿
おもハすも年ふるさとにかへりきて　忠政
千ゝ咲花の春の明ほの　忠直
こなたかなた轉りいつる鳥のこゑ　忠共
雲の絶まにをそき日のかけ　元綱
旅人のいそくわかれよまてしハし　忠通
まりのすさひに絶ぬくつ音　重國

光久一句

忠直九
其阿十一
忠共十
忠政十二
久加三
後忠通十二
前重國十
元綱十一
重位十二

祐辰八
宗綱□(一)

○寛永十六年三月、先是、支藩日州佐土原領主島津右馬頭忠興以寛永十四年六月卒于江戸年三十八歳、世子萬壽丸生五年矣、嗣忠興之遺領在于佐土原後稱島津但馬守久雄、忠尚時忠共之婦翁三原左衛門佐重庸欲以忠尚為佐土原番代攝行國政、陰誘忠尚使請於萬壽丸祖母祖母即忠興之母、松木三郎五郎清遙之女、忠興即太守貴久公令弟右馬頭忠將子島津右馬頭以久之嗣、而祖母是以久之末亡人也、於是、忠尚議事于喜入攝津守忠政、忠政允答曰、可矣、不如先謀諸夫母堂然後告令兄式部大輔忠直也、遂謀及于婦人、母堂蓋謂萬壽丸祖母乎、忠政答書如後書中藝州即家久公第八之子島津安藝久雄也、寛永十一年六月出後於島津中務忠榮、始賜永吉邑

○四一三　喜入忠政書状

尚〻、式部様へ御内意可被仰と承候、尤存候、先御懐へ御内談候て、其後式部様へ御申被成可然かと存候、以上、

芳墨具拝見申候、必明日之六時ニ我〻も藝州様へ參可申候間、御出可目出候、定從藝様も被仰候ハん、連歌即請取申候、一段面目御座候、何様明日可奉得御意候、誠惶敬白、

三月廿六日　　忠政判

出羽守様　　喜入攝津守
參御近習中　　忠政

○寛永十七年庚辰五月、光久公如江戸、忠尚欲從行、或者厄之矣、或者蓋島津彈正久慶也、三原重庸嘗欲與同列議番代事、嚮與島津彈正久慶失歡(トカアシ)、恐渠不從、乃密誘忠尚、使推説(カコツケ)喜入忠政所勧、又遣私書於伊勢兵部少輔貞昌、託以彌縫掩飾之寛永十八年四月二日貞昌卒于江戸、

○四一四　伊勢貞昌書状

今度御使被差上ニ付、御書中之旨具令拝見候、然

者、町田出羽守殿より貴老江御用之由候而被仰請、御熟談共候つる哉、彼一儀、喜攝州内談共候つる由被仰候哉、從最前其段貴老被仰候旨承候間、此儀者大ニ六ケ敷事ニ可罷成儀と承得候間、御若輩にて爲被仰儀ニ被成置、先御沙汰無之様ニと、式部様江細々申上置候、然処ニ、當年　殿様從其元御上り之時分、出羽守殿可爲御供由候付、此儀於江戸右馬頭殿御懐被思召様も候ハん間、出羽守殿御供者被差置可爲尤候由、從何方欤被爲申上候付、出羽守殿江其様子を爲被成御尋由候、あなたこなたと有之儀笑止ニ存候、乍去、今度攝州へ爲被仰談由、出羽守殿堅被仰候由候間、縦及御沙汰候共、其趣ニ社可罷成候、先々御書中之旨承届候、猶期後音候、恐惶、

神無月十五日　　貞昌

三原左衛門佐様
御報

○寛永十七年、先是、　公毎朝於江戸、公子・公孫之族必遣使陳賀歳節定為例、至是止之（下文新納仲左衛門忠雄蒙家久公命、移居柁木輔相兵庫忠朗、忠朗以寛永十八年六月、為證人如江戸、是歳預乞道中過所、島津久慶與之、其次曰、若夫安藝守久雄・出羽守忠尚等小禄連枝、乃止、歳首上賀慶使于江戸、此蓋今年事故置于玆）

○四一五　島津久慶書状

尚々、早々返事可申之處ニ、今日ハ馬之道うちニ參延引申候、

御狀令披見候、仍形部卿様伊集院江被成御越候處、別而寒申候而、萬事御窮屈ニ御座候つる由、左衛門殿物語承申候、於彼方御代官所調方も相調申候由、御袋様へも被仰上候由、何も忝存事候、然者、江戸江御使御進上之由、則道中之手形相調遣申候、就其、此中貴殿迄可申入と失念仕候、爰元　御連枝様達より、江戸へ御供可有御進上由候得共、餘々大出物共被成候儀ニ御座候間、　玄蕃頭殿御事ハ御高も多御座候条、左様ニ可有御座由候而、御使御進上候、安藝守殿・出羽守殿御事御少高ニ而御座候まゝ、年頭ニも被聞召合、御使御進上可被

成哉と出合申、御使番中其段肝付殿被罷上候ニ、江戸へも申上候、御方之儀も御少高之御子様達より、銘〻ニハいかゝ可有之哉、根占殿なとハ御狀迄を御上候而、歳暮之御祝言被成御申候而者いかゝと存事ニ候、尚期後音候、恐惶謹言、

十一月廿六日　　久慶

新納仲左衛門殿　御報

○寛永十八年辛巳、重庸遣人陰竊喜入忠政之印記、且草所致萬壽丸祖母之誓牒、復誘忠尚繕寫之矯書、將寛永十八年之月日云云、既而重庸之奸謀漸著、重庸危疑不安、計欲帶累他人以自免、併為不知構誣百出、乃歸罪於喜入忠政・島津久慶、不以實聞于上、忠尚亦不察為重庸所賣、一聽其主分朦朧不復早辨、抑尊貴自然寛裕、但不免有驕昏之失、況忠尚幼弱未熟朝廷中法、偏聽僥倖成事乎、是所以惑于重庸之邪説遂致陷夫禍坑者、可慨而已矣、

○寛永十八年、　光久公在藩也、重庸之醜狀已露、不復與政事云（按寛永廿年犬追物手組、重庸父子預焉、非不與政事也）

○寛永十九年壬午正月、　光久公如江戸、島津彈正久慶覘知重庸之情形交渉忠尚、上書訟諸　光久公、公報曰、汝莫過慮矣、余知其起本、還國而後斷之未晩也、

○四一六　島津光久書狀

其後氣色如何躰候哉、寒天之時分候間、別而保養肝要候、然者町田出羽守入組之儀ニ付、其方手前より申分共候而、今度も使來候由承候、是ハ心遣入儀ニ而ハ無之候、其方何かと被申と書物ニ見得候得共、非實儀由候、題目右口事之起候本無紛爲相知儀候間、從何方いかやうニ申人雖有之、手前之儀者、我等請合候間、心安可被思候、先〻緩〻と當病之養生專ニ可被仕候、當時之むつかしき事をなためて可召置とて申儀ニ無之、一途之儀ハ、歸參候砌可相濟と存候、使之返事ハ、從公儀老中衆可被申越候、爲心得候、謹言、

（寛永十九年）十一月三日　光久御花押

嶋津彈正大弼（久慶）殿

（本文書ハ「旧記雑録後編六」二八四号文書ト同文ナリ）

於是、使島津圖書頭久通・川上因幡守久國・新納右衛門佑忠詮・山田民部少輔有榮・頴娃左馬頭久政等執事有司案驗島津久慶與三原重庸之所訟、至正保四年甲申四月、重庸爲專慫慂（スヽメタヽシ）忠尚之元謀人之狀發覺、於是、罷重庸家老職囚諸霧島山華林寺、後徙囚於開聞山瑞應院、乃忠尚亦收伊作地頭職、拘於廳府福昌寺（是謂寺領、即今之逼塞也）、今捃拾島津久通以下案驗告狀及重庸矯書等之斷由（サイキヨガキ）、以備于詳矣（今庭前有一阿彌陀石佛、毎歳七月廿八日、供香華焉、傳称忠尚壯年在新橋邸時、周旋人東清介頗有嫌疑、忠尚使家臣松崎休七刺殺清介、即某年七月廿八日也、清介母大恨之、乃縛佛像、浸諸不潔、以呪詛忠尚、後因設斯石像、宥其怨魂云）

○四一七　島津久通外八名連署裁許狀

一萬壽殿番代町田出羽守殿望之由、被仰遣狀被相認候、本人三原左衛門佐企にて候と承究候事、

右證據

一最前北郷佐渡守・山田民部少輔を以出羽守殿江御尋之時、出羽守殿より三原左衛門佐以催促、右之狀江戸江被遣之由御申候、其段〻右両人聞書御座候、此意趣、後日相替儀有之間敷と存候事、

但其後之謀書ニ彈正企之由御座候得共、はる〳〵以後之たくミと見得候間、最初之意趣、相替儀ハ有之間敷と存候事、

一出羽守殿内儀左衛門佐娘より、右之狀は親左衛門佐企之由、書物有之候事、

一出羽守殿與力佐土原八右衛門最前右之狀、江戸江被遣候企ニ付、左衛門佐所ニ便仕候、其時八右衛門より左衛門佐江尋申候者、此儀者御知行なとわかり申儀候哉、いかゝと申候時、其味ニ而者無之候、眤近之衆ニ御なり被成候儀ニ而候と、左衛門佐被申候と八右衛門申候由、北郷佐渡守・山田民部少御使之時、出羽守殿御申候、然時者左衛門佐企之由相知候事、

一出羽守殿と喜入攝津守取かはしの狀之内、出羽守狀ニ、然者、先日大形申候萬壽殿番代之儀、左衞門佐殿より又〻様子共御座候、就其、拙者狀之案文申候つるを直ッ候而參候間、如其書申候、乍去、如何候ハん哉御尋申候、今文言の狀有之事ニ候、是も左衞門佐發起と見得候事、

一萬壽殿御祖母江被遣候狀之案紙、左衞門佐被仕候由、右北郷佐渡守・山田民部少使之時、出羽守殿口上ニ而被仰候由、聞書之内に有之候事、

一出羽守殿より式部太輔殿江起請文被成調進候前書ニ、喜入攝津守催促にて、萬壽殿御祖母江狀被遣候由、一方之旨趣之案文左衞門佐自筆ニ而なほし立被調候、それのミならす直談にも左衞門佐出羽守殿江被申、又町田弥兵衞殿使ニ而神文を被成候得と被申候、然時者、左衞門佐發起無紛候處、攝津守發起と前書ニ被成候儀相違ニ而候、左様ニ候得者、虚神文ニ究り申候、然者、大事之御連枝を空言人になし被申候事、

一最前北郷佐渡守・山田民部少輔使之時、出羽守殿より右江戸江被遣候狀、根元左衞門佐被存候と被爲申上、其後左衞門佐者不被存候、喜入攝津守被存候と、北郷佐渡守江町田弥兵衞殿・同久右衞門尉を以、申なほさせられ候、是も公儀江違變を御申候すゝめも左衞門佐仕なしにて候、

但狀之文言にハ、一儀と御座候色者不見得候得共、此儀者出羽守殿被仰候、又佐渡守金山江不被參内ニ可被仰之由、文章之内に見得候時者、左衞門佐催促と承得候事、

一十五ヶ条書載たる謀書、左衞門佐以校量出羽守殿御認候儀、題目奸謀之本人ニ而候事、

右證據

一彈正煩ニ付、向田江逗留候時、攝津守彼地江被越候由、右条數之内ニ見得候へハ、其時者、向田へ攝津守不被參由候、然時者、此相違歴然ニ候事、

一右条書ニ、攝津守印判を被押候儀、攝津守者少も不被存候事、

一萬壽殿御祖母江之狀參候而之後、江戸より彼儀相聞得候而、寛永十六年卯七月十五日、伊勢兵部少より如此儀相聞得候由、左衛門佐を以出羽守殿江被申候時、左衛門佐初而承候由被申候、然處、右之十五ヶ条書物之日付、同卯七月十四日と候、此儀不被聞以前之書物にて候時者、弥謀書ニ致落着候事、

一右謀書之日付者、寛永十六年卯七月十四日にて候処、攝津守印判失候者、寛永十八年巳四月十四日ニ而候、此間三年相違ニ候、其上、右之印判を被爲取候而、右書物ニ御押候出羽守殿被仰儀印判、税所但馬守・河内織部佑を以、寛永十九年午二月五日、攝津守江被返遣候事、

一右十五ヶ条之内に、誰〻者悪心又者不理運之知行を音なしニ拘置候なとゝ、有之様子御座候、ヶ様成儀者、出羽守は御若年ニ而曽而御存知有まし候、いかさま申手可有之と存候、然者、謀書之根本、出羽守殿ニ而者有間敷存候、

一攝津守印判を出羽守殿御取候儀も、左衛門佐催促爲被申由候、大事之御連枝ニヶ様成比興之たくミを助言被申蔑ニ被仕候、畢竟出羽守殿御身躰を条〻悪様に仕成候、御家之御外聞を被失候儀、左衛門佐分別迄と承究候、其子細者、印判御とり候催促之證文者、別ニ無之候得共、出羽守殿より彈正江被仰分条書に、慥ニ相見得候、其上、謀書之条ニ印判を押候得者、攝津守被存たる儀實正に罷成候通之御工夫、又攝津守被存たるに可成条と成ましき条を心得分て印判を被押候、如此念入候様子を差引候而、深〻敷校量被成、出羽守にて候ハヽヶ様之たくミ御成合有間敷儀と存候、然時者出羽守如被仰候、左衛門佐催促と承得候事、

以上

寛永十九年十一月八日　福屋伊賀守

堀甚左衛門尉（興親カ）

平田狩野介（宗弘）

町田勘解由次官

新納右衛門佐（久詮）
吉利下總守（忠澄）
頴娃左馬頭（久政）
川上因幡守（久国）
島津圖書頭（久通）

町田出羽守殿

○四一八　島津久通外八名連署裁許状

一佐土原御番代之儀、脇之催促とハ乍申、御同意被成、右馬頭殿御懐江御狀被遣候儀、御分別違にて候事、

一右之儀、最前北郷佐渡守・山田民部少輔を以御尋之時御返事ニ、左衛門佐催促之由、堅御申候而、其後又攝津守催促ニ而、色〻被申候由条書を御認候、両舌ニ而候、是も脇之催促之由候得共、一度ならす催促ニ御成合候儀、餘に御緩にて御越度ニ候、殊此条書謀書ニ落着候、謀書とある儀ハ不可然候事、

一攝津守印判を御取候而、右謀書ニ御押候、脇之催促之由御座候得共、是以下〻としても、他人之腰ニ着候而有之物を取候儀者、比興之沙汰ニ成儀候、御兄弟様として別而不似合儀候、御若輩故かと存候事、

一式部太輔殿江被遣候誓紙ニ、一圓攝津催促之由、是も致相違候、然時者、虚神文ニ罷成候、

但脇之催促ニ而御書之由候、其證據者、前書之御案紙之文言を被成候、それに不及、前かた左衛門佐直面ニ而、神文を被成候へと被申、其上町田弥兵衛使ニ而、左衛門佐より被申候時ハ、左衛門佐發起ニ而候間、前書之旨趣相違候、然時者、虚起請文ニ而候間、夫に御成合候儀、不可然候事、

寛永十九年十一月八日　　福屋伊賀守
　　堀甚左衛門
　　平田狩野介
　　町田勘解由次官

新納右衞門佐
吉利下總守
頴娃左馬頭
川上因幡守
島津圖書頭

○四一九　町田忠尚披露状

町田出羽守殿より御披露之条〻留

一佐土原之儀ニ付、彈正殿より爲御使喜入攝津守殿江節〻御出被成候事、

一右之様子、出羽守殿者御若輩ニ而御座候、當分親分ニ而候間、三原左衞門佐殿江出羽守殿より御尋被成候得者、近比可然之由、左衞門佐殿より被仰候、狀ニも又直ニも、可然通左衞門佐殿被仰候事、

一彈正殿より喜入攝津守殿爲使御出之時分、此中使被成候意趣之通、出羽守殿より條書被成、攝津守殿江印判可被爲押候由、出羽守殿より被仰候付而、書物攝津守殿印判被爲押候事、

一彈正殿より以使被仰候様子者、佐土原之儀、彈正殿爲使攝津守殿節〻御方江御出之由候、曽而彈正使ニ頼不申と以使被仰候、就夫、出羽守殿より以歴〻衆、彈正殿江被仰分候、意趣者攝津守殿彈正殿御使と被仰候、扨者御存知候哉、被仰分之通、出羽守殿より被仰候事、

一右之御返事ニ彈正殿より被仰候者、扨者其通ニ御座候哉、右之趣　御公儀江御申被成可然之由、彈正殿御返事ニ而候間、御披露被成之由候事、

午九月十六日　　町田出羽守殿御使　橋口土佐守
右同　加治木彦右衞門

猿渡新介殿
仁禮主計助殿

○四二〇　島津久通外八名連署裁許状

喜入攝津守

一萬壽殿番代出羽守殿被成度之由御企之時分、攝州

より羽州老江之返書、卯三月廿三日之日付候文書ニ、御番代之儀出合候哉御尋、我〻何分と難申上候と御座候、然時者、攝津守發起とハ不聞得候事、一右之儀ニ付、又羽州より攝州江狀被遣候其返書ニ、同三月廿六日之日付之端書ニ、式部様江御内意可被仰と承候、尤候、先御懐江御内談候而、其後式部様江御申被成可然欤と存候と御座候、是を見申候得者、先御懐へ可被仰との吳見一ヶ条、攝州越度ニ而候と、各承居候事、

以上、

寛永十九年十一月八日　　福屋伊賀守
　　堀甚左衛門
　　平田狩野介
　　町田勘解由次官
　　新納右衛門佐
　　吉利下總守
　　頴娃左馬頭
　　島津圖書頭

○四二一　町田忠共書狀

尚〻、彼条書一巻持せ申候、左衛門佐殿江一覽候様ニと可被仰候、以上、

嶋津右馬頭殿御死去之時分、御番代之儀付而、三原左衛門佐殿之御吳見ニ付、番代之儀、我〻爲申由出合候哉、少も非其儀候、惣別、喜入攝津守殿御吳見ニ而候、其上、彼方差遣候狀之案文迄、攝州老調候間、此旨御両所より、左衛門佐殿江被仰分候而可給候、頼申候、恐〻謹言、

卯月廿九日　　忠共

正保四年九月十四日、御談合之御条書并談合之人數書立、但本田内膳殿・堀太兵衛殿上候時、

○四二二　談合衆交名

覺

山田民部少輔殿
嶋津筑前守殿

諏訪杢右衛門殿
岩切六右衛門殿
猿渡大炊助殿
喜入太兵衛尉殿
相良権兵衛尉殿
同　土佐守殿
相良杢助殿
鎌田大炊助殿
東郷肥前守殿
相良助太夫殿
川越新左衛門殿

（正保四年）
九月十四日

『此一冊、寛永十八年より是迄、雖　公用書出申間敷者也、』

佐土原御代継無之ニ付、三原左衛門佐殿聟町田出羽殿を佐土原江可遣との趣巧、内々左衛門殿被致、光久公江被申上候得者、島津彈正納得ならは可然之由、御意有之候、彈正殿と左衛門殿兼而不和ニ而候付、無相談候而、彈正殿同意之由を嶋津下野殿なと連印ニ而書付を以被申上候、其儀を彈正殿・喜入攝州・嶋津野州被聞候而、彈正殿より佐土原御世継之儀、私納得候由、左衛門殿被申上候由、私ニ者納得不仕候、相談をも不申段被申上候、攝州・野州よりも私共ニハ連印之書付差上不申候、去ル廿八日出席ニ而、私共印判相失せ申候との由被申出候、然者、左衛門殿被上候書付者、廿八日後之日付ニ而、左衛門殿判盗取別条無之段、山田昌嚴なと連名ニ而被申上候、然るに彈正殿大キに腹を立、謀書ニ被成載、此通ニ而者難差置被存、光久公江申上候共、當時無雙出頭家老ニ而威勢強有之ニ付、早速ニ者埒明間敷とて、私領之日置・東郷之人數を被催、今夜八ツ時ニ三原氏所江切込ぬとの支度ニ而候、鎌田善内殿者彈正久慶之騎馬與力ニ而被參合候ニ付、彈正殿役人善内殿江、今夜八ツ時ニ三原殿所江切込被申手當ニ而、人數相

揃候由申候、善内殿より彈正殿江、三原殿江御切
込被成候由承申候と被申候得者、彈正殿、此事相
知事ニ而無之候、定而役人より被聞候半と也、善
内殿折角被相留候得共、中ゝ無承引ニ付而、善内
殿直ニ御用人之相良権兵衛殿宅江其夜五ツ過見舞
被申候而、今晩者夜更候付、御用候ハ、明朝御出
可被成由返答ニ而候付、鎌田左京殿江被参候得者、
左京殿髪はぶちやせんニ而、左ノ手ニ脇指を取被
出會候間、其段被申入、急用候故直ニ列立逸足を
出、嶋津圖書殿江被参、早ゝ可懸御目由被申入、
則圖書殿江委ク被申上候得者、扨者大切成儀致到
來候、片時茂早　殿様江可申上とて、直ニ三人打
列、早足ニ而致登城、早速御居間江参上、右次第
委細言上候、　殿様ニ茂何様共即答ニ者難被遊事
候得共、片時も延引有之候而者大事可成、早ゝ彈
正方江可差留置候、御臺所預新納大藏江可罷出旨
被仰遣候ニ付、大藏罷出候得者、其方儀早速彈正
江見舞、左衛門儀者思召有之、寺入可被仰付候間、
意趣打之儀者思ひ留り候得と、麁忽之儀無之様ニ
可申達候、夫より直ニ左衛門所江参り、今通ニ而
者事不相濟候間、寺入被仰付候旨、其方親類之儀
候間、能可相達由被仰付、直ニ大藏殿彈正殿宅江
被参候而、右之段　御意候旨被申入候ニ付而、彈
正殿おもひ留られ候、夫より左衛門殿宅江行候而、
右之通寺入被仰付候由被申聞候、左衛門殿大藏殿
ニ被申候者、今晩八時ニ彈正殿切込之由承候間、
へし打ニハ逢申間敷と存、覺悟致置候迚、表の襖
を明られ候得者、家來共皆ゝ相仕舞百人計、鉄炮
ニ付火縄致、其外弓矢兵具を揃待居たる由、夫よ
り左衛門殿御家老役御免ニ而、指宿源中寺江左衛門佐
始霧嶋江寺領後、頭陀瑞應院江寺領、寺領被仰付候と也、
源中寺者暫之間、為有之なるべし
鎌田氏働故、不及大事と人ゝ爲申由候、善内殿ハ
鎌田休慶老祖父ニ而候、鎌田左京殿者鎌田後藤兵
衛殿親父ニ而候、相良権兵衛殿親父者相良土佐殿
ニ而候、右善内殿ハ四位治部殿兄之由候、此治部
殿儀、酒好ニ而不断呑被申候ニ付、人ゝ不断酒飲

を治部に成りと申習らハしたる由候也、

一町田大概記曰、出羽守殿佐土原之萬壽様御幼少之故、御番代を可被成之由、御申之通相聞得申候、依其儀、出羽守殿ハ御若年、誰人に御談合有之由、御公儀より御尋御座候、三原左衞門殿江爲被成御談合之由御申候、必定ハ喜入攝津守殿江御談合之由聞得候、依其儀、嶋津彈正殿より御尋共御座候、右之通ニ、三原左衞門殿江御談合之由被仰候、夫より三原左衞門殿御糺明共御座候而、左衞門殿寺領に相濟候、出羽守殿者御若年之故、伊作之地頭職被召上、一身者福昌寺江被成御寺領、有程御直被成候、左様ニ御座候而より、相續病者ニ被爲成候、夫より數年無御奉公御座候故、御子之梅千代殿拾歳之御時、町田弥兵衞前より申上、御元服御座候、御名助太郎殿と御給候、其時分出羽守殿御在所主取依無之、肥後長左衞門殿江可被仰付之旨、此儀も町田弥兵衞申上、如其相定候、其脇肥後長左衞門殿蝕之嶋之地頭被爲當、彼嶋に渡海御座候、其跡に出羽守殿御身躰可被聞せ人無之由、又弥兵衞申上候處、樺山諸右衞門殿被相當せ、両年被相聞せ候、今年病死御座候、其跡出羽守殿御身躰爲可被聞せ、町田源左衞門殿今年十月より被爲聞せ候、此人之事ハ從　御公儀直に御當之由聞得候也、

○前此、島津久慶與三原重庸爭訟佐土原番代之事、在私宅聽國政、陰狎近頑童肥後於長祁答院農戸兒、密謀一向僧眞託、欲唱邪教於本藩、白晝張紙帳入對話眞託、將毒殺同列厭蠱朝廷、於長嘗有怨於久慶、密告首久慶蓄異志、久慶聞而捕於長而祇死之、慶安四年久慶死、而反狀見形、　光久公赫怒、褫久慶之家督、使其養嗣大膳久憲竄于海島、追案以比加棄市籍没之刑於久慶之身云、即年放重庸還家、嚮使重庸淹囚於遠寺者久慶之讒訴云、於是、忠尚之寃雖稍雪辨也、遂快〻不樂、嬰沈疴斷生望云、

○四二三　島津久通書状

『鎌田藏人家藏』

一島津大膳被申分色〻御吟味候而、極月廿七日ニ仰

出候者、大膳事者、喜入名字ニテ攝津守殿次男ニ可被寵成候、知行者千五百石被遣候、屋敷者嶋津三郎右衞門殿家共ニ被下候、被申分者、養父との儀ニ候、殊ニ彈正死後之事ニ候間、是非御沙汰可有之儀ニ而も無之と　上意候而、兎角爲御聞不被成候、

一彈正事者、大膳申分之外別段之儀御座候而、彼一代者御削候而、下總養子ニ嶋津三郎右衞門殿被仰付、知行七千七百石余被替ニ而候、外ニ三千斛者、彈正方へ御姉様被遣候而以後者加増ニ候間、彼跡者、御削ニ付而御藏入ニと被成候、細〻之儀者後便ニ可申入候、先風説聞召無御心元候ハんと存、有増申進候、

嶋津圖書
久通（花押）

正月二日

鎌田藏人様
人〻御中

噫夫存松・久幸相尋、不唯攻城野戰之功、成長乎辛苦之中、未嘗一日安息其身、外參軍謀内贊國政、以勤勞朝家為急務矣、是故細川幽齋來于斯邦、擅行沿革、夫人仰給圖利、而於存松不敢阿諛之、專為國計而不存私矣、　貫明公嘉其忠貞、特益封數邑、自此町田本宗方復興、至于久幸愈以隆矣、況又忠尚以公子尊入承其餘緒、乃從事于齋家修己、以副一家之望、則町田家之盛可計日而竢乎、不幸會三原重庸誇三代之門地、溺女壻之姑息、愁欲使忠尚為相於佐土原、丁此之時、為島津久慶一朝見訐其隱私、不唯重庸失其門地、忠尚亦反坐之、竟轗軻終其身、可以為一大息哉、夫佐土原萬壽丸雖是乳抱孤、祖宗業有所歸焉、為之番代亦何益矣、抑又町田彌兵衞久興嚮蒙　琴月公之顧命、翼戴忠尚、宜以進盡忠言退省其私、晨夜憂慮、以受繼存松・久幸之志匡濟忠尚為己之任而已矣、胡爲未及承允許、汲々焉欲為佐土原番代乎、其意不過垂涎乎三萬石也（當時佐土原領三萬石餘）、縱重庸狂悖輕擧、使忠尚納諸不軌、彌兵衞力陳其不可、須莫蒙昧朝議也、而

却為重庸役使其謀計、上之以負　先君附託之重、下之令忠尚陸沈不能復立朝、則彌兵衛無所逃其罪矣、孰謂君子先義而後利、忠尚雖少弱所致、為重庸註生涯家聲不再振者、悪知不出其利己之私心邪、後來子孫慎旃哉、

余嘗讀釋玄昌南浦掉歌、元和四年三月四日曰、町田久興公招予、詩以謝之、詩曰、有友招人急手揮、陰雲掃盡欲晴暉、唯因醉飽暖吾老、行入華胥不識歸、蓋久興為人足以幹蠱、又頗解文義、乃自町田家元祖至忠尚、凡廿世綴輯其梗概、名曰町田大概記、今斯譜中往々以為引證、然而不繫之以生卒紀年、則今而不知孰之室氏某之追號者若干人焉、可以為遺憾矣、矧受　前君之顧命、而使忠尚為重庸招終身之患者乎、久興勇且智非悻々小丈夫之比、何其有斯過也、余有為久興深惜之、故直罪之道、

○是歳三月朔日、納　家久公影像於福昌寺影殿殿在福昌寺魂殿之東、

（表紙）

廿一代
忠尚第三
寛永十九
至寛文九

町田氏正統系譜　卅一

藤原姓町田氏正統系譜巻第三十一　忠尚三

○寛永十九年壬午十二月、忠尚為組頭、此時始置城下人士班、凡十組、自一番組至十番組、及合寺社家諸役座十五組、別置御家老一組、凡廿六組、毎一組組頭二員、各有小組頭佐官若干員、忠尚時與種子島左近忠時為五番組頭（凡組頭官亦為家秩、而其未見任者、稱組頭列・番頭列、正保三年丙戌寵組頭十番為六番、天明六年、丙午七月、改組頭官名、曰御小姓組番頭）

○四二四　城下士組頭交名

一番　島津安藝『久雄』新納四郎『久辰』　二番　島津市正『忠廣』佐多又四郎『久孝』

三番　桂又十郎『忠知』㊐心吉利下總『忠張』　四番　島津左近『久守』樺山又九郎『久廣』㊐尚

五番　町田出羽『忠尚』種子島左近『忠時』　六番　伊集院源助『久朝』㊐立島津美作『久基』

七番　伊集院右衛門『久國』川上上野『久運』㊐運久㊐由　八番　祢寝七郎『重永』川上將監『久將』

九番　鎌田又七郎『正勝』入來院伯耆『重高』　十番　伊勢兵部『貞昭』島津中務『久茂』

御家老組　島津彈正『久慶』島津圖書『久通』

（本文書ハ「旧記雑録後編六」二八九号文書ノ中ニアリ）

○四二五　島津光久条書

與頭衆へ被　仰出條々

一與中江野心不忠者可有之時者、早〻可被致言上候、若與頭油斷候而於不申上者、與頭并談合衆同意之心底たるへき事、

一與中江喧嘩口事出合候者、早速寄合致談合可相濟事、

一御奉公方之儀談合候而、與頭より可申付事、付出物首尾之事、

一作病其外御奉公方ニ難澁申、氣任之輩於有之者、以談合致言上、曲事ニ可被申付事、

一與中江鬼利志端宗并一向宗於有之者、致糺明言上可申事、
一與中於緩ハ、與頭談合衆越度たるへき事、
一訴訟其外申分之儀、與頭江尋不申候而、氣任ニ公儀江雖為申出、請付有間敷候間、可有其心得候事、以上、

寛永十九年午十二月十三日

（本文書ハ「旧記雑録後編六」二九〇号文書ト同文ナリ）

○四二六　町田忠共書状

○　以上

一書令申候、然者、今度從　公儀与頭衆へ被仰渡之内、出米之未進衆早ゝ今月中上納可被申候、若於延引者、六月よりハ知行を相應ニ可被召上之由被仰出候、　公儀より來候条書寫持せ申候、若又申分共候ハヽ、其通書物候て可承候、其段公儀へ可令申候、次ゝ被召置候てより、吾氣色等も久ゝ候て、未無平癒候、散ゝ敷ニ候、万事養性申事ニ候、重以時分遂面、彼是可申候、恐ゝ謹言、

町田出羽守
忠共（花押）

五月廿三日

野村太郎左衛門尉殿
まいる御宿所

野村太郎左衛門充綱其父曰野村美作守良綱、受兵道者流于町田越中守久運、而居于高城郡水引郷、寛永廿年癸未七月十五日死、

○四二七　町田忠共書状

態以一書令申候、然者、先日者此地へ越來、殊ニ寺内草庵ニ両度迄立寄ニて候處、難去用段之儀候て令歸宿、殘多存事候、然者、作州老事も久ゝ煩氣ニ御座候由令承候へ共死去之由、近日ニ些風聞とも申様ニ候つれ共、直節依不相知不能其儀候、是等之通、爲可申如斯ニ候、尚委曲者斯面誥之時候、恐ゝ謹言、

（寛永廿年）
十一月十五日

町田出羽守
忠共（花押）

野村太郎左衛門殿
まいる人〻御中

○寛永末年、忠尚罷組頭及伊作地頭職、以身被艱疾也、

正保二年乙酉五月十四日、島津中務少輔久茂狀曰、

○四二八　島津久茂書狀

伊作地頭職某江被仰付候由、先月十二日ニ被仰出候之條、廣所と申無餘儀外城ニ候、若輩者不似合儀候間、斟酌ニ存候得共、早〻致領掌可然之旨、御家老中より被仰聞ニ付任御意候、其時分申候も於所気任被仕候衆被召移様ニ風聞申候、若人数餘多之儀候ハヽ、御侘言可申上之由申置候、然處ニ三拾人餘被召移之由候、左様ニ候而者過分ニ人数少ニ罷成儀候間、先衆中江茂見参仕間敷由御断申候而、御侘言之通各御両所ニ而申候處ニ、町田出羽殿地頭之時分爲相極儀候由被仰聞候、左様ニ候ハヽ某申分無之候、尤御公儀ハ先地頭之時分相究可申候得共、右三拾人之内両人馬越江可罷移之由去月廿六日ニ被仰付候、其外之衆江者未兎角不被仰聞候、然時者某江地頭被仰付候而、以後之儀候間申事候、彼三拾人之衆能程御用ニ被罷立衆ニ而候、相残衆ニ者筆筭等仕人多も無之様ニ申候、左様ニ無人ニ而者諸事御奉公方相調間敷事笑止ニ存候、前〻気任候時分者、寺領被仰付被召直たる儀候、其後者何そ出合も無之様ニ申候、縦爲差當科有之候共、所ニ而一道可被仰付儀ニ候、左様ニ而こそ三こりニも可罷成事ニ候、何之外城江出合候而もケ様ニ多人数被召移儀不承候、今度伊作衆被召移候得者、自今以後之例ニ可罷成事迷惑ニ候、御穿鑿も無御座様ニ承候間、御糺明を被遂、於所曲事之段被仰付可被下候、若軽儀候者其儘被召置候様ニ御申頼入候、

（正保二年）五月十四日　　中務少輔

新納刑部大輔殿

平田狩野介殿

○正保二年乙酉七月六日、客歳忠尚誤效三原重庸之尤、公則被推問其意故、私則坐見世人譏議、快々不堪伊欝、焦心煎腸竟内熱成狂病、於是、町田久興憂之告諸官、而私福昌寺治禳忠尚之病、

○四二九　町田久興覚

『在家藏』

町出羽守殿永ゝ御氣色悪敷候、此比様子承候へハ、御氣まち〳〵に罷成候由承候、就夫、存寄之儀共度ゝ家中衆ニ而申入候、然ゝ有筋之儀共不達候故、町田右衞門兵衞か事ハ、爲御格護御領分ニ被罷居候、以此人出羽守殿御手前ニ彼是穿鑿共申極様子承候、御氣違之躰ニ候、世間ニ有之野孤之心なとゝ申様子ニ而候、然時者、遮而御祈念仕候ハてハ、御平愈有間敷候、此通ニ承極候故、福昌寺頼存御祈念可仕候、當時役人衆手前ニ銀錢米無之候、依其儀知行可被賣由、役人衆へ申渡候、其故ハ出羽守殿御事、　御子様と申御舍弟様と□(申カ)、其侭可罷居儀ニ而も無之候、町田殿家継御定候故、其通ニ及廿ヶ年ニ、御軍役被成御勤候、然時者、町田殿知行多分賣拂、御祈念仕候ハて不叶儀ニ候、弔方之以地躰、御祈念可仕様子ニ而、福昌寺を頼存知、御祈念可仕候、前ゝ拙者出羽守殿ニ出入仕候時、知行七十五石買置候、先ニ此□(七カ)十五石、此度御祈念ニ付可被賣拂之由申渡候、此度御祈念入目之拂餘銀、當時之役人手前より、□衆へ可被渡置之由堅申渡候、如此様子を拙者爲壱人申極候事ハ、最前町田殿之御養子ニ御定候、其後御身躰を拙者へ被成御渡候而、承候様子ハ、町田殿惣領ニ無吳儀取立可申之由承候故、領掌仕候而、出羽守殿御身躰も被成御成人候、然処ニ、右之様子ニ御病氣、咲止ニ存候故、急ニ御(ママ)御祈念相企申候而成就仕候、先ゝ此通御公儀へ御内證申上候、早ゝ御披露所仰候、以上、

正保弐年
七月六日　　町田弥兵衛（久興）（花押）

○慶安四年辛卯十二月、　初收口税、　人銀一分（是謂一分銀、）

（其實口錢耳○持統紀既有口賦、即是）

○明暦二年丙申八月十七日、　光久公使御用人喜入五郎兵衛久治・諏訪采女兼延宣命曰、上聞、忠尚淹染積痾蔚然廢人事、宜出住石谷務加調攝、息男長壽猶在襁褓、亦可携行、俟成長復本領、因使町田源六久英移居忠尚第宅為番代參知家政、其又宜代忠尚祇役藩邸、凡其費用則當取於忠尚邑入之中、此無他、　上所以不忘久幸・久則忠於前朝之舊勲也（蓋謂久幸・久則有朝鮮・莊内・關原等之軍功也）、

○四三〇　御請之書物写

覺

爲　御上意被仰出候者、町田出羽永ゝ病中ニ而、御奉公も不被申上、其上前後をも不被存通被及聞召候、然處、過分之知行格護ニ而候、今時諸人相應御知行給候衆ハ、江戸御奉公方ニ被相勤苦勞被申候、爲養生出羽事、領分石谷江被罷移方ゝ被仕候ハヽ、爲養生ニも可罷成候、當分息有之由、傳被　聞召上候、未幼少候間、盛人可被申中、町田源六江爲番代江戸御證人役被仰付候間、江戸地下共、出羽知行を以相調御奉公可被相勤通被仰出候、息未幼少候間、同心を以石谷江可被罷移候、成人被申御奉公可被申時分者、無吳儀本領可被仰付候、先其内者、源六江番代被仰付候、源六事出羽屋敷江移被申、江戸御國元御奉公可被相勤通、昨日町田源左衛門江も被仰出候、其心得可申由被仰聞候、以上、

右御諚、申八月十七日、御使喜入五郎兵衛殿・諏訪采女殿を以、於　御城加治木堅介・橋口二郎兵衛江被仰聞候事、

右御上意御口上ニ而承候間、堅介前より右御使衆江申入候者、御口上ニ而承候得共、我ゝ承候而も不覺申、其上　御上意之通も跡先罷成、長壽殿御

成人之間も、十ヶ年ニ及申儀ニ候、私役儀申儀も一節ノ事ニ御坐候、以來之儀御座候条、御両所御口上之通を御書物被成御判候而可被下候、家中老來之者共江も、御書物之表ヲ申聞可置之由申上候、御返事申九月廿七日ニ被　仰聞候者、御家老衆江被仰上候、　御上意之通御評所御用番帳被留置、其上御使衆を以被仰渡候間、以來相違之儀有御坐間敷候、御使衆物毎ニ被成御使候儀ヲ書物御出候得者、以來例罷成候間、書物ハ出申間敷由、鎌田筑後殿被仰候由承候間、重而今些御申可被下由、申上候得者、御両所被仰候者、出羽殿贔屓之様ニ御坐候間、亦〻申上候者、別御使衆を以可申上由被仰候、又被仰候者、前被仰出候通ヲ書付候而差出候へ、御覽候而相違儀候者、御直可被成候由承候ニ付、御口上書付差出候、御両使細〻御覽候而少も替儀なく候、爲圖書勘解由いとこと書申候、此いとこ違候而、圖書そしと可相置候由、申十一月七日喜入五郎兵衛殿・諏訪采女殿、此方書付御覽候而、何れも被仰出通無相違由被仰候事、

一町田勘解由殿より肥後長左衛門殿・川越新右衛門殿此両使ニ而、出羽殿江被仰候者、當分出羽殿御病氣御座候而、御奉公も不被成候、御息長壽殿被成御坐候得共、御幼少ニ而御坐候間、盛人可被成間、番代町田源六江被仰付由被　仰出候、格護之外之御意ニ而候故、未御請をも御申なく候處、出羽殿より被入御念、一昨日岸良主馬殿を以、源六番代之儀御蒙候由、被　仰出候、御慇懃之御様子ニ候、何れとも御理御申被成、其上ニ而番代御免なく候者、　御意次第ニ而候間、重而可被仰合由被仰候、役人衆江被仰出候者、御番代御請未御申なく候、家中衆存寄之申分於有之者、左様成ヲ被聞召御請、其上、様子ニより御申分も可有之候由承候間、いつれも家中衆右之様子申聞候、何れも被申候者、源六殿御番代御當之儀、一段出羽殿御爲ニ者仕合存上候、勘解由殿御父子ヲ社御寄親被思召儀候間、家中之者も一入目出度申事候由申入

候事、

一出羽殿より御返事、如仰手前長〻依病氣御奉公も不申候、世倅幼少ニ有之候間、成人ヲも可申間、源六殿江番代爲被仰渡由承候、岸良主馬殿を以如申、手前爲ニ者源六殿番代仕合存候間、早〻御請御申可被成儀、可目出度由申躰ニ候、弥其心得可被成由御返事ニ而候事、

一町田甚左衞門殿・阿多才左衞門殿・若松助左衞門殿家中之もの、出羽殿　申御請御申候者可然候、左候得者、町田甚左衞門殿ヲ被成御頼、役人衆相付御申候者可然由被仰候事、

一町田甚左衞門殿江右之御請被成御頼、堅介・二郎兵衞、甚左衞門殿江相付　御城江罷出、御使喜入五郎兵衞殿・諏訪采女殿御両人江、出羽殿御申分、甚左衞門殿御意趣被申候、左候而、重而御家老衆より被仰候者、書物を以御申可被成候、當分　太守様小村江被成御坐候間、彼御地江今明日之間被仰上候而、其心得可申由被仰出候間、爲御内證國分清右衞門殿ニ而、於　御城則勘解由殿江右之段申入候、被仰候者、御家老衆御下知之ことく書物ニ而御申可然由被仰候間、則書物調文盛右衞門殿を以、勘解由殿掛御目候、書物被成御覽、御承も御上意も不相替候書物之趣候間、早〻可指上之通承候間、御使衆江差上候、出羽殿御判之儀、喜入五郎兵衞殿江御尋申候、御病中ニ而候間、印判可然由被仰候事、

御請之書物寫如此候、

○四三一　町田久共覚

一被　仰出候御諚之通、謹而承届申候、如　御上意我等事、永〻病氣之故、御奉公をも不申上、過分之御知行被下、及多年緩〻と被召置候儀、誠難有奉存候、然處爲養生領分石谷村江罷移方〻と仕候而、養生可申由被　仰出候、如何様ニも　御意次第奉存候、幼少之世倅有之通被聞召上、成人仕御

奉公可申間、前之爲圖書・勘解由親類ニ而、依其一筋、源六江番代被仰付由被仰聞候、是亦仕合奉存候、別而世悴成人仕御奉公可申上砌者、無吳儀本領可被仰付通、拙者存上旨、御諚之通被仰出候、生〻忝奉存候、弥以町田之家継申様存上候、御家老衆前より可然様被仰上候而可被下候、以上、

明暦貳年丙申
八月廿一日　　町田出羽（久英）

御家老衆

○四三二　町田久英覚

一町田出羽殿永〻被成御煩候、御子長壽殿御事も御幼少被成御座候、然者、大分之御知行被成御格護、數年御奉公茂不被成ニ付、同名源左衞門子源六江番代被仰付候處、相應之御奉公可相勤旨被仰聞候、御連枝之儀ニ而、斟酌千萬奉存候へとも、前之圖書一筋之儀ニ而被仰付候由、長壽殿御成人被成、御奉公可被相勤候、其間御番代可仕通被仰下候、一節之儀候条、若輩者念遣ニ存候得共、上意之儀ニ候間御請申上候、　御前之儀可然様被仰上可被下候、奉頼候、以上、

申八月廿五日　　町田源六（久英）

右覺書、國分清右衞門殿使ニ而町田勘解由殿より被仰候者、御番代御請、今日吉日ニ而御坐候間、御申承之候、先日如被仰合首尾之儀候間、右之通公儀江御申ニ而候、書物にては御申なく候、爲御存御意之趣通覺書被遣由候、出羽殿被成御覽可給由被申候間、則盛右衞門殿江御返事ニ而候、

○四三三　藩申渡書

一町田出羽殿隱居分高五百石被相分、堪忍可被相濟旨被仰出候、相殘高ニ而同名源六御證人役以下可被相勤候、出羽殿御方之儀者、加治木堅介可承候、源六方者親源左衞門可致差引可然候、左候而、高分并諸道具家中之者相分儀、町田甚左衞門・桂外

記・平田民部左衞門被仰付候間、右之衆參會、双方相調候様可被見合候、左候而、右帳面留家老衆見届ニ而可被申渡候、當毛取納より可相分候条、可被得其意候、

（明暦二年）申九月廿四日

町田出羽殿方
同名源六殿方

○四三四　藩申渡書

一出羽様石谷村江御移之儀、來春者旁悪敷候間、年内中御移可被成内談仕候、併御坐之間家者、大工衆無之候間、調申儀不被罷成候間、置□之家作申ニ候、ヶ様成家ニ先御移可被成覺悟仕候得共、御連枝様之儀候間、御出合如何奉存候条、右御使喜入五郎兵衞殿・諏訪采女殿被成候間、御内意之通申候、則鎌田筑後殿江御内意被爲申候得者、念ヲ申候、被聞召置候間、如申上御移可被成由、諏訪采女殿・喜入五郎兵衞殿被仰候事、

（明暦二年）申十一月十日

○四三五　町田久昌・同源左衞門連署書状

一町田出羽殿御煩故、數年御奉公不被成候、御子長壽殿御事も御幼少ニ付、御成人ニ而御奉公被成候する其間を、同名源六御番代被仰付候、相應之御奉公可相勤通、鎌田筑後殿御使ニ而被仰聞候、一節之儀ニ候間、御下知次第御請申上候、就夫申上候、出羽殿御事、御領分石谷村江被成御移、緩々と御養生可被遊通被仰出候、雖然田舍ニ而者醫師衆も遠罷居、萬事可難被成存候間、先今通ニ而御座候様ニ、役人江相談可仕と存候、源六儀者、御屋敷中ニ相應之居所作申候而罷居、御奉公可相勤候、爲被　仰出儀候間、御仕合を以御前可然様被仰上可被下候、以上、

（明暦二年）申九月廿一日

町田勘解由（久昌）
同名源左衞門

○四三六　鎌田正信申渡書

右之裏書

右口上書之趣、今日伊東三左衞門を以入御耳ニ候處、出羽儀長病ニ而、爲被欝氣由候間、最前如被仰出、石谷村江栖仕、心之儘ニ養生可有之候、病者ニ而候故、掛遠方醫師之見舞遲引念之通、乍尤、餘程遠在所ニ而茂無之候間、可相達旨被仰出候、以上、

申十月四日　　鎌田筑後判（正信）

町田勘解由殿

町田源左衞門殿

○明暦三年丁酉正月十九日、江戸大火延燎櫻田邸、光久公將如江戸、幕府優命在藩、

○明暦四年戊戌（即萬治元年）二月、源六久英為證人適江戸、因辭番代矣、於是公再命、忠尚復住新橋之第、其或行在石谷、唯乃所欲是聽、蓋公友干之愛寛饒之者也（證人謂為質於江戸、至寛文五年七月、幕府罷諸國證人、）

一從御家老衆、御使諏訪采女殿・喜入五郎兵衞殿御両使ニ而、御城江加治木源右衞門被召呼被仰聞候者、町田出羽殿過分之御知行御格護候處、病中故御軍役等も不被成ニ付、御番代町田源六殿江被仰付候故、江戸御證人役前勘解由殿・源六御證人役於江戸被成御申候、然處、出羽殿番代ニ而御證人役江戸御指合ニ付罷成候間、源六事ハ番代御免被成候間、出羽殿事爲養生領分江御下知を以被成御移候、早速如屋敷之移被成候而、弥以養生可有之候、左候而、又石谷江茂御越可有之儀者、氣之儘可被成由御蒙被成候事、

一右御蒙之通、中馬主馬石谷江差上、出羽様江申上候事、

一右御請御禮之通、前かと於御城町田源左衞門殿得御意候、被仰候者、前ニ御申分も有間敷候、如何様ニも御意次第之由御申被成候而、可然由被仰候間、右御使諏訪采女殿・喜入五郎兵衞殿、從出羽殿御請御禮御申被成候様子、如蒙長〻依病氣、

過分之御知行被下置、緩々と被召置候、爲養生出羽事ハ、領分石谷江罷移、番代町田源六殿江被仰付候処、江戸御證人役ニ差合候間、番代御免之由蒙候、左候而、出羽事弥養生之ため如屋敷罷移、又者石谷江も罷越、氣之儘養生可仕由被仰出候、被御心付　御意之通生々忝奉存候、如何様ニも御意次第ニ可申候、御家老衆御前より　御前可然様、被仰上可被下由御申候事、御使加治木源右衛門仕候、

○四三七　町田久昌書状

『鎌田藏人家藏』

大田治部左衛門被召上候間、令啓上候、仍其御地少將様御機嫌能被成御座之旨、恐悦ニ奉存候、御當地弥別条無御座候、

一町田出羽殿より前々御訴訟之儀共御座候、貴様へ御頼ニ付我等御使申候へ共、　御上洛前御繁多ニ候而、一途相濟候様ニ御座有度候条、何とそ被添御心落着被仰付候様ニ、爲我等奉頼候、加様成儀ニ付而、去方被罷上候、定而達而入組も有之候哉と存事候、何れハ古來より家督役勤來家ニ而候条、能々之證據於無之ハ、利運可難成候、其段ハ御存之前候条、不能細筆候、

八月廿五日　　町田勘解由久昌（花押）

鎌田藏人様
参人々御中

○寛文四年甲辰十二月晦日、　光久公使御家老鎌田藏人正信宣旨斷吾庶町田忠堯爭嫡之濫訴、因授忠尚判決證狀也、夫世或爭門冑（イヘカヲ）高下者、獨由其嫡庶未詳確耳、粤吾庶町田駿河久門者、其初祖曰左京亮則久、本宗七代五郎清久之六男未嘗有其出自不審者也、而元和中久門曆仕四朝、乘權藉勢妄自稱町田本宗、因欲簒家嫡、訟諸朝、朝命使島津圖書忠長入道紹益等論斷其眞偽、則久門固是為久幸之支族昭晰矣、不足深辨、乃使久通降其旨、已而久幸歿而無嗣、於是、久門之孫八右衛門忠堯幸本宗

無主、再要奪嫡宗、復訟於朝、久而不判決、是歳寛文四年十二月晦日、御記録關係御家老鎌田藏人正信宣　公命曰、町田正統固在忠尚矣、久門・忠堯所訟全屬欺罔矣、今也與同列議質辨其浪説、明以録諸國史、因翌寛文五年三月廿六日、正信授忠尚證狀、並証見于左、

○四三八　町田忠尚書狀

『在家藏』

當家者爲町田家嫡、然養父圖書久幸代、町田八右衞門忠堯祖父町田駿河久門、町田氏惣領家之由就申出候、於嶋津圖書入道紹益宅被遂吟味、久幸無別儀家嫡致理運候、然到當代亦〻右八右衞門嫡家之筋申分有之候故、鎌田藏人殿再以僉議之上、寛文四年甲辰十二月晦日、愈出羽忠尚嫡家相定候也、

忠尚（花押）

○四三九　鎌田正信書狀

『在家藏』

從町田駿河代到當八右衞門、惣領筋之由申出候、雖然、先年各詮儀有之候得共、實事無之候、今又遂吟味、其旨趣御家老中江相達、御方町田之家督相究、八右衞門方へ申渡、御記録等茂右之趣ニ相認候間、可被得其意候、恐惶謹言、

寛文五巳
三月廿六日　　鎌田藏人
　　正信（花押）

町田出羽殿

○寛文六年丙午三月二日、伊東源次元服ニ付、親伊東肥前覺書之内、

一鯛弐ッ　　片八寸ッ、

一鈴弐對

右者、町田出羽殿江のしめ并すはう御借被成候其爲御禮、三月五日ニ左兵衞・久兵衞參上申候、則御逢被成、吸物ニ而御酒御寄合被下候、御息少兵衞殿ニ茂同座ニ御出合被成御酒參候事、

右、左兵衞・久兵衞並伊東氏也、

○寛文六年丙午四月五日、忠尚傳旨告串良次門町田安房介忠真之家曰、余以寛文四年、奉可為當家正

統之　公命、因有宜令支族各上系圖家乗之　旨也、
而家所藏宗圖譜牒及舊聞遺事、悉持來而呈示焉、

○四四〇　町田忠尚書状

『串良町田新八藏』

猶以、其地ハ不及申、他所ニも一家之衆有之
儀於存知注進待入候、以上、
態用一書候、然者御一門之衆、其家ニ被相極不殘
御記録所へ被爲記置候、然處當家之儀、町田八右
衛門方より被申分共候て、數年不極候故、御記録
ニ不相載候、依是達而御断申候ニ付、被遂御僉儀、
寛文五年十二月晦日ニ、如前ニ我等惣領ニ致決定
候、御記録奉行鎌田藏人殿より預證文候、就夫此
節一門中節目相糺、御記録所ニ差出筈候条、被得
其意、系圖又ハ家ニ申傳儀於有之者、細ニ書記、
持參可有之、爲其如此候、恐ニ謹言、

町田出羽
病中故押印如此候
忠尚〇（黒印）

四月五日

町田安房介跡
御宿所

今按忠尚帖、謂寛文五年十二月晦日者非矣、當作
四年耳、町田安房介忠直初稱新五郎、町田新助忠
玄之弟也、忠玄無男、立弟忠直紹後、忠直以寛文
元年六月即世、故書以安房介跡、越厥明寛文七年、
其子織部忠晴呈上譜課于本宗、以答忠尚之教云、
蓋新助忠玄從軍久幸于莊内山田之役而戰歿、　上
賞其戰功賜父織部佑忠綱世禄廿五石、此於久幸亦
有致死忠者灼然矣、乃到于忠尚惠顧忠直之家異乎
他門、今元禄七年甲戌、其孫織部忠晴呈示串良地
頭館之狀、附記于左方　串良大隅風土記作串卜之字

○四四一　町田忠晴由緒書

町田忠良道傳之三男周防守胤久事、私家之元祖ニ
而、代ニ相續申候、但祖父忠綱嫡子新助忠玄儀、
慶長四年六月廿四日、於庄内山田城戰死仕、其節
新助父之織部介被召出、爲御褒美御高貳拾五石拜
領爲仕之由候、右新助男子無之ニ付、新助弟安房
介江相續爲被仰付由候、右祖父織部介忠綱儀、飫

肥御領内ニ相成候節、伊作より福島江被召移、其後他領ニ罷成候ニ付、志布志江歸參仕居候処、串良川南村梅北園門領分之故、祖父中宿仕居候、然處、敷根中務殿御地頭之時、串良衆中ニ而、一節軍役等被仰付之通、御家老町田少兵衛殿より御證文ニ而勤來候、其證文格護仕候、其外文書由緒等之書付、寛永拾一年大風洪水ニつかり捨申候間、當分無御座候、以上、

戌三月　　町田織部

串良
御曖衆中

○寛文八年戊申十二月九日、某婦人死、法名梅圓妙鏡大姉、葬麑島福昌寺先塋域、又石谷永福寺蒿里亦建斯墓、蓋葬所福昌寺也、牌殿永福寺、　按梅圓大姉忠尚之妾而久孝・久東之生母也、

○寛文九年己酉正月十九日、先是、忠尚入臨正統也、次門疏屬翕然莫不拜趨者、忠堯覽之不自安、至是乃囑町田勘解由久則、叩頭謝罪、僅許入于本宗門焉、胡為其前倨而後恭乎、且夫久門・忠堯遙々末流餘裔、而濫望為嫡不一而足、是僭狂之甚、儻質責其罪、則可謂上欺朝廷下亂大倫者矣、況又富貴或可願而致、而嫡庶之分百世不遷乎、雖然本宗陵遲則支庶窺覦、久門一旦附勢欲簒我宗者、遂暨両般、是後昆尚可畏、故特書于玆以垂鑑戒于來者云、

○四四二　加治木源左衛門書状

寛文九年己酉正月十九日、國分清右衛門殿より加治木源右衛門江承候者、町田八右衛門殿事家筋之儀ニ付、跡ゝより出羽殿江申分共有之、久ゝ立入無之候得共、出羽様御家督相定申候得ハ、兎角末ゝ御立入をも不申上候而不叶儀候間、勘解由殿御前より些此等之旨、出羽様御方江被仰入可被下由、津曲清兵衛殿を以被申上候、勘解由も尤ニ存候故、此段申上候条、出羽様江被相窺候而、依御返事、八右衛門方江茂可申遣通、勘解由殿與力國分清右衛門より加治木源右衛門江申來候ニ付、右書付御

父子様江懸御目、左候而、上抑諏訪采女殿江申入候、其後勘解由殿・采女殿被仰談、五郎右衛門事出羽殿江可罷出儀者、其通可有之事、

一社役之時分、八右衛門殿先祖社役被相勤候古日記出羽殿御方江有之候、後年社役被仰渡候時難澁被申候得者、如何ニ候条、采女殿より津曲清兵衛殿江被仰達、可然候旨、勘解由殿被仰候、

一其後又勘解由殿被仰候者、社役などの儀清兵衛殿江被仰達候哉之旨、御尋ニ而候、未被仰達之由、采女殿被爲申候得者、右之段ハ先無用ニ可被成候、早々出羽殿江被罷出候様可被仰候、五郎兵衛殿被罷出候節ハ、御名字之衆一両人被參候而可然候、夫ニ付町田甚左衛門殿・町田治左衛門殿此両人被參候、左候而、五郎左衛門殿被參候付、出羽殿御父子御逢被成、御吸物ニ而持參之御酒被給候、

一前廉勘解由殿被仰之由候而、國分清右衛門殿より加治木源右衛門迄承候者、町田五郎右衛門殿被罷出候砌者、輕料理なと被給候而可然旨承、其通ニ表之御座ニ而、諏訪采女殿・町田甚左衛門殿・町田治左衛門殿・津曲清兵衛殿、勿論町田五郎右衛門殿此人數一座ニ而料理被給候、

右、町田八右衛門殿・同五郎右衛門殿申分ニ付、家中上抑諏訪采女殿御下知を以、我等御使仕候間、爲後日如斯ニ候、以上、

寛文九年己酉二月四日　中抑　加治木源右衛門

○延寶二年甲寅十一月十八日、忠尚上願狀、請息男久東就御對面所獻見以賀正也、始　先君家久公時賜忠尚座班、在又八郎忠平・式部太輔久直之次、是所以叙兄弟之倫也、久直歿焉、歲首賀儀忠尚獻太刀、謁者序先後亦猶如久直存時、吾庶町田久興不肯之曰、以兄弟之循次則可矣、若夫論家秩、則忠尚獻幣豈以於北郷氏之後為哉、爭其列辭而無獻見矣、既而忠尚幼冲謁見　公於御書院、因循以到于今玆、至是、就御用人喜入次兵衛久甫・野津彌五左衛(門脱カ)鎮政上願狀、訟就外朝、於洎乎七年己未不

報、事備録久東譜中或謂當初未有御座間之朝儀、忠尚著座于御書院者、以忠尚幼弱且公子親故、特恩遇之、乃引見便殿之義耳、既而齡長猶依然不改者何、則忠尚一旦坐于三原重庸事、有一世貶黜之意焉、是所以不報其請也、其後久東嗣焉、始令就御對面所復久倍・久幸之例、乃不滿於忠尚之意見乎言外矣、斯説或然乎、

○四四三　町田忠尚口上案

口上案

事新敷儀御座候得共、我等事幼稚之時分、黄門様御意を以、町田家相續仕候処、如何様之儀ニ而御座候哉、於内之間年頭御太刀進上いたし候様被仰付候、御断をも可申上儀ニ候得共、幼少ニ而何之辨も無御座候、其後如御存、多年病氣ニ而不罷出候故、御訴訟をも不得申上、于今押移候、愚息好左衛門儀致成人、御禮日ニも致　登城儀ニ候間、年頭之御太刀、何茂同前ニ於表致進上候様被仰付被下度候、町田兄弟之筋目之衆、其外御一家庶流之衆も、於表被差上候處ニ、至町田家於内之間致進上候事、偏ニ迷惑存候間、奉願候通被仰付候様、御取成頼存候、以上、

『延寶二年』寅十一月十八日　町田出羽

喜入次兵衛殿

野津弥五左衛門殿

○延寶四年丙辰九月三日、忠尚卒、享年五十六歳、法名勝寶院殿提印忠携大禪伯、葬福昌寺之西山、置牌于石谷永福寺墓無勝寶院殿之字、按法名有院號者、則弗當稱殿字也、而今云院又云殿重複、然姑從俗耳、餘倣此、

―忠清（タヽキヨ）

梅千代丸　助太郎

○寛永十五年戊寅七月十五日誕生、母三原左衛門佐重庸女、同月廿一日、島津豐後守久賀為産射儀長慶九年壬申夏、綱久君華誕于江戸、久賀奉御弓役適江戸、久賀為義弘公外孫、故受特旨也、男子生而射天地四方、蓋倣桑弧蓬矢之俗也、

○町田大概記曰、出羽守殿十八之御歳御繁昌、又梅千代殿と御名申候、御弓親ハ島津豐後守殿にて、御祝之時茂、豐後守殿御夫婦御座候、此方より御

祝儀之御引出物御座候事、

○正保四年丁亥、梅千代丸元服、更名助太郎忠清、入來院伯耆守重高因　太守光久公命、代　公為加冠、賜賚獻品等事缺不書、

町田大概記曰、梅千代殿十歳之御時、町田弥兵衛前より申立御元服御座候、御名者助太郎殿と御給候、其時烏帽子親者入來院伯耆殿に被成御當候、其時分出羽守殿御在所、主取依無之、肥後長左衛門殿江可被仰付之由、此儀も町田弥兵衛申上、如其相定候、其脇肥後長左衛門殿甑之嶋之地頭被為當、彼島に渡海御座候、其跡に出羽守殿御身躰可被聞せ人無之由、又弥兵衛申上候處、樺山諸右衛門殿被相當せ、両年被相聞せ候、今年病死御座候、其跡出羽守殿御身躰爲可被聞せ、町田源左衛門殿今年十月より被爲聞候、此人之事ハ從　御公儀直に御當之由聞得候也、

○慶安四年辛卯正月二日、忠清朝御對面所拜　光久公、獻太刀賀新正、因賜座及觴、班位配於島津東市正忠廣、

慶安四年卯正月二日、御太刀進上次第、

内之御座

御　町田助太郎　鎌田又七郎殿

島津市正殿

町田大概記曰、梅千代殿被成御元服、助太郎殿御指出之時、嶋津又介殿・嶋津東市正殿・町田助太郎殿・伊集院源介殿、如此相定候而、御指出御坐候、御太刀も右之次第に參候、夫より御子達之次第ニ被成御指出候、如此御礼儀、　光久様御代に相定候事、

○慶安四年十二月十三日、早死、享年十四歳、法名梅隱玉花居士、葬福昌寺墓銘曰梅隱玉花公、置牌于石谷永福寺、

久孝（ヒサノリ）

長壽　米壽丸　勝兵衛

○明暦元年乙未正月十日、誕生于麑島新橋之第、母家女房傳稱小根占郷某之女、始侍忠尚身邊、後為妾、妾有妹、為本田助之丞親全妻、或云小根占士高崎氏也

○寛文二年壬寅十二月廿五日、元服、斯日　太守光久公親臨於忠尚之第、而手自加冠米壽丸、御家老鎌田藏人政勝為理髪、稱勝兵衛名久孝、　公賜久孝土器及御脇指一口、久孝亦獻太刀一腰・馬一匹代銀・野山海産三種・酒四樽、奉拜加首服之辱也、時久孝年甫八歳矣、

○寛文九年己酉十一月五日、久孝卒、享年十五歳、法名即空是心居士、葬石谷永福寺、置牌于同寺、時高崎藤右衛門挽悼久孝之溘先朝露不終天年、獻納大乗妙典八巻於永福寺、以修冥漠之菩提也相傳七月中元盂蘭盆排齊不供久孝椒料、為故事、他靈則不然、蓋有以也、

○相傳、忠尚體久不平、故欲傳家統于久孝、未及蒙允許、久孝早世焉、而舊譜加久孝家督圏、以入于廿一代之世數者、蓋修史之訛也、那則明暦二年寛陽公命曰、忠尚積痾未痊、宜出住石谷務加調攝、因使町田源六久英移居忠尚本第為番代參知家政、既而後萬治元年、久英止番代、則忠尚復住本第、主於町田本宗、又考諸賀正朝儀次第書曰、自承應四年至寛文九年、年頭町田出羽殿以當病不朝賀、寛文十年八月二日、　儲君綱貴公初就國時、出羽殿造朝獻太刀著坐行賀慶禮、自翌十一年町田孝左衛門家督出朝云々、由此、則寛文十年、忠尚未為告老(インキヨ)明矣、其以病一旦退居於石谷館者非世俗所謂隱居也、但明暦中書曰、出羽殿隱居高五百石、所謂隱居高者、謂隱棲于石谷之食田耳、且町田大概記其餘家牒遺文、未嘗載忠尚將老授統于久孝事、凡上書于官、官亦傳令等、偕用忠尚之諱、此乃久孝未逮受家統而夭死可知也、夫父未隱居其子為家督、是猶一國有両主、雖則古昔悪得有斯道理耶、因今削久孝之家督圏而著其實非正統矣、或論之曰、然則久倍之嫡子忠綱先父歿於朝鮮、何以入于世數乎、對曰、前此天正十五年夏五月、久倍從　貫明公祝髪更名存松、而見豊臣秀吉公于泰平寺也、君臣俱示遯世隱倫之體、丁是之時、忠綱蓋受父之讓也、又譬諸豊臣秀吉傳關白職於秀次、秀次嗣立秀吉更稱太閤、而臨朝猶如故、乃如存松亦是也、夫

百年之下論百年之上、其可否不可敢也、矧忠綱代父如京師軍朝鮮自任正統既久矣、與夫久孝僅成童夭而無嗣職明文者大異、今豈可擅如刪定哉、是後世之難斷姑闕疑可矣、或者唯々遂附其説于玆云、

（表紙）

廿二代 久東 萬治元至延寶八

廿三代 久居 延寶八至寛延二

町田氏正統系譜　卅二

藤原姓町田氏正統系譜卷第卅二 久東 久居

久東（ヒサハル）

初忠記（タヽフミ）　米松　孝左衛門

○萬治元年戊戌十二月十一日、誕生于新橋之第、母同兄久孝、

○室肝付主殿久兼之女也、

○寛文二年壬寅十二月廿五日、　太守光久公親臨于忠尚之第、是日、同兄久孝　公手自加冠米松、御用人喜入休右衛門尉久守為理髪、稱孝左衛門名久東、　公賜久東土器及御脇指一口、久東亦獻太刀一腰・二種一荷、奉謝加首服之恩也、時久東年甫五歳矣（久東獻品差降於兄久孝者、次男而非嫡子故也）

○寛文十一年辛亥十二月十七日、承襲（カトク）、嚮父忠尚因病不能修職、且久東之兄二人早世無子、於是、光久公使御用人高崎總右衛門能延降承襲之命、是允答於忠尚所請也、

鎌田又七郎正長　光久公第七之子、後鎌田藏人正勝、長於久東二歳矣、締交相能、其書疏往反數十通皆亡元禄之災、故今拈出一二□鎌田氏藏云、

○四四四　町田忠記書状

以上

（綱久）泰清院様御遺骸、今夜半時分ニ被遊御着候之旨、御注進忝奉存候、貴様御痛能被成御座候由、目出度存事ニ候、私氣色も弥快候而仕合之躰候、何共礼書令与候、恐惶謹言、

忠記

『此花押在串良町田新八藏文書以與本文稍異加寫于此』

六月二日　　忠記

（上包）　　町田孝左衛門
　　忠記

鎌又七郎様
貴報

延寶二年甲寅九月朔日、為五番組頭、
久東嘗演習犬追物、其傳訣書尚在笥藏、當時連名
以告于肝付兼柄之傳帖一道証見于左　按肝付伴三郎延寶八年八月換名左門、然則斯帖、當在八年以前

○四四五　島津久治外七名連署口上覚

口上覺

兼而被仰出置候御犬稽古大形御座候間、被定置御
稽古日、九ッ時分より御差出可被成候、若天氣悪
敷御座候者、晴次第翌〻日之間、御差出御稽古可
被成候、先比如申入候、御奉公有當病之儀者別条、
以私用御断之段者難承置候、左様御心得可被成候、
以上、

十一月三日

嶋津筑後（忠智）
北郷宗次郎（忠昭）
頴娃左京（久甫）
嶋津主計（内匠）
根占八郎右衛門（清雄）
町田孝左衛門（久東）
喜入求馬（久尭）
嶋津美作（久治）

肝付三郎殿

同四年丙辰十月廿四日、久東豫奉來年頭御禮使之
命、今日上道到江戸之藩邸、越翌五年丁巳正月二
日、登中城輪（ホンマル）　公幣御太刀・馬代黄金十両、見於
大將軍家綱公、上歳首慶禮、時久東亦私獻御太刀・
馬代銀拝　台顔、而後還國反命、
延寶五年丁巳二月廿七日、重建石谷邑前谷熊野權

現社寶殿、

○四四六　前谷熊野権現社宝殿棟札写

奉重造立權現御寶殿一宇

右奉為天長地久　御願圓滿、殊者大檀那藤氏町田孝左衞門忠記息災延命　子孫繁昌　武運永保　勝利自在　領内安全　人民快樂　一切災難未然他方心中所願如意滿足矣、仍意趣如斯、

導師法印權大僧都周恕認之、

延寶五年丁巳二月廿七日

當奉行　諏訪采女兼延

大工　滿尾源右衞門宗親

前田傳左衞門

藏元十右衞門

役人　松下次五右衞門忠説

限元與右衞門宗永

神主　山田土佐太夫

町田佐左衞門

○四四七　町田忠記書状

普請奉行　川野八郎右衞門

庄屋　森山惣兵衞

○　尚〻、何事茂〳〵夜前之儀者、御ゆるし可被下候、奉頼候、猶も申上度儀共御座候へ共あ（マヽ）きれ候、返〻御計可給候、如此候、以上、

夜前御狀忝奉存候、早〻御返事可申上候處ニ、難去儀御座候故、引延仕候、貴様御心中儀何そ被仰聞す、ゆる〳〵と罷有候へ共、無其儀候、次ニ者、私夜前者早〻罷歸候由被仰聞候、殊之外酒狂之故ニ候、此私心中候ハヽ、狀ニて申上候事吉と被思召候哉、少茂〳〵無其儀候、何共御歸之時分可申上候、恐惶謹言、

八月十四日　　忠記（花押）

（上包）

鎌田亦七公　貴報

町田孝左衞門

○延寶八年庚申六月廿七日、　光久公至自江戸、久東預奉　公歸藩謝恩使之命、今日上道向江戸、比至江戸患心疾、不能遂　公命而還、是歳請罷五番組頭、

阿多六郎右衞門忠朗日記曰、延寶八年庚申二月九日、　光久様江戸御暇上使土井能登守殿、二月八日江戸御發駕、三月廿五日伏見御着、卯月十日大坂御出船、六月十八日久見崎江御入津、六月廿七日鹿児府江　御歸城、七月町田孝左衞門殿　中將様御暇御礼御使ニ江戸江御參候処、海道ニ而御氣違被成候、

○延寶八年十一月廿七日、原建(カサネテ)歳久八幡祠于石谷邑熊野大神社傍焉、歳久即島津左衞門督晴蓑也、今玆久東使麑島諏方廟神主佐藤信秋追尊晴蓑、為歳久八幡、立其祠而迎鎮霊神、書其指趣於棟礼納於祠中、

○四四八　歳久八幡宮勧請書

奉勸請歳久八幡宮

當社垂迹於先代雖為若宮、願主依有誓願、今年十一月下旬、從五位某参向、以宗源神道之妙行、同位于神、奉崇敬歳久八幡宮、神霊益高明也、人而不敬之、何以預其惠乎、篤信仰之有請願、而無不為成就、至祝至禱、唯一神道、三元三行三妙加持信受奉行、　專祈藤原忠記公御武運長久　心身堅固　衆病悉除　壽命長遠　福禄圓滿　國家豊饒年月日時災禍消除　諸願成就　如意安穩故也、

于時延寶八年庚申十一月廿七日

麑島諏方大明神神主
從五位佐藤和泉守謹言

石谷村鎮座
『裏ニ』
無上霊寶神道加持

○四四九　歳久八幡宮再興棟札写

奉再興拝殿一宇、

右奉爲天長地久　御願圓滿、殊者
源光久公并綱貴公御息災延命、別者大檀那忠尚御
子孫繁昌故也、

講中結衆

惣大工　前田傳左衞門　奉行　町田勘兵衞
同　大山清兵衞　同　荒田清兵衞
同　前田主計　同　山田土佐
庄屋　森山惣兵衞　太郎左衞
町田小平次　瀧聞權左衞門
湯元新兵衞　同姓千兵衞
飯牟禮新右衞門　四元七左衞門
猪俣治右衞門　荒川惣左衞門
大内田八兵衞　中島仲左衞門
川崎清兵衞　大山正左衞門
大山及右衞門　山之内次右衞門
益滿覺兵衞　同姓二右衞門
重信權之助　竹下覺左衞門
前田伊左衞門　宮原伊助
鶴田覺右衞門　椿松孫三郎
吉左衞門　長右衞門
千右衞門　助兵衞
藤兵衞　九兵衞
平左衞門　十左衞門
休左衞門　嶌右衞門
助次郎　彦七
新右衞門　金右衞門
平右衞門　次郎左衞門
休七　清右衞門
久次郎　長作
源右衞門

天和元年辛酉（即延寶九年改元）正月、新正朝賀（ネントウゴシウギ）、久東於御
對面所第五番座為獻見著座儀、前此、寛永十七年
光久公即位後、就國（ゴニフク）始受新正朝賀（御初入部御禮年頭御儀式也）、忠
尚以幼冲故就内朝席（謂之内御座配）謁見於　公、遂為流例
以至于延寶七年、夫新正朝儀其來最尚矣（天朝元正會昉乎神武帝）

時、見于國紀、天正中、存松久倍之賀正受見也、就御對面所（即外朝凡賀正拜禮以就御對面所為榮伍矣）獻劍馬、出班獨謁申次贊唱就賓位（謂之著座）、公乃賜觴三回、即賜宴大臣之儀（謂之御三獻）、畢拜命之辱而退矣、其後　義久公在國分城、久幸自大口朝拜賀歲首、一如久倍例矣、當初在一所城邑者、遣使上書而陳賀歲首、公亦答之授履新之慶章、設有自朝者雖曰一人、公輒臨朝受見、有衆則一列皆就賓位、而洎乎　光久公時制內外朝儀、其儀左右竝進躬獻儀刀就班席（謂之着座持參太刀）、從其家格各有差降、左賓位為甲、右主位為乙、一番座一列、二番座一列、乃至第五番座、每一列五六人其左右一列謂之一與也、但因朝會多少、初無有定人數也、既而後忠尚雖年已長、猶就內御座配者、因循無改新之令耳、於是、延寶二年十一月、忠尚上書訴諸朝、而猗違者連歲、至今玆元年（即天和元年）、久東於御對面所獻太刀賀正、始復舊規以為永式（後享保九年內外朝拜止耦班為單列、皆以次就賓位、因其多少自一番至于某番者如故）、因今忠代・久東之呈狀及自寛永十七年迄延寶九年新正會班位証見于左、雖非則本年之事、其為終言之書于玆、以為收局耳（今以躰謂、則御座間為內朝、御書院為中朝、御對面所為外朝、而外朝正寢朝座之最尊大者也）

町田大概記曰、町田殿代〻御太刀進上、町田出羽守久倍鹿児島御屋形年頭之御祝儀之時者、於　御對面所久倍御太刀進上被申候、夫より大口江被罷移候時者、　龍伯様御前ニ而御三献被給候、久倍死去之以後、町田勝兵衛殿鹿児島江被參、國分江年頭に被參候時、　龍伯様御前御三献被給候、勝兵衛殿被參候得者、大口江被居候様ニ、御三献も不被給候様子ニ罷成候、其後梅千代殿被成御元服、則出羽守殿ニ御受領御座候而より者、御子様御一門之家續御成被成候而も、御年次第ニ御座躰可有之由、　黄門様被成御定、　又八郎殿・式部太輔殿・出羽守殿、其次に玄蕃殿・安藝殿、如斯御座躰被成御定候、玄蕃殿者相模殿御跡御定御座候而より高座被成候、其故者嶋津殿御家之依爲庶子惣領如此也、出羽守殿御太刀茂北郷殿次ニ御進上候事、是又前代無之儀ニ而候得共、御兄弟之御座、

右躰に相定候故、御太刀も如此、其後式部殿御死去之時、出羽殿被成御差出候時、御太刀を北郷殿次ニ可有進上之由、奏者衆承候、其時町田彌兵衛申事ニ、式部様御存命之時御差出次第を以、北郷殿次に出羽守殿御太刀進上申候、古より北郷殿次に町田殿御太刀進上爲被申事無之候、其故ハ町田殿者北郷殿爲被別家之筋ニ而無之候、其時出羽殿御太刀無進上に被成御指出候、其時之御使佐多越後殿・澁谷四郎左衞門殿より、弥兵衞申分尤之由被仰、御太刀進上無之候、其後度〻御指出之時、御太刀進上無之、其後梅千代殿被成御元服、助太郎殿御指出之時、嶋津又介殿・島津東市正殿・町田助太郎殿・伊集院源介殿、如此相定候御指出御座候、御太刀も右之次第に參候、夫より御子達之次第に被成御指出候、如此御祝儀　光久様御代に相定候事、

○四五〇　町田勘解由口上覚

口上覺

町田出羽殿家より御太刀進上座配之儀ニ付、延寶二年寅冬、私月番之時分、出羽殿口上書を以訴訟被爲申候得共、御相談不相濟御返事及御延引候間、御相談被成願之通相調候様、私前より申上可致取持旨、旧冬孝左衞門被罷登候刻、被頼置候出羽殿口上書之通、寅ノ十二月、御用番帳ニ記置候条、宜御談合被成御返事被仰渡候様有御座度候、以上、

町田勘解由

喜入次兵衞殿

野津安右衞門殿

○四五一　町田久東口上

口上

出羽存命之内、延寶二年寅ノ十二月、口上書を以申上置候、町田家より年頭御太刀進上座配之儀、内之間ニ而進上仕候、町田家兄弟之筋目之衆、其

外御一家庶流之衆も、於表御太刀被差上候處、町田家於内之間進上いたす事、偏ニ迷惑存候間、奉願候通被仰付候様、御取成頼存候由申上候得共、御相談可被遊之由候間、何分と不被仰聞候、私辰之冬、年頭爲御使上洛仕候留守中ニ茂相濟候様ニと、町田勘解由殿頼置候故、已ノ正月口上書を以被爲申上候得共、左様成ニも一着之御返事も無御坐、于今其分ニ御座候、御發足前ニ而諸事御取込ニ茂可有御座候得共、此節奉願候通、被仰付候様御取成頼存候、以上、

『延寶七年』未三月十九日　　町田孝左衞門

喜入次兵衞殿

野津安右衞門殿

○四五二　年頭太刀進上座配次第

○寛永十六年卯正月『蓋十七年之誤也』

年頭御太刀進上座配次第

『十六代久直、後賜御称号』
北郷式部太輔殿

『十七代久頼仁十郎、後賜御称号』
敷根筑前守

上『元祖忠朗』
兵庫頭殿

『入來院十六代重高』
澁谷伯耆守

一與

『十三代忠治、後賜御称号』
佐多又四郎

『十代久政』
頴娃左馬頭

上『十代久賀　黒木』
豐後守

『十代忠纒』
喜入攝津

一與

『十四代久辰』
新納四郎

『二代久加』
北郷佐渡守

上『十四代久運』
川上上野介

『十六代久尚』
樺山又九郎殿

『十五代豐兼』
諏訪神六

一與

『八代忠心』
桂又十郎殿

『廿代重永　小松』
根占七郎殿

上『四代久雄　永吉』
安藝守殿

『五代忠張』
吉利下総守

『十九代義時』
比志島左京亮

内之御座

『忠尚』
町田出羽守殿

『六代久國□伊膳』
伊集院右衞門佐殿

『三代貞昭』
伊勢隼人殿

上『元祖忠廣』
東市正殿

『十四代久朝』
伊集院源介殿

『廿三代正勝』
鎌田又七郎殿

如右例年者不究候得共、先當年者次第如是候、新納殿・北郷佐渡守殿、此賦ニ付少申分有之候、後年者御談合可相定者也、

○**四五三**　年頭太刀進上座配次第

○慶安四年卯正月二日、御太刀進上次第

『忠治』佐多又四郎　『二代仲休』島津主計　内匠

御島津又八郎　『元祖久茂』島津中務　内記

『七代久治』島津美作　垂水

御『久憲因養父久慶之罪除世代　日置』島津大膳　『十九代重時』菱刈丞介

『五代久竹』島津又十郎殿　日置　『八代兼屋』肝付伴兵衛

御『久賀』島津豊前　『十二代久友』頴娃右京

『重永』樺山源三郎　根占七郎　『十二代義明』川田掃部

御『久雄』島津安藝　『五代忠張』吉利下総　『十九代義時』比志島左京

内之間

『忠尚嫡子忠清』町田助太郎

御『忠廣』島津市正殿　『廿四代正長』鎌田又七郎

○**四五四**　年頭太刀進上座配次第抄

○承應二年巳正月二日、御太刀進上次第

内之御座一番

『忠尚』出羽殿

御『忠廣』市正殿　『正長』又七郎殿

○**四五五**　綱久初入国太刀進上座配次第

○明暦元年乙未六月三日、綱久様御初入國之爲御祝儀、太刀進上之次第、

一　與

『久雄』島津安藝殿　『久朝　本家』伊集院源介殿

御『忠朗』島津兵庫殿　『十八代久清』樺山源三郎　『兼屋』肝付半兵衛　『重永　小松』根占七郎殿

一　與

『久賀』島津豊前　『久加』北郷佐渡

御『久憲』島津大膳　『久治』島津美作　『七代久守』吉利仲四郎　『十七代重通』入來院石見　『重時』菱刈丞介

一　與

『十四代久孝』佐多又四郎　『九代忠長』喜入攝津介殿　『十四代正兼』諏方甚左衛門

御『久運』川上上野　『八代忠知』桂弥三郎　『六代久明』大野源右衛門　『十五代國度』川田與右衛門

一　與

『十七代久時』御種子島三郎二郎

但與合なし

右者、從遠島參上ニ而日限不究故、打込之太刀進

上ニ而、後琉球衆御祝儀、

一與　但内之御座

『元祖忠清ヵ　新城』島津又介　『久國』伊集院右衛門殿

御『久竹』島津又十郎殿　『忠尚右者當病故披露太刀』町田出羽殿　『廿三代正勝』鎌田筑後殿

一與　但御書院

『久治』御島津美作殿

但與合なし

一與　但御書院

『十七代久定　都城』御島津又作殿

但與合なし

『八代久將久國子ヵ　川上庶流』御川上將監

○四五六　年頭太刀進上座配次第抄

○明暦二年丙申正月二日

内

『忠清』島津又助殿　『久國』伊集院右衛門殿

御『久竹』島津又十郎殿　『忠尚』町田出羽殿　鎌田（マヽ）

一承應四年未正月二日より寛文七年未正月二日、御座配迄町田出羽殿當病と有之、寛文八年申正月二日より翌九年酉正月二日迄者長病と有之、

○四五七　綱貴入国太刀進上座配次第抄

○寛文十年戌八月二日、修理太夫様就御入國、御太刀進上座配、

内之御座

『忠尚』町田出羽殿　『四代貞顯』伊勢又兵衛

御『十九代忠智　都城』島津權十郎殿　『正長』鎌田又七郎殿

○四五八　年頭太刀進上座配次第抄

○延寶六年午正月二日、此より前、孝左衛門ハ二番之頭、伊集院ハ一番之頭ニ在リ

内之御座配

『四代久當　佐志』島津權七殿　『七代久孟』伊集院半兵衛　『貞顯』伊勢又兵衛

御『二代久侶』　『廿一代久東』　『五代久輝　永吉』
島津權兵衛殿　町田孝左衛門　島津又七郎殿

○四五九　年頭太刀進上座配次第抄

○延寶七年正月元日

内之御座配

『久當』　『元祖久達　十太右衛門』『正長』
島津權七殿　島津守右衛門　鎌田又七殿

御『久侶』　『當年初而出座』　『久孟』　『貞顯』
島津權兵衛殿　町田孝左衛門　伊集院半兵衛　伊勢

又兵衛

○四六〇　年頭太刀進上座配次第

○延寶九年酉正月改元天和、年頭御太刀進上御座配、雖不被遊　御出座候、如例御太刀進上、

御書院御座配

『五代久輝　永吉』　『五代久了』
島津中務　新納又左衛門

御『六代久竹』　『二代久武　内記』
島津圖書　島津甲斐　『十七代久時』『以上御家老』　種子島藏人

御對面所御座配

『九代久邦　黒木』『十四代久朝　本家』
島津豐後　伊集院十右衛門殿

御『二代久薫』　『元祖久盈』　『久甫』
島津兵庫殿　樺山權左衛門　頴娃左京

『久輝』　『三代久文　内記』
島津中務　島津助太夫

御『久治　垂水』　『十九代忠智』　『十五代豊兼』
島津美作　島津筑後殿　諏訪神六

『十四代久辰』　『廿一代清雄　丹波』
新納近江　禰寝八郎右衛門

御『五代久竹　日置』　『内匠』
島津丹波　島津主計

『十六代久達』　『十代久澄』
佐多豊前殿　桂太郎兵衛

御　『四代忠昭』　『十九代重治』
川上上野　北郷惣次郎　入來院隼人

『十代久亮』　『十六代國高』
喜入求馬殿　川田長右衛門

『二代忠守　助之丞』　『大野ト隔年』　『十九代義時』
島津大學　吉利本右衛門　比志島彦右衛門

『八代忠名』　『九代久兼』
吉利本右衛門　肝付主殿

御『七代久洪』　『先年町田之家督被仰付候ニ付初而着座』
島津又五郎　町田孝左衛門

『四代久雄　矢栖』　『十八代久頼　正保三年賜御称号ニ土岐』　敷根
島津長七郎　島津筑前

御『四代久當　佐志』　『六代久明』　『廿二代重長ヵ』
島津伊賀殿　大野源右衛門　菱刈孫兵衛

『吉利ト隔年』

内之御座配

『元祖久達　十太右衛』『廿四代正長』　『四代貞顯』
島津守右衛門　鎌田出雲殿　伊勢兵部

御『二代久侶　新城』　『八代久盈』　『十二代基明　畠山』
島津壹岐殿　伊集院半兵衛　阿多松之助殿

酉正月二日

○天和元年、是歳　光久公命令以久東多病故、　公子式部久始為町田家番代、稱町田氏攝行邑政曰、

俟久東之子年長、然後罷之、久始者　光久公第十之子、後賜島津稱號及田禄千石、以準二男焉、即島津大藏源久明是也、

○天和元年十月十六日、講犬追物于麗城之下、久始預射手（時町田式部）、

○四六一　犬追物手組

於　御城下馬場二手組次手

『綱貴公』侍從殿五疋　島津又五郎三疋
『忠守』島津大學二疋　島津助太夫三疋
『久始』町田式部二疋　頴娃左京一疋
種子島藏人三疋　肝付左門二疋
島津帶刀三疋　島津主計二疋
『久治』島津美作二疋　『久當』島津伊賀三疋

檢見　喚次
新納又左衞門　土持右衞門
御太之役　川上仁右衞門
御介副　喜入吉兵衞
御鞭之役　富山十兵衞
御行騰之役　伊地知□八
右同　伊地知彦右衞門
御履之役　伊地知正右衞門

是歲、久始初見　儲君綱貴公、

天和二年壬戌三月廿八日、久始領吉田（麑島郡）地頭職、

貞享元年甲子十月朔日、久始轉領大根占（大隅郡）地頭職、

薩摩郡東郷山田村久倍以來所領知也、廿一代忠尚時、島津大膳久憲（彈正久慶養子）欲以己領地入來院倉野村易之、乃咨稟諸　光久公、

因賜忠尚倉野村八百六十石餘之地、以為持切名、而易山田村返地也、逮于久始為番代、沽却倉野村田穀七百石、今僅存百六十石餘耳、夫久始奉旨輔久孝為番代者靡他、須要助理家政節適費用矣、何故截賣（キリウル）倉野村之田地者過半乎、或謂久始生貴漸追時好多費府庫財、若然、則無益于當家、而還有嫁

後患也、可謂番代之責不塞者矣、予未知有何説、
録以俟證解也、
久富覺書曰、入來院之内倉野村持切之領地ニ而候
處、助太夫久居就幼少、從　光久公、島津式部久
明爲番代被仰付、久明代倉野村之内高七百石被相
拂、殘高百六拾石餘有之、持切之筋ニ而無之候、
貞享二年壬戌、久始免町田家番代、賜新恩地為公
室次門、
○貞享四年丁卯七月廿七日、　中將光久公於江戸告
老、傳國於　嫡孫綱貴公、本月　太守綱貴公承祖
即位于江戸邸、九月、　光久公辭江戸、十二月朔
日、入本藩、
○元禄三年庚午十月廿八日、久東以宿疴未愈、上願
狀請自老、今日允許、命家嫡久居襲統、
○寛永四年丁亥十二月三日、御家老佐多豐前久達使
御用人川上八郎左衛門久清降　太守吉貴公命曰、
將以　前太守綱貴公第四之女降嫁久東之嫡孫久儔
也、今日約婚預宣旨、時久東以病、使伊集院用之
助久富登城聽命也、
○享保五年庚子六月廿九日、久東卒、享年六十三歳、
法名枝照院殿月珊靈明大居士、葬石谷永福寺、置
牌于同寺、

―米松（ヨネマツ）
○延寶四年丙辰十二月廿八日誕生、母肝付主殿久兼
之女、
○延寶六年戊午四月朔日夭、年三歳、法名花隱清心
童子、葬福昌寺之西山、以六地藏石像為墓表、

―女子
千代袈裟（チヨケサ）
○延寶六年戊午四月廿八日誕生、母同兄米松、
○嫁町田源左衛門久孝、
○元禄十二年四月十四日、
太守綱貴公五十算御賀の時よめる、
町田源左衛門久孝妻
きみか世は千とせのはるのすゑかけて

ときはのまつにちきりおかなむ

○寶永六年己丑三月二日卒、年三十二歳、法名永明院殿放雲慈光大姉、葬玉龍山中石心院久孝之墓域、

●久居（スエ）

初忠英（タヽヒデ）　忠知（タヽトモ）　忠以（タヽモチ）　米鶴丸　米袈裟　助五郎　助太夫（一本作太輔）、

○延寶八年庚申六月十七日、誕生于新橋之第、母同兄米松肝付主殿久兼女、

○室桂外記忠厚女、

○元禄三年庚午十月廿八日、命久居襲統、許久東告老、久居行年十有一歳、是日見於　光久公拜謝襲統恩、平田清右衞門純香為奏者、是日　公命曰、使公子式部久始相久居家攝行邑政者祗（マサニ）五年、而後授家政於久居、

○元禄三年十一月十五日、造朝元服、　太守綱貴公加冠、御家老佐多豐前久達理髪、名忠英、　公賜土器及御脇指一腰、忠英獻品如例、今日因請改稱助五郎、御用人仁禮覺左衞門景代降旨、

○元禄七年甲戌八月十一日、御記録奉行田中五右衞門國明・伊地知助右衞門重英奉　宣移文（フレワタシ）曰、録呈各家宗圖譜諜以下宣書者凡廿一条、是　公命將編修公族・他氏之家譜也、今夫如其條章、没交渉于久居傳、然而由是吾宗之宗圖文牒呈上于官、遂嬰丙子之災盡委煨燼矣、實元會一大厄哉、適移文留猶存焦餘中、乃採載左方、

○四六二　伊地知重英・田中国明連署覚

覺

寛文九年己酉春、從

太守様、御氏族并他家系圖可被遊御覧之由、大田小平次・河野六兵衞ニ被　仰付、両人致相談、御氏族者不殘、他家者古來より一所を領、又者御家老職被仰付候家廿四氏撰出、其家々ニ申渡、系圖并文書等を以相考被差出候上ニ而、致論儀、肝要之事計を成程文字を省き相記候而、略系圖ニいたし、備　御覧候、其上、撰述者俄之事候得者、考

之當否有之、又者其家ニよりも文書舊記等不見出、公私考少ミ者違も有之儀候故、六兵衞存命之内、文書旧記并古系圖を見合可相載、證據亦者考違之儀共見出次第、備　御覧候系圖之留ニ致押札置候而、得能造酒之允を以、右之段申上、此系圖相改可差上之由、達　貴聞候、六兵衞致死去、我ミ共見出申候儀共多候故、弥以相改可差上覺悟ニ候處、此度右系圖御下ヶ被遊、私共両人ニ右之諸家系圖遂吟味、相改可差上之由、　御意候条、致再撰筈ニ候、就夫、其家嫡被勉候面ミ江申達、庶流之方へ被相達、於其家ミ被遂論儀、其家嫡より被差出候者、遂吟味、至後代無相違様ニ可有之候、來春御發駕前ニ、清書不相濟候而不叶儀ニ候条相究申候、日限ニ右諸家之指出可有之候、各爲御心得可被爲書出条ミ、左ニ相記候、

系圖ニ可記傳之覺

一元祖之家號を定候由緒證書可有之ハ、不及吳儀候、家傳計ニ而茂、賜何國何所號何と、亦祖父并外祖之讓を得、在名等を爲家號、其外何そ由緒有之家號を定候家者、遂吟味、理筋次第可相記事、

一從元祖至當代男女之兄弟次第不乱、尤壱人も不殘、假名・實名、母何某実名女と、女子者何某ニ嫁と可相記事、

一先年之系圖ニ其家ミ之元祖相違有之、今亦考出儀共候ハヽ、先年之系圖と此度被差出候を両通共ニ、考之證據相添、可被差出事、

一養子罷成候者、何某養子と養父之實名迄、亦養子入來候ハヽ、實父之儀右同断、可相記事、

一禁裏・院中・將軍家より拝領物或御感之御綸旨・御教書等者、其正文或写ニ而も相添、拝領物者其品ミ書附可被差出事、

一所領拝領、古來者於一所・一郷・一村被宛行、其地を爲居所、子孫迄も令居住來候衆多ミ有之候、證據於有之ハ相考、其上遂吟味可相記候、雖然、古來一所之例と者可爲格別候、若其家ミニ右之證據不相知、官庫之旧記ニ爲相知證據於有之者、可

相記事、

一地頭職之儀者、御一族并他家之歴〻之家、無余儀御奉公仕候衆、雖爲平人忠節武功之人、亦者無比類戰死共仕候子孫共ニ而、爲被仰付儀候、寛文十五年以前之地頭職之儀者、證據次第可相記候、其家無證據、官軍之旧記ニ於有之者、可相記事、

一抜群之武功忠勤之輩、或武藝等爲勝譽有之候者、先年之系圖ニ茂被相記候条、前ニ記後之儀も候ハヽ、證據次第ニ候事、

一先祖江官位叙任被仰付證書、亦家傳之段、可被相記事、

一戰死并殉死之事、不致落候様別而入念候条、成程尋究、證據雖無之、慥ニ見得申候者、何年何月何日於何所戰死と可相記、但戰死と雖有之、或御敵對又者於他方、亦内戰死之儀者各別之条、其委細可書分、年月日何所不相知候共、戰死於無別儀者可記、官庫之旧記ニ可考之事、

一嫡家之儀者、代〻病死之年月日迄并誕生之年月日、相知候者可相記事、

一御家ニ御敵と成、後ニ降參之家、本領・半地・三部一・五部一被下置、又後ニも依子細、本地被召上候儀共、委細ニ可相記候、御敵と成候家者、一時片刻と云共、其分不相記候而不叶儀ニ候条、有躰者不殘可被書出候、官庫之旧記考候上ニ而、其子孫ニ致論儀、其上ニ而可相記事、

一先祖亦者當代ニ茂、他國江致出奔罷在、或其後致歸參事、可相記候、若致隱密候者、御咎〻可有之事、

一雖爲嫡子不肖ニ有之、或者背君父之命、家督不被仰付、就病氣家督難勤も有之候条、其段可相記候、他腹之長男者、其段可相記候事、亦二男ニ而も不義之子細有之候者、家之位を下ヶ、三男・四男・五男ニ而も、二男ニ準候儀、古例ニ候、右通之類者、得と遂詮儀、可相究事、

一嫡子ニシテ他之家又者一家中之養子、亦者他號を冒、後ニ雖復本姓、可準次男事、

一其家〻之世ニ記後ニ、又者先祖之世名考出茂可有之候条、此段茂證據無之候共、考出候分、可相記候、尤證據於有之者、可被差出事、

一先年被差出候系圖ニ、其家之氏族落候家多〻候、縱庶流之子孫共、いか様ニ凡下ニ雖罷成候、慥成證文、證據於有之者、其嫡家之吟味次第、可相究候条、其段可被書出候事、

一先祖亦者當代ニ御昵近ニ被召出、或者武功亦爲勝藝能故ニ被召出候ハヽ、其段可相記候、亦御昵近より家中ニ御附人と成、尤家臣と被召成、至于今昵近同前ニ罷居候哉、亦者身躰致衰微、或者依罪科無爲方家僕と成候儀、可相記事、

一依背　君父之命、被誅伐候事、委可相記事、

一其家〻ニ而、庶流ニ相分候元祖不相知候家、多〻有之儀歴然候条、不相知候者、其家ニ而相知候者を始となし、從是上世不知所自出と致片書、相知候假名・實名・法名計ニ而も、可相記事、

一代〻之人、幼名を始、假名・實名并入道名まて不殘可相記事、

右條〻、各爲御心得如此ニ候、寛文九年より當年迄廿六年ニ及候条、子孫不相載、亦者考出候儀も可有之候条、成程不致落候様ニ可有之候、此度之再撰ニ致落、亦者考違於有之者、別而殘念至極候、其上、此系圖近年中ニ亦〻改可被仰付儀不相知候条、互ニ遂御相談、至子孫無究不及吳儀候様ニ可致候、各其覺悟可被成候、各家〻ニ付相定候日限之通可被差出候、若及遲滯候得者、障罷成候条、載後之儀者可及口能候、以上、

戌八月十一日　　御記録所　田中五右衛門（国明）
　　伊地知助右衛門（重英）

○元禄七年十一月廿九日、前中將光久公薨于麑城、

春秋七十九、寛陽院殿、

○元禄八年乙亥二月十四日、爲五番組頭、後為三番組頭、本月請改名助太夫、

○元禄九年丙子四月廿三日、上町行屋失火、東風簸砂忽及金城、吾新橋之宅罹延焼、焚燬府庫、文獻武器為烏有焉、

○四六三　町田久甫覚書

久甫覺書

町田家先祖より傳來之巻本二軸、

立久公御舎弟河内守久逸日州福島江御移之節、山田出羽守忠尚（齋名聖榮）相付被參候、福島ニ而忠尚より、御家之次第被書記、梅吉江被遣候帳一冊、

天文四年、從　貴久公梅久・忠榮江賜密封文書、

忠榮代被復本氏町田家號之時、氏族皆号町田、此時從　貴久公天文五年七月、賜御證判、

從　義久公祁答院大村之内新開之村、久倍江被給候御書付、

貴久公、伊集院・鹿児島其外諸所就御安堵、兼而以御書、如御約束二十町之知行、忠榮江被給候文書、

忠恒公御簾中様御在京之時、久倍供奉在洛之節、義久公・忠恒公御両公之貴簡、

義久公・義弘公・久保公・忠恒公より久倍江被下候貴簡數通、

右八行之文書・舊記、元禄九年四月廿三日、御城御回禄之節、町田家屋敷類焼之砌爲致焼失欤、

横山長右衛門日帳曰、元禄九年甲子（丙カ）四月廿三日申、晴天東風、夜八ツ時、惠比須町竪山助右衛門名子清右衛門火本、上町行屋より出火有之、東風甚手強吹候而、御城風下ニ而候間、親慶左衛門・堀新納殿出會打續候、御城橋之邊ニ御用人上井五郎左衛門殿其外并居被成候、御厩屋へ走續可申由ニ而、御城江入れ不被成候間、大形御厩江參り候、我〻三人御断申、屋形へ罷出候、親事者、吳國座へ御入、堀新納殿・私、進物藏江上り申候、左候而、町田助太夫殿所・島津虎安殿火飛候而、大雨よりも大火飛來候、御番所上箱むねに火入、御兵具所

之角ニ火付、物奉行所入口之上に火付、小人數水は無之、精を出しても無其詮、一度に燒立申候間、何れもあきれ果、涙をなかし候、二の丸打續平長屋壱ッ解こぼち候、島津内記殿・同又七殿下知ニ而、漸取留申候、下之火は肝付主殿殿迄燒、金藏ニ而取消申候、島津主計殿手ニ而候、

○元禄九年十一月四日、　太守綱貴公命久居領末吉（鹿児島郡）地頭職、

○元禄九年十二月、聘桂外記忠厚女（忠厚初名忠昶、母太守光久公第廿五之女也）、名千代鶴、産嫡男久儔、而後離婚（是後、仕綱貴公女亀姫君、為老内人稱桂方、元禄十六年、從行亀姫君成婚于近衛家久公、君薨乃還家、寶永六年己丑九月十一日死、法名月鏡院周山明光大姉、葬桂氏塚城、）

○元禄十年丁丑二月、久居自新橋第移家于千石馬場（本門長屋棟木書元禄拾年丑二月五日之九字、蓋千石第宅營作畢日所記、而文化五年十月十六日、修補門上時見得之、）

○元禄十二年己卯四月十四日、今春　太守綱貴公行五十算慶壽禮、群臣及婦人各上詩歌、奉祝千歳無疆、其題曰松契遐年、是日久居（時忠知）作七言詩、妻桂氏作和歌呈上表賀也、久居夫妻兼和漢之才情、一唱一詠藻思諧新、可謂伉儷媲美者矣、而後夫婦致破鏡、雙璧不復全、況又久居生平之詩艸遇焚燬、今也亡矣、可勝惜哉、

○四六四　町田忠知久居夫妻詠草

春日同賦松契遐年詩

忠知上

長松千尺秀山城　丹鶴神仙同結盟　知命仁君堯舜德　國人祝壽樂升平

町田助太輔忠知妻

いく千代のかきりもあらしわかえさす
まつをともなふきみかゆくすゑ

○元禄十四年辛巳五月十二日、新建町田邑鎮守社及同所福島大明神祠（鎮守・福島両社、傳、見上梅吉譜）

○四六五　町田邑鎮守社棟札写

奉造立鎮守御社一宇

『此間佛語略』

右奉讃嘆町田鎮守垂迹、利者以大聖、應用為神冥垂迹、自證得難思之内徳現妙用無窮之神力、以正道正理、為心神通足、為　為導愚夫顛倒之迷寂静安樂、心底起攀縁動作之用、為　卑劣雑類之生精霊微細色上現夜叉鬼畜之形、釋尊説一代八萬教、必現神通薩埵度大千界、皆是運神足、天長地久所願圓滿　風雨順時　五穀成就　萬民快樂　神冥之惠深厚故也、殊者町田家督藤原朝臣忠知嫡男米鶴丸、君臣安全　不變不動　武運長遠　子孫繁榮家門安穩　皆令滿足如意成釋故也矣、仍志趣如件、

元禄十四年巳年五月十二日

役氏
権大僧都峯連院徳宗謹白也、
普請方役人
隈本諸左衛門
檢者
四本伊右衛門
右同
岩下大右衛門
大工
前田傳左衛門
社人
武聞權右衛門

大宮司町田門
木工左衛門
役人
加治木六右衛門印
同
折田丹下
中押
鮫島彌左衛門

○四六六　鮫島弥左衛門外二名連署書状

當社鎮守大明神之儀、依古拝殿・宮殿計而御座候處、此節町田家督忠知以下知、御圖御申被成、御居住代ニ付、御殿・廊下迄致造立候、附古者南向御宮作有之處、此節御圖ヲ以、両社共東向ニ御宮作御座候、左候而御遷宮、元禄十四辛巳年五月十二日御遷宮有之、忠知名代町田十郎右衛門・役人折田丹下附社人山田讃岐相勤候、依之、古之棟札寫、新棟札此節相改納置候、文字不分明有之時分者、大宮司社人方早々可申出者也、

元禄十四辛巳年五月吉日

役人
折田丹下印
同
加治木六右衛門印

中押　鮫島彌左衛門

○四六七　福島大明神社棟札写

奉造立福島大明神御社一宇

『此間佛語略』

右意趣者、奉讃嘆神冥御本地本是往古如來深位之大士也、與法利生悲願　重、為佛法兼護王法、假出法性都月、移秋津島之隈、暫改報身境花、董豐葦原國、閑觀、本地者佛果之滄海蕩々、倩思弘誓者化佗之尊客、巍々誠運歩於社壇者、即自穢土詣淨土初門也、勵志於神冥、從神道皈佛道之方便也、然者、大檀越町田之家督藤原朝臣忠知嫡男米鶴丸、君臣和合　武運長保　子孫繁榮　家門安全　領地快樂　願望冥滿　本地大聖加被者也矣、仍意趣如件、

元禄十四辛巳年五月十二日

役氏　權大僧都峯連院徳宗敬白

普請方役人　隈本諸左衛門

検者　四本伊右衛門
右同　岩下大右衛門
大工　前田傳左衛門
社人　武聞權右衛門
大宮司町田門　木工左衛門
役人　加治木六右衛門印
同　折田丹下印
中押　鮫島彌左衛門

○四六八　鮫島弥左衛門外二名連署書状

當社福島大神致廢壞候ニ付、寛永十一甲戌年二月、鎮守大明神御遷宮之時、鎮守大明神拝殿之内御移被成御座候、依之、重而別社作立候様、與町田彌兵衛殿・阿多才左衛門殿記置候處、元禄十三庚辰年十一月、町田家上押肝付氏依久兼、中押鮫島彌左衛門殿ヲ以、右宮造立之儀、町田之家督忠知江被仰談、元禄十四辛巳年正月、造立被仰附、同五月十二日、御遷宮有之、忠知名代町田十郎右衛門

役人折田丹下・社人山田讃岐江被仰附相勤候、古者拝殿計御座候處、御殿・廊下之儀、此節依忠知下知如斯候、附古棟札寫并新棟札、此節相改納置候、右棟札文字不分明有之時分者、大宮司并社人方早々可申出候、御祭者三月十三日、同日、家徒別多利讃岐坊江御供一膳可供也、右之趣、此節我々相改記置者也、

元禄十四年辛巳五月吉日

役人　加治木六右衛門印
同　折田丹下印
中押　鮫島彌左衛門

○四六九　阿多忠充・町田久興連署書状

福島大明神、寛永十一年甲戌二月吉日再興遷供之時、從昔之棟札古之御社ニ捨置候、右遷供之時、此一枚之新棟札計調置候、古之棟札新社不入置候、大宮司四本彦左右之　而候、慶安三年庚寅正月廿七日見窮也、

此棟札之外ニ棟札無之事、書札一枚相加候也、以上寛永十一年甲戌二月吉日遷宮之時、鎮守之宮之内ニ、福島大明神御直置候、本々者、東之方別拝殿作在之、其節拝殿作難成、先々鎮司之拝殿ニ御社移置候、後日御闔御申候而、如昔別被成拝殿候、其内御社御可被成候、町田殿役人衆、後日其催可有之事、可為肝要候、為後日候、以上、

町田彌兵衛尉久興在判
阿多才左衛門忠充在判

○元禄十四年十一月三日、本府稲荷社會有鏑流馬、舊例也、是日、久居預命為上馬焉、射手伊集院用之助久寛・阿多内膳基賢・伊勢彌九郎貞榮、乳人肥後長次郎盛包鏑流馬騎長曰上馬、東鑑謂揚馬亦云馬長・乳人先驅而不射者也、元禄十四年十一月廿六日、請蟄居私邑石谷、初久居與島津内匠久住綱貴公令弟・鎌田小藤次正甫光久公令弟之子、世稱大月様小藤次友善、三人皆屈強有不羈之資、遂尚任俠風貌非常、

白晝杖長劍、横行不避權貴、乗夜投撒網城塹、捕獲魚鼈、於是屏居于石谷館、蓋被譙(オミカリ)讓也、遂栖遲館中、終日正坐、移時不妄動矣、或慰其不聊曰、夫石谷私邑、子逍遙邑裡孰得間然乎、久居掉頭不可未嘗微行也、又一著新衣不至繿縷則無敢解之、又家臣時候伺於石谷、則久居喚前於膝下、左右睨視謂其者曰、汝今壯歳、生大平之世、百無所憂而鬢毛太多、一臨大事恐不中用也、久居居常不苟安愉、而其偏駁亦如斯、雖然、久居生平之行狀以仁怒推家臣邑民、臣民多厥德、到于今稱而不衰、其必有過人者矣、而久居遺文唯止一首之詩賦者可惜耳、

○元禄十五年壬午二月三日、請讓家統於嫡嗣久儔、

○寛延二年己巳十一月廿八日、久居卒于石谷、享年七十歳、法名圓成院殿本然了心大居士、葬石谷永福寺、置牌于同寺、

―女子

千世(チヨ)

○元禄十五年壬午六月九日、誕生于千石道之弟、母同兄久居、肝付典膳久兼女、

○嫁島津彦太夫久富、而産四男、長曰諸太郎久芳、次曰宇右衞門久丘、次即監物久甫、後於町田氏、其季彦太夫久品、既而伯仲早死、季子久品嗣、亦先母卒、於是、久甫迎其親母而奉養諸町田家、

○安永八年乙亥正月廿一日、以疾終于久甫之宅、享年七十八歳、法名常心院殿圓明月貞大姉、葬南林寺島津氏久達之墓域、

（表紙）

廿四代
久儔
元禄十二至
享保十六

町田氏正統系譜　卅三

藤原姓町田氏正統系譜巻第卅三久儔

●久儔（ヒサトモ）

初忠通（タヤミチ）　米鶴丸　郷九郎

○元禄十二年乙卯十一月九日、誕生于千石道之宅、

母桂外記長厚女

○室　太守綱貴公第四之女、

○元禄十五年壬午二月三日、受父之譲而襲統、御用人高橋七郎右衛門種周降　命、久儔生四年矣、故使人代吾聽命也、

○寶永元年甲申九月十九日、　前中將綱貴公薨于江戸、春秋五十五歳、太玄院殿、是歳十月廿九日、太守吉貴公即位于江戸、

○寶永三年丙戌二月、　太守吉貴公命初定公族以下贄品為五等、一日、太刀、三種二荷、二日、太刀・二種一荷、三日、太刀、四日、弓、五日、中紙、以上五品自曩時所以為贄、至是就其家格定之差降也、三種二荷為重贄、吾家如襲職謝恩、定以為永式者也（三種謂乾鯛・鰯・昆布也、二荷謂酒樽四口也）

○寶永四年丁亥十一月十五日、造　朝元服、　太守吉貴公手自加冠、御家老島津大藏久明理髪、更稱郷九郎名忠通、忠通獻天井折六合・樽三荷・太刀一腰・馬一疋拝恩、御用人相良權太夫能冬為奏者、賜御脇差（劍匠奥和泉守忠重、長一尺一寸九分、小刀鍛工薩州住藤原正商）、又賜坐及御盃・折紙（折敷略、亦云折櫃物、俗稱之天井折也、盛以星野山海之菓肴、延喜式野物海物如横山積給、是也、公親賜土器及乾肴、謂之御引渡、御家老進付御脇指・御折紙、折紙亦謂御判物、凡賜元服者某名之式有二、曰花押、曰印記、以花押為榮、故謂御判物、後謂折紙、寶永六年十二月、所定後唯花押、不書諱也、）

○四七〇　島津吉貴加冠状

加冠

町田米鶴

宜爲　郷九郎忠通

寶永四亥
十一月十五日

吉貴（花押）

○寶永四年十一月廿八日、獻太刀一腰・馬一疋代銀・三種二荷、拜謝承襲之恩、奏者平田清右衞門純音、

○正德二年壬辰十月朔日、　公命定小番以上爵為四等、一日、壹所持、二日、壹所持格舊曰一所衆、雖無邑地、朝拜就其列者也、三日、寄合舊曰組頭列、四日、寄合并舊曰直觸格、一所持連名收載于左、

○四七一　家筋連名帳抄

一所持・一所持格

十五代貴久公三男二男格　庶號赤山氏
島津左衞門督歳久　家
二十代綱貴公二男　村森氏
島津周防久儔　家
五代貞久公他腹長男
川上大夫判官頼久　家
十九代光久公十男準二男　三崎氏
島津大藏久明　家『格』
忠良公三男　山林氏
島津左兵衞尉尚久　家
九代久豊公三男　倉山氏
島津越後守季久　家
十五代貴久公四男三男家格　九郎賀野氏
島津中務大輔家久　家

以上三家同格

四代忠宗公三男　後稱島津
佐多三郎左衞門尉忠光　家
十七代義弘公五男準三男家　谷川氏
島津久四郎忠清　家
家久公四男　三木原氏
島津市正忠廣　家『格』

以上両家同格

四代忠宗公四男
新納近江守時久　家
忠宗公五男
樺山安藝守資久　家
忠宗公六男　後稱島津
北郷尾張守資忠　家
十代忠國公四男
桂遠江守勝久　家
光久公十三男準四男　平屋氏
島津頼母久記　家『格』
光久公十七男準五男　柳氏
島津求馬久房　家『格』
忠國公七男　初稱島津
喜入若狭守忠弘　家
二代忠時公七男常陸介忠經三男
町田五郎太郎忠光　初稱石谷　家

『舊本此所二代忠時公七男常陸介、忠經四男侍從房俊忠嫡子伊集院圖書助久兼之家入之、然享保廿年被貶寄合、今在寄合家班第十七番、故今除之、』

久豊公三男越後守季久七代孫豊前守久賀三男　黒岡氏
島津帯刀久元　家『格』
忠良公三男左衛門尉尚久四代孫下野守久元三男　基太村氏
島津中務久義　家『格』

以上両家同格

忠宗公六男尾張守資忠十代孫左衛門時久三男
北郷加賀三久　家
忠良公二男右馬頭忠將五代孫又四郎久敏二男、實大和守久章嫡子　細瀧氏
島津又助忠清　家
久豊公二男薩摩守用久六代孫薩摩守義虎四男　岩越氏
島津越前守忠榮　家『格』
薩摩守用久二代薩摩守國久三男
大野駿河守忠綱　家
薩摩守國久四男、始稱島津
吉利伊勢守秀久　家
下野守久元二男中務久義二男　川久保氏
島津織部久達　家『格』
伊集院圖書助久兼四代孫長門守忠國九男、今給黎長門守久俊二男
伊集院右衛門佑久昌　家『格』
平清盛之曽孫也、北條時政為養子
種子島肥後守信基　家
源頼國六男之裔後冒島津氏　土岐氏
敷根賢太郎頼房　家
肝付河内守兼元二男
頴娃美作守兼政　家
平重盛之孫高清之子也、云後稱小松
禰寝次郎清重　家
澁谷太郎光重五男
入來院五郎禪師定心　家

六條為義三男、村上三郎左衛門四代祐範、後稱比志島
志田三郎先生義憲　家
三河守兼忠、忠三男也、兼忠死後攻滅兄國兼、兼光不從據守大崎城、寄心守護
肝付越前守兼光　家
関白藤原忠實之裔也
菱刈進士判官重妙　家
上世御洗祝以神為氏、十二代覺兼之裔、初稱上井
諏訪五郎敦實　家
三郎先生源義憲裔上總法橋重賢三男
河田右衛門尉盛佐　家
源義家三男式部大輔義國之裔、初稱阿多
畠山尾張守義深　家『格』
首藤右馬權頭藤原助道二男、号鎌田
鎌田權頭通清　家『格』
平貞盛之裔十郎貞良之二男也
伊勢三郎貞興　家『格』

以上謂之家筋連名、蓋因寛永中歳首朝坐之班例、而所定家格等衰也、今竊細査其天倫位置、未得節適者或有之、乃如町田氏其分派遠出自二世　忠時公第七子常陸介忠經、然而忠經之兄三人並無後嗣、然則視諸後世以第十子而準次男、則如忠經亦當以準第四男家耳、宜乎、町田久興嘗為本宗獻太刀于朝、謁者序先後將次於北郷氏、久興不肯曰、故事町田家獻品未曽有於北郷氏之後而為矣、請辭、今

也一所持以上　忠時公之属、唯有町田氏矣、久興之言益可以稱哉、

○正徳三年癸巳三月廿五日、忠通應召登城、御家老肝付主殿兼柄傳命曰、定公族通字凡廿族、合族分者四十二族、町田本宗及分族久政家、唯長子世用久字、次子以下取先祖諱字為通字、因町田分族城下士以下至於衆中陪臣、以俊為通字、不得用久字、乃賜折紙、令吾付渡諸支族告知其旨、町田名字之外、阿多・飯牟禮・梅本之族皆然焉、

○四七二　町田家名字名乗申渡書

町田郷九郎

俊

正徳三癸巳
三月廿五日　肝付主殿

（本文書は「旧記雑録追録三」一九三の二号文書中ニアリ）

○正徳三年四月、町田氏分族未得出處之確詳者凡七八戸、各疏其家狀呈上肝付兼柄、請之官裁焉、按享保四年己亥、阿多・飯牟禮等出自不詳者七八戸、呈家狀于史館之案文、載在支流譜、宜與此合考也、

○四七三　家老座申渡書

正徳三巳年、被仰渡候ヶ条之内抜書、

一足輕并諸座付、又者諸士之家來、又者寺門前・町・浦・在郷之内、　御家御支族之端と申傳候由ニ而、御直別等之家号、又者　御家之字名乗來候者有之由候、向後左ニ相記候家号、又者　御家之字名乗申間敷候、川上・佐多・新納・樺山・北郷・桂・喜入・町田・伊集院・龜山・山田・碇山・大島・義岡・迫水・阿蘇谷・相馬・石坂、

一御直別又者伊集院・町田家抔之家中ニ、慥に同名筋之者家來ニ罷成、今迄随身致來主人之名字名乗來候者、其家中ニ而其家筋之嫡家之嫡子迄者、主人之家号御免被遊候、勿論其家を罷出、他家ニ奉公致候節者、右之家号名乗申間敷、

一諸士・家來之内、無紛其主人家ニ御付人筋之者、又者其家ニ罷在、前々御奉公之筋を以、爲抽働無

紛者ハ、今迄名乗來候御直別、又者伊集院・町田之家号ニ而茂、其者嫡流之嫡子迄者御免被遊候、勿論他家ニ奉公致候節者、是又右之家号名乗申間鋪候、

（本文書ハ「旧記雑録追録三」二四三号文書ノ中ニアリ）

○四七四　相良長規申渡書

町田

『餘略』

右家号之者、當時家中江罷在候者、又者與ニ不被入置者、依其家御直別之家号相避、別家号ニ可相改事候間、右躰之者、名字可改旨申出候ハヽ、於嫡家遂吟味、可改名字可申出候、此段右家〻之嫡家江可申渡候、以上、

『正徳三年』
巳六月十六日　　相良權太夫（長規）

○正徳三年七月、　吉貴公使御家老連署宣命曰、凡公族唯嫡子世稱島津氏、次子以下則否、乃如町田氏、唯城下士及衆中諸郷士也世為町田氏、至於陪臣則本族唯為町田氏、至於分族則為梅本氏、不得稱町田氏用蛇眼紋、如其梅本家號則從所咨禀也、蓋取諸梅吉・梅久之諱字云、今垂水家臣梅本重富家臣梅元、本元之字有別、

○正徳四年甲午正月十八日、吾家自元祖稱姓藤原、至是、更命曰、子孫宣世為藤原姓、時島津兵庫久季以下至碇山某、公族廿七人及支庶十三人合四十人、並為藤原氏同于吾、此餘島津久儔・島津久明・島津久純・島津久房四人為源氏、以係　光久公復源氏之後也、

○正徳四年十一月三日、久儔預命稻荷社會流鏑馬（マツリ）、為上馬焉、射手士持助右衛門致慶、

○享保二年丁酉十月廿三日、久儔尚　前太守綱貴公女妻姫（セイ）、今日交禮成焉、妻姫是年歳十有七、御家老佐多豐前久達主婚儀、從釐降（オコシイリ）來、陪燕爾席（シウヂン）、賀合巹（コンレイ）慶、妻姫之生母二階堂氏、亦今日出宮而與妻姫俱就久儔之第、生母二階堂氏即綱貴公側室、二階堂源右衛門行格（ガク）入道宗見之女也、公殂後號永照院、又島津主水久輔養子仁十郎久福、公之季子、妻姫同胞之令弟、是故妻姫掩粧（ヨソホ）、後、永照院移就久福之第、事詳于久甫譜

○享保三年戊戌四月十八日、為御番頭兼奏者番、御家老島津内膳久兵降命、

○享保三年五月朔日、造朝見　吉貴公於御書院、獻太刀・馬代銀、又獻同品于　世子繼豐君、皆拜御番頭也、頴娃長左衞門久周為奏者、

○享保三年六月朔日、領諸縣郡高崎地頭職、御家老島津將監久當降命、

○同月十五日、見於　吉貴公、獻太刀・馬代銀、又獻同品於　繼豐君、拜地頭職也、高橋七郎右衞門種周為奏者、

○享保四年己亥夏、　吉貴公降内旨於島津彦太夫久富（久富御用人、時為久儔之姑夫）曰、余如聞、久儔屬（コノゴロ）者不護細（ミモチ）行矣、且負債日月増長、殆垂于家弊産破、家臣等亦務姑息徇私情、職由久儔之失檢局（ヒキシメ）而已、宜懇囑其人補察家政、勵精節儉、使久儔自改尚修文武業、以立身進官不墜爾宗矣、是余之所望也、久富謹拜恩旨則謀於島津登久亮・宮之原甚太夫重行、託御家老島津木工久豪、以指揮久儔之家政、乃久富・久亮反命於吉貴公、

○四七五　島津久富・島津久亮連署覚

覺

一去ル亥之夏ニ而候半、　總州様被　仰出候者、町田郷九郎事別而勝手向差迫、大分之借銀罷成候由被　聞召及候、未相應之持高之由候處、漸々可致衰微儀案中候、郷九郎事、兼而氣儘生立、家中之締大方申付候故、家來共ニ至、我儘而已有之由候、御兄弟之事候者、就御下知被遊様も有之、差引者迄も可被仰付事候得共、　御妹聟之事候得者、訳も格別候間、其通ニハ難被　仰付候、先キ々無行跡ニ有之身躰無高罷成候迚も、右通爲被　聞召及事候故、此段被　仰聞候間、家老抔之内ニ茂、家中差引頼身躰相續、往々相應之奉公も相勤候様有之度、被　思召上候間、大御目付之内、親類有之候者可申聞候、若親類無之候者、誰ニ而も肝煎、一涯致世話可遣之旨、　御意奉承知候ニ付、其節

彦太夫月番ニ而御請申上候者、御懇之　御意、郷九郎奉承知候者、難有可奉存候、同役之内、身近キ親類と申者も無御座候得共、彦太夫・登事ハ由緒も御座候、藤馬・右京事者親戚ニ而も無御座候間、私共両人より肝煎可申旨申上置候、

一宮之原甚太夫事、其節御家中御用承居候由ニ付、拙者共より段ミ之　御意申聞、御家老中之内御頼被成度方思召寄も御座候者、可被仰聞候、左候ハヽ、其方江拙者共より頼進可申候、思召寄も無之候者、拙者共より相考、御頼可申旨申達置候處、七八日茂間有之、甚太夫より被申聞候者、備前殿事訳も有之候間、杢殿江御頼被成度之旨承候故、即日杢殿江御頼申置候、左候而、右之首尾　總州様達　貴聞候、右者、先比　總州様より、郷九郎殿事ニ付　御意之趣有之候故、拙者共致承知候段、書付進度旨被仰聞如斯候、以上

寅三月十三日　　島津（久亮）登

島津彦太夫（久富）

○享保六年辛丑正月、久儔與盟書家臣益満金兵衛、而闕其首張紙、未詳何所為、相傳益満善射、然則久儔受業、因與誓詞耳、

○四七六　町田久儔盟書

『益満伊右衛門藏』

一他ニ心安ク申合間鋪候事、

一御外之身ニ付、何様之悪敷事とも他ニ一言申間鋪候事、

右ケ條之趣、毛頭相違有之間鋪候、ケ様ニ申合之儀候ハヽ不及申、身上之趣互ニ無隔心可申合候、万一於相背者、　天はつ明はつ　可罷蒙候、依如斯、

一八幡大ほさつ

一諏訪大明神

一祇園大明神

一稲荷大明神

一春日大明神

町田郷九郎久儔

享保六年辛丑正月日

益滿金兵衛殿

○享保六年六月九日、　太守繼豐公即位、

○享保七年壬寅正月、久儔奉命代　公行謁野間權現（在河邊郡加世田野間村絶頂、古之所謂笠狹之崎地、麑府、每坤方相距十六里許、有東西両祠、並祀諸冉及皇孫氏也）歲正月廿日、　太守公親祭野間權現、遣官代之為例焉、久儔嘗以御番頭奉代使于野間、祭事禮畢、歸路枉道闌入伊集院春山野牧、召募獵（ヒコ）手為田獵事、漸以聞于　老大侯吉貴公（時奉稱入道上總介、因稱總州様）、遂案責久儔、使逼塞於麑島護國山安養院（逼塞時稱寺入、當今之逼塞也、故書以今言）或謂、久儔結昏於妻姬、而後受嚴婦之節制、久儔不忍甘為之下、亦激切之勇難行於房闥、遂致夫妻琴瑟不和、妻姬無子、抑翁主之操家秉人生之不幸哉、　吉貴公使大監察嚴諭久儔、其為上不見喜、可知也、

○四七七　島津久富・島津久亮連署書状

一御自分様御身躰之儀付、從

總州様、大御目付衆中江先年段々被　仰出候趣有之、拙者共より宮之原甚太夫殿江申達置候處、其節委曲不被達聞召由、依之　御意之趣書付進度旨、内山爲右衞門・藤井才助より此節被申聞候付、別紙之通、書付進申候得者、御披見被成度候、追付出寺可被仰渡事候得者、御勘氣内猶亦諸事可入御念事專一御座候、以上、

島津（久亮）登

三月十四日

島津（久富）彦太夫

町田鄕九郎様

覺

享保七年寅三月、別紙被仰渡御書付奉承知候、

○享保九年甲辰正月、預命為御年男（御年男見上久幸譜）、因賜十文字御紋上下一副・御熨斗目袷衣一件、乃自元旦

至三日、歳首朝儀疏記于左、

○四七八　歳首朝儀次第

元日

一御手掛、

一御茶上ル、

但大服之御茶立、御同朋相勤候也、

右御出前、於御休息所上ル、御配膳御内證御年男支度熨斗目・素袍・烏帽子着用、御配膳仕候事、

但五社御參御供仕候ニ付、素袍・烏帽子着用儘御配膳相勤、直御供仕候也、

一五社御參付御供、表御年男弐人、御内證御年男二人、支度素袍・烏帽子着用、御供仕候事、

但一表御年男弐人繰廻、御太刀持御左脇御供仕候事、

一於神前、表御年男弐人共御配膳仕候ニ付、宮床前以御太刀御内證御年男江相渡、御先ニ宮床江參、御配膳仕候事、

一五社御參之次第、諏訪・祇園・稲荷・春日・若宮江御參詣之事、

但一諏訪・稲荷於両社、御幣別當より上ル、御三献・御盛塩・御手水上ル

但外宮江も御手水備置候、然共差上ルニ不及候、

一祇園・春日・若宮於三社、御幣別當より上ル、御盛塩上ル、御配膳表御年男也、

一五社御參相濟、護摩所不動江御詣之事、

但一護摩所近方より、御太刀御内證御年男江相渡、護摩所江御先參候也、

一不動明王江御參詣之節、縁頰ニ而被遊御手水ニ付、表御年男より御手水差上也、

一堂内御拝疊江被遊御着座候節、表御年男御盛塩上ル也、

一宮殿江被遊御着座、

一御手掛、

一御前菓子上ル、

一御茶上ル、
一御雑煮上ル、
一御茶菓子上ル、
一御茶上ル、
但 御配膳表御年男、御相伴給仕表御小姓、支度熨斗目・半上下也、
一御相伴御供之御家老一人、大乗院被相勤候而、直ニ御安置之稲荷江御参詣、御盛塩上ル也、
一御歸館以後、御城代御家老持参太刀有之候ニ付、表御年男奏者并御配膳相勤候故、支度替熨斗目・長上下着用之事、
但 御年男御規式之節ハ、幾度茂支度熨斗目・長上下、何そ勤無之節者、熨斗目・半上下着用也終、
一御休息所御看經所江御参詣之事、
御看經所ニ而御盛塩差上候、御膝着青銅百疋御進納、御納戸より出也、
於御休息所御規式之次第

一御手掛、
一御歯堅上ル、
一御茶上ル、
一式御三献上ル、
一長柄之御銚子提子上ル、
一山之御食上ル、
一柄差之塗提子ニ而御湯上ル、
一御力食上ル、
一御大節句上ル、
一柄差之塗提子ニ而御湯上ル、
右、御配膳御内證御年男、支度熨斗目・長上下也、
一替御膳上、
但 當番之御次御小姓御配膳相勤也、
御書院
一御出座之事、
一御茶上ル、
但 一表御年男より上ル也、
一御茶之儀者、御舊例ニ上ル事候間、間後ニ無

之様其覺悟可仕候、左候而、御前江差上、御末席迄引すさるに不及、一間程茂引下り居、御茶碗被召置候節可相下也、

一御城代御家老并　總州様御方御家老持參太刀之事、

但　表御年男致奏者、御太刀一腰ッ、相拾也、

一御書院三之間末より五枚目疊頭江持參太刀置、三之間御勝手方江一列着座也、

一御城代御家老持參太刀ニ而着座有之、御包丁人頭壱人、椀飯御飾御膳立之元江參相飾置候、式御三献表御年男江相渡、　御前江三迄上ル、土器數之御盃、塗三方ニ請相立、御城代御家老江御三献、本膳計給仕表御小姓、左候而、太平樂大龜之御酒、長柄之御銚子提子移、表御年男御杓ニ而、　御前江差上、御書院弐之間末敷居より四枚目疊頭ニ而、銘ゝ御盃頂戴之事、

一御身ニ付而之御祝御三献之節故、初献迄を御加有之候、御三献長柄之御銚子、又ハ簡之御銚子御加有之候節者、　御前より御盃可被遊御出候間、氣ヲ付罷在、御加可差上候、某外ハ初献迄御加有之候也、

一表御年男・表御小姓支度熨斗目・長上下也、

一御城代御家老持參太刀之節、大御目付壱人・御用人壱人・御目附壱人、水仙之間邊ニ相詰候事終、

一御休息所御庭ニ而御馬乗初有之、於麒麟之間御祝之事、

御供ニ而相詰候面ゝ、

一御側方御家老壱人

一御厩方支配頭壱人

一御側御用人壱人

一御南戸奉行壱人

一御厩方取次壱人

一御近習役之内一両人

一御厩別當惣様

一御次御小姓壱人

一御馬乗二人

一馬醫惣様

於麒麟之間御規式之次第

一式御三献上ル、

一土器之御盃相附、

一御身ニ付而之御祝ニ而候故、初献迄御加有之候、

一長柄之御銚子提子上ル、

但 御銚子提子相下ケ、御三献も相下ル、

一御雑煮上ル、

一御さしミ上ル、

一塗御盃相立、塗三方ニ請、

一簡之御銚子上ル、

一ひれ之御吸物上ル、

但 土器ニ盛、

一簡之御銚子上ル、

但 ぬり御盃、足付八寸臺ニ請、御銚子ニ相添差上ル、御配膳并御杓迄御内證御年男、支度熨斗目・長上下、

御規式之次第

一式御三献上ル、

但 土器之御盃相付、御身ニ付而之御祝故、初献迄御加候也、

一長柄之御銚子提子上ル、

但 御銚子提子相下ケ、御三献迄相下ル也、

一御雑煮上ル、

但 御三献ハ格別、其外之品〻引替上ル、

一御差味上ル、

一御塗盃相立、

一簡之御銚子上ル、

一ひれ之御吸物上ル、

一簡之御銚子上ル、

但 一塗御盃、足付臺ニ受、御銚子相添差上候、御配膳御杓迄御内證御年男、支度熨斗目、長上下也、

一御相伴江者御引盃、膳之脇江両度共ニかけ候而出候也、

一御相伴人被仰付候節ハ、式御三献者不及出、雑煮・

差味・吸物・簡之銚子迄被下候事、
　但　給仕御側御小姓相勤候也、
一御規式相濟、於次之間、足付八寸・塗盃ニ而、御別當不殘御通被下候、左候而、次之間敷居外ニ而、平八寸・塗盃ニ而、御馬乗・馬醫江被下候事、
　但　御馬乗初　御名代被仰付、御規式御相伴被仰付候節ハ格別、無左節ハ、　御名代乗相勤候人より御通被下、初御別當并御馬乗・馬醫江被下候也、
一御通之杓、詰合之御側御小姓、押肴、御近習役・御納戸奉行之内より相勤候也、

二日

一福昌寺江御寺參ニ付、表御年男弐人御供仕候事、
　但　支度熨斗目・素袍・烏帽子着用ニ而、御太刀持御供仕候也、
一福昌寺客殿於八尺之間、四首頭之御規式御座候事、
　於憩月之間御規式之次第
一御盛塩上ル、
一御前菓子上ル、
一御茶上ル、
一御雑煮上ル、
一酢のり上ル、
一御吸物上ル、
一御茶上ル、
　御配膳表御年男、支度素袍・烏帽子之儘、御相伴給仕表御小姓、支度熨斗目・長上下也、
一住持より二汁五菜之御料理進上之事、
　御配膳御側御小姓、御相伴給仕表御小姓、支度熨斗目・半上下、
一御年男并御同朋江於宝之間三番點心出候事、
　御歸館以後
一元日同前之御規式上り候事終、

三日

一御出座前、元日同前之御規式上候事、
　御書院
一御出座之事、

一御茶上ル、
但 表御年男より上ル也、
一若御年寄・大御目附并 總州様御方若御年寄持參太刀之事、
但 一表御年男致奏者、御太刀一腰ッヽ相拾候也、
一於御對面所着座仕候家筋之若御年寄・大御目附、御書院三之間末より五帖目之疊頭江持參太刀、直若御年寄・大御目附一列ッヽ着座也、
一若御年寄・大御目附一列ッヽ着座有之、御三献三迄、
御前江上り、塗三方ニ而、土器之御盃相立、表御年男御配膳、着座之面〻江者、御三献本膳計、給仕表御小姓相勤候也、
一御銚子提子上リ、御盃御書院二之間之内末より四枚目之疊頭ニ而、頂戴有之候也、
一右、御盃頂戴相濟、御座配之人數、御三献計相下ケ、
御前御三献ハ直ニ上置、着座無之、若御年寄・大御目附御盃頂戴相濟、御前御三献相下候也、
一着座無之家筋之若御年寄・大御目附、御書院三之間末より四帖目疊頭ニ而、持參太刀着座無之、御太刀一腰ッヽ相拾候也、
一土器之御盃、御書院三之間上より壹枚目疊末ニ而、頂戴有之候也、
一長柄之御銚子提子御杓、表御年男相勤候也、
御對面所
一御出座之事、
但 御出座之節、御内證御年男御案内相勤候也、
一御茶上ル、
但 表御年男より上ル也、
一一所衆持參太刀之事、
但 表御年男致奏者、支度熨斗目・長上下也、
一御座配一番ニ罷出候一組之人數、表御年男致奏者、御對面所中段之間、末大敷居涯敷舞臺御客居之方へつくはい居、一組持參太刀相濟

候而、御太刀拾御勝手口之様引取候、右之次第、表御年男二人ニ而、一組切ニ繰廻相勤候也、

一御前江式御三献三迄上ル、土器數之御盃相立、御配膳表御年男、御座配之面ゝ江三肴之御三献本膳計、給仕表御小姓也、

一長柄之御銚子、　御前江差上候、御土器御杓江御渡被遊候時相請取、長柄之御銚子ニ相載、上段之間末壹枚目疊中程ニ而、着座之面ゝ江御盃頂戴被仕候也、

一御盃頂戴相濟、御座配人數御三献計、相下り候也、

一御前御三献之儀者、諸地頭御流被下候迄、直上置候也、

一右御座配相終、川上縫殿・新納左京・伊集院十藏・山田新助、御對面所中段之間末より四枚目之疊末ニ而、持參太刀着座無之、御盃中段之間上より一枚目疊頭ニ而頂戴有之候事、

但表御年男奏者ニ而、一列ッヽ御太刀拾御杓迄相勤候也、

一島津又吉獨禮之事、

一右相濟諸地頭并志岐藤右衞門・田尻八郎右衞門・中西文右衞門、御對面所中段之間末より三枚目之疊末ニ而、弐人ッヽ持參太刀仕候事、

但一表御年男奏者ニ而、御太刀四腰ッヽ相拾候也、

一諸地頭并志岐藤右衞門・田尻八郎右衞門・中西文右衞門迄、二人ッヽ二行ニ持參太刀有之候間、御年男茂二人罷出一行ッヽ相拾候也、

一總州様御方地頭持之面ゝハ、諸地頭其御役席ゝニ而、持參太刀、

一諸地頭御流被下候節ハ、土器數之御盃二通、　御前より二枚目之疊中双方江相立、長柄之両御銚子之内、一銚子ハ上段之内敷居涯江扣居候、今一銚子御前江差上ル、御三献江置付之土器御杯ニ而被召上、右御盃御杓江御渡被遊候時、相扣居候御杓茂、御前江御銚子持寄、御盃之御酒を両御銚子ニ

入、右御盃者御三献江如本居付置、長柄之御銚子計、土器之數之御杯者、本江両御銚子共ニ持寄、土器之御盃長柄之御銚子ニ相載持下り、中段之間上より弐枚目疊頭ニ而、諸地頭貳人ツヽ罷出、御流頂戴仕候事

但 両御銚子ニ而、御流被下候付、長柄之御杓表御年男弐人、御加之提御内證御年男二人ニ而相勤候也、

一右相濟、御前御三献相下り候事終、

志布志罷在候 山田次郎右衛門

一右、御目見之事、

但 披露奏者番也、

一出仕之歴〻并二男三男、諸役人組之士迄、菊之間より七八人ツヽ罷出、御目見仕候事、

一總州様御方小役人茂罷出、御目見仕候事、

但 御座配、御規式相濟、諸地頭持參太刀相初候而より、御禮相初候也、

上下西田町 年寄・年行司

一右、御目見之事、

但 披露奏者番也、

一御對面所御座配、惣様相濟候以後、於御書院、

一内之御座配人數持參太刀之事、

但 表御年男致奏者、御太刀五腰ツヽ相拾候也、

一御書院三之間上より弐枚目疊頭江持參太刀、直客居・主居江着座有之候也、

一御三献 御前江三迄上ル、御土器盃、塗三方ニ請相立、御配膳并御杓表御年男、着座之面〻江者、御三献本膳計、表御小姓相勤候也、

一御銚子提子上ル、御書院二之間末より四枚目疊頭ニ而、御盃頂戴也、

一家筋ニ付着座無之、大島休左衛門・義岡左京御書院三之間上より三枚目疊末ニ而、持參太刀有之候ニ付、一腰ツヽ相拾候、御盃三之間上より二枚目之疊頭ニ而頂戴也、

於御座之間

一御側廻之面〻江両御銚子ニ而、御流被下候事、

一總州様御方地頭持外之御側廻者、三日より五日まて之内、於御座之間、
太守様御方御目見被仰付候面々、同席ニ而御目見
両三度ニ替合罷出事、
一但土器數之御盃二通御座之間、客居江壹通、御主居江一通相立置候、左候而、右外ニ一通、御土器を差上、御前江被召上候而、御客居之方一間程相下ヶ置、被召上候御土器之御酒を両御銚子ニ入、御用之間上より四枚目末ニ而、御流頂戴仕候也、
一長柄之御杓、表御年男二人、御加御内證御年男弐人ニ而相勤候也、
一御内證御年男十五日御流被下候故、此場ニ而不被下候也終、
一三日之晩於御對面所、御謡初之事、御謡初御規式之次第、
一御出座之事、
一御茶上ル、

但表御年男より上ル也、
一式御三献上ル、
但御相伴ニ者本膳計也、
一土器之御盃、塗三方ニ請相立、
一長柄之御銚子提子上ル、
但御銚子提子相下御三献迄、相下ヶ候也、
一御雑煮上ル、
一御差味上ル、
但御雑煮ニ引替上ル也、
一塗御盃、三方ニ請相立、
一簡之御銚子上ル、
一ひれ之御吸物上ル、
一島臺上ル、
一簡之御銚子上ル、
一御相伴弐人、
一但御配膳并御杓表御年男相勤候、御相伴給仕表御小姓相勤候、支度熨斗目・長上下也、
一御相伴兵庫殿・周防殿江被仰付候節者、初篇

ニ而兵庫殿江御盃被給、周防殿江者御流被下候、二篇目ニ者周防殿江御盃被給、兵庫殿江者御流被下候、右通同格之人御相伴之節者、繰廻ニ御盃被下候也、

一兵庫殿・周防殿両人之内、壹人御城代御相伴之節者、三篇共ニ上座之人江御盃被給、御城代江者御流被下候也、

御相伴玄蕃殿江茂被仰付候節、御盃御流被下候次第、左之通相替候、

一御相伴兵庫殿・周防殿・玄蕃殿江被仰付候節ハ、初篇ハ兵庫殿江御盃被給、周防殿・玄蕃殿江者御流被下候、二篇目ニ者周防殿江御盃被給、兵庫殿・玄蕃殿江御流被下候、三篇目ニ者玄蕃殿江御盃被給、兵庫殿・周防殿江者御流被下候、右通同格之人御相伴之節ハ、操廻ニ御盃被下候、

一兵庫殿・周防殿・玄蕃殿三人之内、両人差支、一人御城代御相伴之節者、三篇目共ニ上座之人江御盃被給、御城代ニハ御流被下候也、

一御城代御家老御相伴之節ハ、三篇共ニ御城代江御盃被下、御家老江者御流被下候也、

一御家老両人御相伴之節者、替之御盃頂戴仕候也、

一島臺之御土器、　御前江被召上、上段之間末壹枚目疊頭江島臺相直、御相伴壹人江御盃御給、今壹人之御相伴者御流御給也、

一島臺上ル、御土器御取上り被遊候節、月番御家老より、謡初可申旨、太夫江申聞せ、四海波謡候也、

但　月番御家老列座之上、前ニ進出罷在、謡初之時節見合、謡可申旨申聞せ候也、

一島臺御土器、被　召上候節、御肴上座之御相伴より被差上候、御相伴御盃被給候節、　御前より両人共御肴被下候也、

一右島臺御相伴被給、御盃上段之間末壹枚目疊頭ニ而御流之御盃、御城代御家老・若御年寄・

大御目附并月番獨禮之衆迄被給、御押肴御相伴之内より被押候、右相濟、島臺中段之間上より壹枚目疊末ニ相下シ置、寺社奉行・御勘定奉行・御番頭江被下候、中段之間上より弐枚目疊之頭江相下シ置、御側御用人・御用人・町奉行・御近習役・江戸御留主居・京都御留主居・大坂御留主居・御納戸奉行中西文右衛門迄、御流頂戴仕、文右衛門被下納御盃臺迄持下り候、御肴御相伴人之内より被押候也、

一島臺　御前江相立候節、御能方人數敷舞臺江罷出候事、

但　御盃被　召上候時、謡初候也終、

一御囃子相濟、御能方人數敷舞臺笛柱通之疊より少相下り、塗八寸ニ盃受、白銚子之両銚子ニ而、御通被下候事、

一御對面所御規式相濟、孝行之間江被遊御着座、松之間内末之敷居より二枚目疊末ニ而、表御小姓并御書院役人・御同朋・御包丁人頭江御通被下候事、

一御謡初之節者、島臺之御流、御納戸奉行江者頂戴仕候付、御規式方肝煎・御近習役より差寄相勤候事、

○享保九年正月十一日、為四番與頭、御番頭兼奏者番如故、御家老島津木工久豪降命、

○享保九年正月廿五日、見於　太守繼豐公、獻太刀・馬代銀、拝與頭也、肝付典膳兼加為奏者、

○享保九年閏四月朔日、轉領菱刈郡本城地頭職、御家老島津大藏久明宣旨、

○享保九年、久儔命定救火使（ヂヤウヒケシ）、就中、獨掌本府興國寺、今玆閏四月廿一日、欲行拝石谷之先塋、仍取告（イトマ）、以中間六日為期、

○四七九　町田久儔口上覚

口上覺

私先祖共墓領分石谷江御座候、当年いまた墓參不仕候付、此節墓參仕度御座候、且又無據用事茂御

座候ニ付、往來日數六日程之御暇被下度奉願候、
與方并火消方之儀、同役中申談、支無御座候、且
又興國寺火消方、私壱人被仰付置候ニ付、願之通
御暇於被下者、島津仁十郎殿江内々頼置候間、此
旨宜御申奉頼候、以上、

閏四月廿一日　　町田郷九郎

或謂、拜墓取告豈足以書哉、答曰、前此忠尚未年
未見告拜墓事者也、夫君子重祭、祭莫大於尊祖矣、
乃祖宗之魂殿（タマヤ）・冢藏（ハカ）在于石谷、則令孫追遠展省桑
梓者、宜無間歳、而到于久儔始發斯行、諺有之曰、
觀荒墓以憶其家之落魄、本宗忠尚晩節以降遇時不
祥、至是、且啓泰運之基焉、此乃所以書于玆也、
庶幾導君子無疆孝奉其先之志、云爾、

○享保九年閏四月廿八日、見於　公獻太刀・馬代銀
拜轉領地頭職也、伊集院十藏久逵為奏者、

○享保十二年丁未正月元旦、久儔吉書以述祝詞（是後十三年至十六年有吉書、同文不復載）

○四八〇　町田久儔吉書

吉書

天福皆來地德圓滿
君か代の久しかるへき為しには
嵩へそ植しすみよしのまつ

享保十二年丁未正月吉日　　久儔（花押）

歳德神

○享保十三年戊申三月、　公命賜久儔銀十貫目、以
賑萋姫之費用也、御家老島津將監久當傳旨、

○武人蓄軍器固其分也、曩慶長六年秋八月、　義久
公　義弘公　家久公定軍國法曰、軍器時加修造、
田禄百石藏甲一領、廿五石以上自齎軍糧、此餘十
餘條、犯此法者没邑、　三公連署布告藩中、其令
嚴可知也、久儔為人志介曰、大丈夫生不為將飽煖
以斃于席上豈其志哉、恒講武厲兵、乃新製大將具
足一領・同著替一領・騎馬鎧十領・歩卒鎧廿領・

旌旗四竿・馬認(ムマジルシ)一竿・纏旗(マトヒ)二本・長柄鎗三十本・鋲鏃二千餘・鋲砲十五挺・鋲彈丸(キリダマ)二壺、其餘器械・馬匹稱是、其將甲一領所費價銀十貫目餘注文尚今存、夫久居時邁延燒財力俱絀、而久儔在職僅十有餘年間、新造軍器如是盛矣、非用心于武備之至、則豈能致之哉、其又賜苗緒者可謂大矣、

○享保十六年辛亥五月廿八日、久儔卒、享年三十三歲、法名寂明院殿智海玄惠大居士、葬石谷永福寺、置牌于同寺、

（表紙）

廿五代
久甫一第
享保九至
寛保三

町田氏正統系譜　卅四

藤原姓町田氏正統系譜巻第卅四久甫一

●久甫（ヒサナミ）

初久張（ハル）　久連（ツラ）　久隅（スミ）　字號清純（セイジュン）　千次郎　郷九郎　主計　監物

○享保九年甲辰三月廿六日、誕生于本府荒田之第、實島津彦太夫久富第三子、母曽祖父町田孝左衞門久東之女也、

○室肝付典膳兼隆女也、

○享保十六年辛亥八月六日、預請為久儔之繼目養子、時年八歳矣、御家老島津木工久豪使御用人中野駒右衞門利清宣旨（是以本宗血胤故也、前此久東女一嫁同氏久孝、有男曰實房焉、親戚相謀謂、與其久富之子執佳、時衆望咸歸久甫、遂立為嗣矣、其後久孝之男實房果亡狀、）

○享保十六年十月十五日、造朝見　太守繼豊公於御書院、獻太刀一腰・馬一匹（代銀）・三種二荷、奉謝為後嗣也（時久甫幼稚、故伊集院十藏久達代之）　御用人鎌田源左衞門政昌為奏者、

○享保十七年壬子二月、先是、伊集院藏人久矩之為執政也、威權稍傾擅朝廷、於是、欲超吾朝坐而出于其上、乃上書訟之、其言曰、伊集院之祖正室子、町田之祖他腹男、是故　貞久公觀應二年命以伊集院為嫡家也、且貶議吾祖數世壙僚之時、飾匿己先累代叛逆之蹟矣、　朝儀未肯審其作俑之胡説（伊集院譜之辨論已詳見上忠光譜、不復言于茲）、遂變改廢先格之朝班、使吾家與伊集院氏歳首賀正・八朔朝拜之坐次為隔年先後之例也、

享保十七年子二月二日年頭御禮着座、町田家之次伊集院家、前々より進上有之候處、隔年進上之筋

被仰渡候一巻帳、

○四八一　島津久春申渡書

伊集院藏人家之儀付而思召有之、しらへ被仰付、町田千次郎家両家、隔年ニ着座被仰付候、庶流付而者、只今之通相替儀無之候、

右之通、藏人殿家格被仰付候間、可被奉承知候、

以上、

『享保十七年』二月二日　　島津大藏（久春）

右之通、御書付を以嶋津大藏殿より鎌田源左衞門殿御取次を以被仰渡、川上縫殿殿御名代御承知被成候由ニ而、與所筆者白濱八郎右衞門殿ニ而被仰遣、使者之間江町田十兵衞罷出承知仕候、

一同日、嶋津彦太夫殿江町田十兵衞・益滿弥左衞門致伺公、右之趣申上候處、御請之次第支族之中先一両人相招申談可然候旨被仰聞候故、町田仲右衞門殿江十兵衞・弥左衞門參、右之次第申達候處、存外之事ニ候由被仰聞候、兎角御承知候段者、可被仰上事候間、此段彦太夫殿江申上候者、御書付を以御請御申候筋可然候通、被仰聞候付、又ゝ両人、彦太夫殿御方江致參上、其段申上、左之通御案文相調候、

○四八二　町田久甫口上覚

口上覺

伊集院藏人殿家之儀ニ付、　思召有之、しらへ被仰付、私家両家隔年着座被仰付候、庶流之儀ニ付而者、只今之通相替儀無之旨、被仰渡趣承知仕候、被仰渡儀ニ候間、先何分ニも奉畏候、私事頃日町田家相續被仰付、殊若輩有之、家筋由緒之儀ニ付而者、氏族共江茂不申聞候而者不叶儀御座候条、至其節者御断申上儀も可有御座候間、此段者被聞召置可被下候、以上、

二月三日　　町田千次郎（久甫）

一翌三日、右之御案文町田仲右衞門殿宅江町田十兵衞致持參、入御披見候處、弥右御案文之通ニ而可然之由被仰聞候、

一被仰渡候趣、平太左衞門殿江内山伊右衞門致持參御相談申上候處、左之通御請御申被成可然哉と被仰聞、御案文被成候、

○四八三　町田久甫口上覚

口上覺

私家年頭着座之儀ニ付、昨日被仰渡趣承知仕、奉畏候、以上、

二月三日　　町田千次郎

一右両通之御案文を以、支族中江茂御相談申入宜筋有之度由、彦太夫殿被仰候ニ付、内山伊右衞門・町田十兵衞同道ニ而、町田新左衞門殿・町田平角殿御宅江罷出御相談申入候処、新左衞門殿より兎角思召有之被仰付儀ニ候得者、御尤之儀と、右之通御請被仰上候筋可然由被仰候、

一町田仲右衞門殿事者、此節御供川越役ニ而、御發駕前日ニ而、今朝出足ニ候故、右御請書者御存無之候、

一二月三日、右御案文之通、御口上書相調御請被仰上候、

一同五日、直別之方ゝ、其外兼而御心易立入之支族之面ゝ相招、右段ゝ之趣、内山伊右衞門申達置候、

○四八四　鎌田政昌申渡書

千次郎家両家隔年ニ着座被仰付之旨、被仰渡置候趣有之候、依之、當八朔進上物之儀者、藏人殿進上、次ニ千次郎進上物被差上候様可申渡旨、市太夫殿被仰候、以上、

鎌田源左衞門（政昌）

子七月十六日

町田千次郎殿

○四八五　鎌田政昌申渡書

一御太刀一腰

一御馬一疋

右者、來ル八朔、於　御對面所進上有之筈候、當日之未明ニ跡ゝ之通可被差上候、年ゝ御觸流ニハ不被仰付候条、其心得ニ而進上物可被差上旨、御差圖ニ而候、以上、

但伊集院家隔年ニ進上物之前後有之候儀ハ、此間申達置候、是又爲御心得候、

鎌田源左衞門（政昌）

右之通被仰渡、御名代肝付典膳殿御承知被成、平田平太左衞門殿與力山口大右衞門殿ニ而被仰遣候、

○粤吾之家族學宗相屬（アツメ）曰、町田・伊集院本根出自兄弟、天人之倫理百世不易、天下之通義也、而今久矩之訴狀、蒙昧朝廷、極譏吾祖、非禮孰大焉、矧又典式所秩（ツイツル）朝儀既定、不圖久矩挾柄乘時得恐嚇町田幼主、將為勢豪誣陷、今夫不闢其邪路、曲從渠之寃結、無乃辱祖宗於地下貽破格於後葉乎、是不可以不力辨也、於是、久甫欲上書以訟之（有訴狀舊案一通、而極多遺逸、乃仍原書今者補其不足、頗加隱括如後、）

享保十七年子二月二日、町田家・伊集院家年頭御礼着座之次第、右ニ段ゝ記置候通被仰渡候、依之時節見合、前ゝ之次第を以、御断不申上候而不叶筈ニ候間、相しらへ、左之通口上書案文認置候、向年以時節、支族中申談、願可被申上之事、

○四八六　町田久甫口上覚案

口上覺案

此節、年頭・八朔御礼席之節、先規被相替、伊集院家隔年進上物可仕旨被仰渡候、私事幼少ニ而當家相續仕候、付而者家筋之次第迚もいまた取辨無御座候間、其後家ニ付無據支族共召寄申聞候処、是迄之先規被相替候付而者、今一往御吟味被成下候様、御内意奉訴、先祖共御奉公之御取分を以、

何卒此内之通被召置被下度奉存候旨、一同ニ願存候、依之家之由緒大概左ニ申上候、

一當家廿五代之祖大隅五郎忠經事、　御二代　忠時公第七之御子ニ而、其三男五郎太郎忠光ニ而候處、兄三郎兵衛助忠継直子無御座候故、忠光事兄忠継之跡兼帯仕候、忠継事伊集院之内町田邑を被成下、忠光ニ者石谷を賜候ニ付、初石谷氏を称し候得共、父忠經之後嗣罷成、兄之遺跡町田村をも致領地、夫より町田家號ニ罷成候、然共忠經七代之孫五郎兵衛尉助久迄茂、大隅氏を称候、付而者古代之儀者爲定名字有之候筋とハ相見得不申候、左候而、忠光事當分之石谷城ニ居住仕居、夫より三四代以來、異賊防禦之御手當として、諸方ニ馳廻候由申傳候、然者伊集院元祖俊忠事者、右忠光弟ニ而、山伏ニ罷成侍從房と申候、二代弥五郎久兼同所之古城村ニ罷在、後ニ他家伊集院家號を冒申候、三代助三郎忠國ニ至り強勢罷成、伊集院所〻自然と令押領、観應元年御當家江致御敵對候ニ付、　道鑑様御治罰として御發向被遊候節、當家之祖忠經七代之孫大隅五郎兵衛尉助久事、軍奉行被仰付諸所軍勞仕、子息家臣等或者戰死、或者手負いたし、忠國事伊集院城没落仕候處、其嫡孫伊集院彈正少弼頼久又〻御敵對仕、　元久公御逝去之砌、御家を奉奪と相企候付、　久豐公御大將として御誅罰被成候時、頼久押領いたし居候石谷一邑を頼久より差上降參仕候、

一五郎兵衛尉助久嫡孫五郎忠良、其子五郎丸成久、其子美濃守俊久迄、早世等打續、支族阿多飛彈守其節加世田・阿多・川邊等致領知、一往加世田江罷在候、俊久嗣子無之候付、右成久弟出羽守高久江俊久後嗣被仰付、本領石谷を拝領仕候ニ付、此時又〻石谷名字ニ罷成候而、老名職被仰付候、然處、伊集院大隅守凞久相嫉之、　太守忠國公江讒訴いたし、伏兵を以高久を妙圓寺前ニ而令殺害申候、高久嫡子石谷左京亮頼本其砌者鹿児島江御奉公仕居、凞久讒訴之趣申上、父讐を報度奉願候、

此時凞久謀叛之行跡段〻致露顯、　忠國公御出馬ニ而、寶徳元年伊集院城御攻落、凞久肥後國ニ逐電仕、凞久之孫筑前守久雄肥後國ニ而出生、後伊集院大和守孤舟ニ從ひ御國江入來申候得共、久雄子兵部少輔忠増・其子筑前守忠能共ニ伊集院幸侃家臣と罷成、其上幸侃子源次郎謀叛ニ一味仕申候、

一左京亮頼本江　久豐公より石谷邑如本安堵被仰付、夫より無間断領知仕來申候、頼本嫡子伊賀守梅吉初助太郎と申候、伊作式部太輔久逸櫛間江被召移候砌、　立久公御意を以、梅吉事久逸江被召附、彼地江御供仕居候處、新納近江守忠續と矛楯ニ被及候間、梅吉段〻久逸江諫言申入候得共、御納受無之付、無是非櫛間を立去、　太守忠昌公櫛間江御出陣ニ從軍いたし候、其節石谷助太郎と申候、無程久逸　忠昌公江御歸順ニ付、梅吉事鹿児嶋江御奉公申上候、

一梅吉嫡子伊賀守梅久事、　大中様御若年ニ而鹿児嶋江御養子ニ被爲入候節、　日新様より梅吉事兼而久逸江御昵近之御好〻有之、能御存爲被遊者ニ而、大中様江被召附、鹿児嶋江罷在候、然處、嶋津八郎左衞門實久致反逆、　大中様伊作江御立歸被遊、石谷城ニ罷在候梅吉之嫡子長門守忠榮江、大中様より御味方仕候様頼被思召候、此涯長門守御味方於致參上者、伊集院諸壘もおのつから退散可仕旨、御直書を以、分而御内意被仰下候付、天文五年十二月六日、鹿児嶋江罷在候父梅久江牒ッ合せ、　大中様御方江參上仕候、此時父梅久事鹿児嶋を夜中忍出、伊集院海道横井迄差越候處、實久方長山新兵衞大將ニ而多勢ニ被取籠、終ニ戰死を遂、家臣等尽く討死仕申候、右長門守忠榮事、最初ニ御味方仕候忠勤を御感被遊、本領石谷邑之外、伊集院上神殿村并鹿児嶋諸名廿餘町之新恩地拝領被仰付、　日新様　大中様御家老職被仰付、天文十七八年迄茂知行目録ニ連名相見得申候、忠榮代又〻町田家號罷成候、

一長門守忠榮嫡子兵部左衞門久徳事、十六歳之時、

大中様江被召出御直書被成下、其後早世仕候、其子町田出羽守久倍事、於諸所軍勞仕、就中菱刈郡市山城在番被仰付、永禄中、相良之賊　義弘公を奉襲候節殿り仕、敵兵有田源四郎を討取申候、且又、天正十五年太閤秀吉公九州動座之節、　惟新様江従軍、豊後表江致出張居候処、肥後表都而御敵ニ變し、諸軍退陣難成候付、阿蘇玄與と申者江調略いたし、阿蘇軍御味方ニ參候様取計ひ、新納武藏守忠元等と、四月廿一日大口江引取、地頭所伊集院本城江楯籠居在候、然處、御和睦ニ相成、龍伯様泰平寺江御出被成候節、　御供廻を初、都而支度致饗應、其砌久倍ニも御前ニ而剃髪、存松と改名被仰付候、此時數日連雨ニ而、諸所洪水いたし、其上御前駕輿丁共逃去、御輿を可奉擧者無之、存松自身下知を以、其邊衆中等を召出、御輿を舁申候而、直ニ千臺太平寺江御供仕候、嫡子左京亮忠綱・二男助太郎久幸、都而秀吉公江御目見、御道服・御羽織拝領被仰付、　龍伯様首尾能鹿児嶋江御歸城被遊候、其節も久倍地頭所江御入被遊候、是又御前を始御供廻支度旅籠等、一切久倍致用意進上仕候、且又、御姫龜壽様御質として太平寺江御出被遊候ニ付而茂、久倍伊集院城江奉迎、御供衆支度迄も相調、太平寺江御出立用意いたし差上申候、其後　龍伯様御上洛御供、文禄元年、惟新様御父子朝鮮江御渡海ニ付、久倍等江鹿児嶋御留守居、御政事を被爲任置候、此時梅北宮内左衞門謀反いたし、肥後佐敷邊ニ而一揆を起し、早打を差越、偽而　龍伯様御事秀吉を御討取被成、又ゝ九州被入御手筈之間、早ゝ御留守中諸軍勢を相催、肥後表江出陣候様、三度迄敷浪を打使を差立申候、此時御留守中何れも可應其儀と、上下以之外(騒カ)揆動ニ及候を、久倍事合点不仕、　龍伯様御墨付無之儀難應其下知段、制止申渡候、其砌久倍手鈍き趣諸人譏り申候由、五日之後梅北謀反之事、初而鹿児嶋江告來候、此時若諸軍勢肥後表江出張仕候者、秀吉公之暴怒可及不測之處、久倍一人之

先見ニ而、御難題ニ不及と、諸人も初而称嘆致申候、右付而秀吉公より御領内檢地として細川幽齋被差下、自儘之支配ニ而、旧家之知行を没收し、新參ニ無故領地を宛行れ、御領内甚猥ニ成立申候得共、久倍事、自己を差置一切ニ知行之濫望等不申出、專　御上之御爲を申込候ニ付、漸無難ニ相濟、翌二年幽齋名護屋江被罷歸候、右ニ付從　龍伯様御神文頂戴仕置候、且又文禄中、太閤秀吉公より　龍伯様御事、大口江被遊御居城候様被仰渡、御普請相始候得共、　龍伯様御事、大口江被成御座候儀思召不被爲叶、存松爲御名代被召移、大口を以一所之地ニ被成下候、此以前大口地頭新納武藏守事者、入來清敷江被召移、左候而、御國京都ニ掛、朝鮮御軍役名兒屋御續料等、御奉公無隙、慶長四年大口江入部、又〻京都江罷上、大病差發御暇被成下罷下候處、播州明石ニ而病死仕候、左候而、存松生前鹿児嶋本御内ニ登城御祝儀申上候節、年頭ニ者於御對面所ニ獨礼御目見、御太刀・御馬進上、着座御三献被仰付候、

一久倍跡目町田圖書頭久幸事、初助太郎と申候節、龍伯様於太平寺、秀吉公江御目見之時、御羽織拝領、左候而、秀吉公之下知ニ而、直に質人ニ罷出候、助太郎時ニ拾六歳、太閤譜に侍童一人を被召列御目見と候者、助太郎事ニ而候由、其後　惟新様御供朝鮮國江罷渡、其内名護屋江御使役をも相勤、七ヶ年在陣、御歸朝之節、明人共御船を咬留被爲及御危急候節、存松弟町田源左衞門久政遂戰死申候、左候而、久幸事其節　中納言様江御供、直に伏見江扈從仕、莊内山田之城攻之節も大口衆を引率し、家臣等數人戰死仕候、久幸事其後御家老職被仰付、

東照宮

秀忠公江琉球御賜、其外諸御礼使相勤、　両御所様江　御目見、御時服拝領等被仰付、是又、以前ニ地頭所より鹿児嶋江御礼參上仕候節者、父存松不相替於御對面所、進上物着座御三献被成下、御

祝儀申上來候、

一久幸養子町田出羽守忠尚事者、　中納言様御六男ニ而養子被爲入候刻、御幼年且御親〻之故を以、年頭御座配内之御座江被召出候、其後多病相成隠居、嫡子町田助太郎忠清・二男町田勝兵衛久孝打續致早世候、久孝弟初米松丸と申候、二男ニ而候得共、兄久孝同日、寛文二年十二月廿五日、寛陽院様御直ニ元服被成下、右米松丸事後孝左衛門久東と改名いたし、忠尚跡目相續之後、於御對面所年頭御座配被召出、八朔進上物之儀も喜入家次に町田家、次に伊集院家と座順被相究置、五年目一度諏訪御神事社役勤之儀も、御支族者川上・新納・町田・伊集院と致次第、是迄兄弟之天倫先後之列席無變改、御礼進上物等仕來申候、

右之通御座候、元祖五郎忠經事、二代之　太守忠時公御七男ニ而御座候得共、舍兄之家筋断絶ニ及、忠經之長子宗長事茂子孫無之、次男三郎兵衛助忠継ニ茂致早世候間、三男五郎太郎忠光、右忠經之継嗣罷成候付、忠經之跡目者忠光相續之筋ニ代〻家傳仕居、尤御直別同格ニ被仰付候儀茂右之御取分と、乍恐奉存候、然者伊集院家之儀者、忠經之四男ニ而山伏罷成、二代目弥五郎久兼事、後ニ他家伊集院彦五郎清重入道迎齋之子孫より、伊集院郡司職を讓請、他家伊集院名字罷成候由申傳候、然ルニ　町田・石谷者伊集院郷之内ニ而、彼家より扶助ニ爲遣置なとゝ今更申掠候儀、郡司職より取違候哉、縱郡司職を他家より讓請候とも、其以前、御當家より被下置候町田・石谷等之地を自分ニ與へ候筋ニハ被申間敷、縱令ハ後世ニ準候ハヽ、伊集院地頭職被仰付候迚茂、右之地頭より石谷迄も致支配候事ハ不罷成、同様之事ニ而、剰其時分、町田・石谷之外伊集院之内、公領私領之地主數ヶ所ニ及爲有之事ニ御座候、右ニ付而者、忠經之後嗣者全忠継・忠光と致連續、伊集院家事者他家之名字を冒し家號相立候次第、家筋之基本別段之訳合ニ相見得申候、然處、此節忠光事ハ忠經他腹之

子ニ而、侍従房事嫡妻之子故、忠經之家督を譲候筋被申出候趣、是亦相聞得候、此儀自家之申傳ニ而茂可有之候得共、當家ニ付、右通妾腹本腹等之訳筋一切申傳無之、其上侍従房事、本腹ニ而家督相續を可被仰付儀候ハヽ、山伏躰ニ者不罷成筈候、殊更他家伊集院家號等讓請申事ハ、猶更有之間敷と奉存候、前条ニ茂申上候通、五郎忠經之兄弟阿蘇谷氏外ハ子孫断絶ニ付、忠經事縦七男ニ出生候迚茂、舎兄之跡目無之候得者、後世之例ニ被仰付候ハヽ準男之御取分を以、忠經跡目七男之列ニ者不被召出筋奉願度、祖父共より申聞候旨、一族中存罷在候者共さへ御座候、其上、先年家筋連名之次第、屹与御書附を以被仰渡置、延寶九年、年頭御座配之儀ニ付奉願趣有之、孝左衛門事再ひ御對面所御座配ニ被相復、以前ニ者外之家柄之面々同様、次男迄御直元服等被成下來候、然處私代ニ至り、又々被相改、年頭御座配伊集院家隔年ニ被相替候儀、此節ニ及ひ家筋相劣候様ニ茂有之、就中私養子之事御座候得者、何共迷惑仕居、一族中ニ茂一統歎ヶ敷殘多奉存候、乍憚私家筋之儀者、當分迄嫡々廿五代、奉對　御正統様江野心不忠之者無御座、代々御奉公勤來、其内近代忠榮・存松・久幸事、御大切之砌自他國共ニ抽軍勞、難有被召仕來候、依之、當家連續之荒増、前条之通爲御見合書記差上申候、何分ニ茂御吟味之上、年頭・八朔座順之儀、御先格之通被仰付置被下候様、御申頼存申候、以上、

月日　　町田千次郎

○先是、享保九年、　太守吉貴公更命定歳首朝儀之坐班、其輟耦班為單列、同十一年丙午、一所持以下舊制朝班如左、

○四八七　年頭御礼着座次第

享保十一年丙午、年頭御礼着座

元日御書院御出座　御家老衆

三日

御對面所

御出座

持參太刀拾人ッ、着座、御盃頂戴、

嶋津左衛門　嶋津大学　川上久馬　『圖書・蔀次郎・又七・三家同格』嶋津圖書

御

嶋津藤十郎　嶋津又七　『御家老之場ニ而上ル』嶋津木工　『當年此場ニ上ル、若年故着座無之、納太刀』新納菊千代

『小平太・市左衛門両家同格』嶋津小平太　『御年男故着座無之』嶋津市左衛門　『大御目附之場ニ而上ル』樺山主計

『病気ニ而御断』嶋津筑後　『上同』桂太七郎　喜入主膳　町田郷九郎

伊集院源助　『帯刀・内記両家同格』嶋津帯刀　嶋津内記　北郷四郎

『病気ニ而御断』嶋津権太夫　『七郎太夫・李左衛門両家同格』大野七郎太夫　吉利李左衛門

種子嶋平馬　嶋津仁十郎殿　頴娃長左衛門

祢寝内記　入來院主馬殿　比志嶋隼人

肝付典膳　菱刈孫兵衛　諏方甚六

『病気ニ而御断』河田助右衛門

右終而、川上縫殿・新納次郎四郎・伊集院十藏・山田新助

右引次嶋津又吉・嶋津石見獨礼、諸地頭志岐藤右衛門・田尻八郎右衛門・中西文右衛門・山田次郎右衛門

○又八朔朝禮、蓋卿具於（ハシマレリ）

後嵯峨天皇八月朔日、御新穀仰田實云、故名是月日田實、蓋取恩頼之義也（據著、開集）、辨内侍日記、寶治元年八月一日歌曰、けふハ又そらたきものゝ名をかへてたのめはふかき匂とそなる、听雨集、八月初吉詩序曰、本邦風俗名仲秋朔旦為憑日以資相贈、康富記曰、八朔昉于、

後鳥羽天皇之末年歟、昔者天正初年以來、吾藩之巨室領城邑者、是日遣使獻　太守公太刀・馬代銀、猶如賀正禮、覺兼日史載其朝集使者嘗爭坐班先後之事、其由來亦遠矣、享保十五年八朔朝儀、舊制之例如後、

○四八八　八朔進上祝物賦

享保十五年戊七月、八朔御祝物賦

一　御太刀一腰
　　御馬壱疋　　喜入主膳
　　右取次丸田金左衛門
　　御太刀一腰
一　御馬壱疋　　町田郷九郎
　　右取次鎌田弥右衛門
　　御太刀一腰
一　御馬壱疋　　伊集院藏人殿
　　右取次伊勢弥八郎

○享保十八年癸丑春、久甫時久張修理江戸駒込吉祥寺山中先祖圖書頭久幸之墓、先是、久幸墓傾側而九輪墜地缺壞故也、因誌其事于墓上、

○享保十八年癸丑十一月朔日、千次郎造朝元服、繼豐公手自加冠、御家老島津主殿久貫理髪、改稱郷九郎、於是、獻天井折六合・樽三荷・太刀一腰・馬代銀一枚謝恩、伊集院十藏久達爲奏者、時賜御脇指一口刀匠薩州住正盛、

○四八九　島津継豊加冠状

加冠
　　町田千次郎
　　宜爲　郷九郎
享保十八丑十一月朔日　（継豊）（花押）

○享保十九年歳首及享保十七年八朔之朝班、不遵舊章之變態、

○四九〇　年頭御礼着座次第

享保十九年甲寅、年頭御礼着座
　三日
　御對面所江
　御出座
　　嶋津兵庫殿（『兵庫殿・玄蕃殿ニ者當分御間柄ニ而御座間ニ而上ル』）　嶋津玄蕃殿　嶋津左衛門　嶋津周防
御
　川上一學　嶋津圖書（『御断、圖書・又七・藤次郎三家同格』）　嶋津又七（『病気ニ付御断』）　嶋津藤次郎
　嶋津木工（『御家老之場ニ而上ル、在江戸』）　新納四郎　嶋津小平太（『小平太・市左衛門両家同格』）　嶋津市太郎（『市太郎病気ニ付御断』）

『御家老之場ニ而上ル』樺山主計　『部屋栖依願着座』嶋津石見　『幼少故同断』桂太郎兵衛　『御年男故着座無之』喜入主膳

『十右衛門・郷九郎両家同格』伊集院十右衛門　『幼少故御断』町田郷九郎　『大御目附之場ニ而上ル、帯刀・内記両家同格』嶋津帯刀　『七郎太夫・杢右衛門両家同格』大野七郎太夫

嶋津内記　北郷四郎　嶋津弥市

『痛ニ而御断』吉利杢右衛門　種子嶋太郎左衛門　『忌中』嶋津主水

頴娃長左衛門　『産穢ニ付御断』祢寝内記　『痛ニ付御断』入來院主馬

『御家老之場ニ而上ル』比志嶋隼人　『痛ニ付御断』肝付典膳　『病気ニ付御断』菱刈孫兵衛

『病気ニ付御断』諏方次郎左衛門　河田與右衛門

○四九一　八朔進上祝物賦

享保十七年子八月、八朔御祝物賦

御太刀一腰　喜入主膳

一　御馬壱疋

右取次本城源七郎

御太刀一腰　伊集院藏人殿

一　御馬壱疋

右取次木脇八郎左衛門

御太刀一腰　町田千次郎

一　御馬壱疋

右取次平山源八

右両家隔年前後之差別被仰付筈ニ被仰渡置、當年初而之儀故、前後之次第御尋申上候處ニ、當年之儀者、伊集院家早ク進上物有之候様可申渡旨、市太夫殿被仰候、

又享保十八年丑八月、八朔御祝物賦ニ曰、伊集院町田両家八朔進上物隔年以後有之候得共、藏人殿御役中者頭ニ進上ニ而、右次ニ千次郎進上可有之候、

右之通可申渡旨、享保十八年丑七月、市太夫殿被仰候、

既而享保廿年甲寅、伊集院藏人久矩從行在江戸邸也、私誘　公微出頗有適株林之嫌、　老大侯吉貴公遙聞而震怒、乃免久矩之官、褫其家格一所持、貶為寄合、則固不得與於賀正朝儀之班矣、因吾之

將有訟之狀、亦未至呈上、

○四九二　内山伊右衛門・町田正左衛門連署証状

別紙書付之通、享保十七年子二月二日、鎌田源左衛門殿御取次を以被仰渡候處、藏人殿事、依子細、同廿年卯八月廿六日、家格寄合ニ被仰付候、家督継目之御礼被申上候節ハ、御太刀・一種一荷被仰付、

且又、

御直元服之家格候得共、向後ハ元服之御礼ニ被仰付候、右ニ付而ハ、最初被仰渡候両家隔年ニ着座之儀者、以來共無之候得共、至後年爲無疑、我〻共加書付置候、以上、

町田正左衛門

元文四年未十一月日

内山伊右衛門

○元文三年戊午五月、　老君吉貴公使御用人相良源太夫長以宣内旨於御隠居方御近習役并平田孫太郎位充、因謂島津彦太夫久富曰、余如聞町田久隅之養母松月院殿居常匱乏（カネテ）、久隅妙年（トシワカシ）、恐不恤其居約（セハク）也（シキニ）、以余之言宜傳久隅之本生父島津久富也、久富聽命則意是院主或有私（ゴナイ）於　公而然乎（院主即公妹也）、不以情實白之、則恐其忤上旨、乃以告命于松月院主、院主從容曰、是弗思之甚矣、未亡人潔居被（フスマ）尊重（アツキ）繭（アサユフナ）蔗羞加籩、云何供給之缺、吾又未嘗言于他世上也、上胡為懷疑貳乎、於是、久富結算吾之所供松月院主及所隷從婢年分之解給（ツハキレウ）、以條陳之平田孫太夫位充、

一相良源太夫殿御取次を以、平田孫太郎江被　仰出候者、嶋津彦太夫江可申聞候、松月院殿事、續方別而不如意有之被及難儀候由、養母之儀候得者、難儀無之様可致事候、郷九郎儀者若輩之儀ニ候、彦太夫直父之儀候得者、郷九郎家内能爲存筈候間、右之趣、彦太夫江可申聞旨、　御意候通、源太夫

殿より承知仕候、

一右之通孫太郎より承知仕候ニ付、則用頼役人江申達、段々相糺候上、松月院殿江も被申上度候、若御内々ニ而御願共爲被申上儀欤可有之候、左候得者、別而間違之事候間、内山伊右衛門・町田正左衛門江申達、両人より右之御沙汰委細被申上候處、松月院殿被仰候者、右躰之儀少も爲被仰上儀無之、存外之事被思召候、何そ不如意ニ茂無之、可致難儀様無之候得者、脇々之人江茂左様成噂被成候儀、曽而無之旨被仰候通承候付、左之通口上書を以申出候、

○四九三　島津久富覚

覺

一松月院殿江町田郷九郎より年中續方相渡候儀、前町田郷九郎代より銀三貫弐百九拾目ッヽ相渡、常調方呉服代、其外諸入目、且又召仕候男女給分迄、右之内を以相濟、不足有之節者、郷九郎方より差足置申候處、卯十二月、松月院殿續方郷九郎より何ほと相渡哉之旨、御勝手方より段々御尋之趣有之候故、右銀高之通、年々相渡候段、委細書付を以申出候處、右三貫弐百九拾目之内、銀七百三拾目者、納殿役・料理役・小者・下男給分・飯料代相込候、此拂者相除、向後郷九郎より之出方可仕候、左候而、松月院殿續方之儀者、一ヶ年銀三貫目ッヽ相渡候筋究置可申候、若三貫目ニ而茂不足相立候節者見合、郷九郎所帯より差足、不如意無之様可仕候旨、辰五月被仰渡候、依之、辰六月より巳五月迄一ヶ年之渡方、銀三貫目を以本拂仕候處、銀壱貫百六拾目余相殘申候、且又、巳六月より當五月迄閏月相込、一ヶ年渡方之内、銀八百六拾目余相殘、二口合銀弐貫弐拾目余、當分殘銀有之候段承届申候、

右者、松月院殿續方之儀付而、御尋之趣承知仕、町田郷九郎用頼役人共江段々相糺申候處、右之通ニ御座候旨申出候間、此段申上候、以上、

六月十六日　　嶋津彦太夫（久富）

右口上書之外、松月院殿江之御扶助有之候故、孫太郎迄爲心得、左之通書付相渡候、

○四九四　島津久富書状

一享保十三年三月、おせい殿儀何そ貯も無之、内々難續由候、郷九郎儀も勝手難續、別而欠略仕候由申出候間、郷九郎方左害被罷成候而も不宜儀と被思召候、御内々より御銀拾貫目拝領被仰付候、右御銀を以、先ヶ〻續方之足ニも罷成候様被相心得、銀分致欠略可被相續旨、御意之通嶋津將監殿より被仰渡、御銀相渡候、依之、拾貫目之内六百目余者仕用罷成、殘銀九貫三百目余、至當分借シ銀ニ而差置、年〻利拂之儀者御附人女中江相渡候段承申候、

一御米四拾石、年〻相渡候ニ付、賣拂候代銀、右同断、御附人女中江相渡申候段承届申候、以上、

六月十六日

○四九五　島津久富書状

一御意候者、世上養父母なとゝ大形之儀も有之ニ付、自然大形ニ者有之間敷哉と被　思召上、御尋爲被成事ニ候、何そ脇より爲被聞召上儀ニ而者無之候當郷九郎身躰向、先郷九郎代より宜事ニ而茂無之ニ付、十分ニ者難成筈候、郷九郎より大形ハ無之筈候由、　御意候、以上、

六月廿五日

右之通　御意之由、平田孫太郎より承知仕候、以上、

元文三年六月廿五日　　嶋津彦太夫

○四九六　勝手方申渡書

一松月院殿江先郷九郎殿御存生之節、御渡方被進置候者、其員數御用候間、書付此便ニ而可被差出候、御渡方無之御入用次第爲被相渡事候者、壱ヶ年分

御入用員數書付可被差出候、御衣類料相知候者、内書相記可被差出候、只今則難被書出候者、急成御用候間、年明無延引可被書出候、以上、

十二月卅日　　御勝手方算用役

町田郷九郎殿役人衆

右之通被仰渡候付、左之通申上候、

○四九七　町田家役人差出

一銀壱貫九百六拾匁弐分八厘

内銀三百五拾弐匁壱分五り七毛

常用方

銀四百三拾壱匁八里九毛

夏冬衣類調方

銀四百九拾壱匁九分壹里壱毛

女中三人・簡所壱人、扶持銀并賄方

銀六百八拾四匁三分弐里弐毛

諸品物調入用

右者、先郷九郎存生之内、松月院殿方江年〻渡方遣置候者、其員數亦者渡方無之、入用次第爲相渡事候者、其訳書付可被申出旨、被仰渡趣承知仕候、壱ヶ年之續料、右員數相渡申候、此以前者、右銀高よりハ別而相増渡來申候得共勝手難續、先郷九郎代、右之通相減申候、尤右外年〻臨時入用者相調申候、此段任御尋申上候、以上、

辰正月十五日　　町田郷九郎役人益滿弥左衛門

町田十郎右衛門

右之通辰正月十五日、大窪吉右衛門殿ニ而差出候處、算用役被請取置候、

○四九八　勝手方申渡書

一松月院殿御方江郷九郎殿御方より被付置候仕女・簡所・草履取・下男江、年中飯料亦者味噌・塩・故實代・夏冬衣類代、壱人前ニ而何程ッヽ被下候

訳銘〻書記、又〻右之外ニ御賦銀等被下候者、是
又壱人前ニ何程ッヽ被下候訳、右同断、被附置候
料理役給分、
右、只今此使ニ而、早〻可被書出候、以上、
五月九日　　算用役
町田郷九郎殿　役人衆

右之通被仰渡候ニ付、左之通申上候、

○四九九　町田家役人差出

一眞米五石六斗六升四合
　但　仕女三人・簡所壱人、飯料壱ヶ年分
一銀百五匁
　但　仕女三人、壱人ニ付夏拾五匁・冬弐拾目ッヽ
　　衣類扶持、
一銀三拾匁
　但　夏拾三匁・冬拾七匁、簡所壱人衣類扶持
一薪四百八拾束
　但　仕女三人・簡所壱人江相渡候、
一眞米三石
一赤米三石
　但　納殿役両人・料理役壱人、眞・赤弐石ッヽ扶
　　持方、
一眞米五石三斗壱升
　　右同断、飯料、
一味噌壱石弐斗三升九合
一塩四斗九升五合六勺
一薪弐百四拾七束
一錢弐百五拾六文
　　野菜代、
一銀六匁三分
　　賄椀七具、
右、仕女三人・簡所壱人・小者壱人・下男両人賄
方入用、
一眞米五斗
一赤米五斗

但
小者壱人扶持方、
一眞米六斗
一赤米六斗
但
下男両人扶持方、
一赤米五石三斗壱升
但
小者壱人・下男両人飯料、
右者、松月院殿方江先郷九郎代より至當時被付置
候男女ヶ年分扶持方・飯料・故實銀迄、銘〻書記
可申上旨承知仕候ニ付、此段申上候、以上、

辰五月九日

町田郷九郎役人
益満弥左衛門
町田十郎右衛門

○五〇〇　町田家役人差出

一銀弐貫五百五拾四匁七分八里
内
銀三百五拾弐匁壱分五里七毛
但
松月院殿常調方、
銀四百三拾壱匁八里九毛

但
夏冬衣類調并細物代迄、
銀四百九拾壱匁九分壱里壱毛
但
召仕之女中三人・簡所女壱人扶持銀并賄方
諸物代迄、
銀壱貫弐百七拾八匁八里弐毛
但
年中諸品物代臨時方入用、
一銀七百三拾七匁六分
但
納戸役人・料理役壱人・小者壱人・下男二人
扶持・飯米并味噌・塩・薪代、
合銀三貫弐百九拾弐匁三分八里
右者、松月院殿續料、委細可申上旨被仰渡趣承知
仕候、先郷九郎代より至當時右之通ニ而、年〻相
調來申候、此段申上候、以上、

辰五月九日

町田郷九郎役人
益満弥左衛門
町田十郎右衛門

右之通、辰五月九日、大窪吉右衛門殿ニ而、山岡

權太左衞門様御方江御出被成被請取置候、同五月四日、御用無之相下ル、
右之通申上候處、御意之趣書付、

○五〇一　島津吉貴内意書

松月院殿續料、銀三貫弐百九拾匁余之内、七百三拾七匁程、納殿・料理役・小者・下男扶持方・飯料・故實銀代之由、町田郷九郎役人共書出候得共、此入用者郷九郎方入用拂相立續料之内可相加儀ニ而無之条、右之分者相除、向後松月院殿一ヶ年之續料、銀三貫目被究置可然候、若右ニ而茂致不足候節者、可被差足事候、郷九郎養母之儀候得者、萬端不如意無之様可被取計事候儀ニ付而者、致承知候趣茂有之候間、右之旨を以、郷九郎江可被相達候、以上、

五月

本文之通、辰五月十三日御用有之、用頼名代大窪吉右衞門殿御出被成候處、堀四郎大夫様より山岡權太左衞門様江本文之通被仰渡候、

○元文四年己未十一月三日、本府稲荷社會鏑流馬、預命久甫為上馬、是日射手若干人焉、

○寛保二年壬戌二月朔日、為御連歌衆、御家老種子島織部時□(成)降旨、

○寛保三年癸亥十二月九日、聘肝付典膳兼隆之女名春、

（表紙）

廿五代
久甫第二
延享元至寛延四

町田氏正統系譜　卅五

藤原姓町田氏正統系譜巻第卅五久甫二

○延享元年甲子正月元旦、久甫時久張試毫及手字唐詩并摹于後、先是久甫從川俣作圓讀書、最通於易經作圓始御納戸附士受文學業於伊集院仁左衛門俊雄、後擧為直士、又師志賀登龍倣字、頗工於八分八分謂割李篆字二分、取八分、又謂之章程書、

（摹書省略ス）

○延享二年乙丑、為御連歌衆、今玆就式日連歌會班席自是為例、不復書、

○延享二年十月十二日、久儔室松月院卒前太守綱貴、公第四之女享年四十四、法名松月院殿榮山玄珠大姉、同十六日、葬石谷永福寺、置牌于同寺、今日　老君吉貴公　太守繼豐公　儲君宗信公及女中、僉差使吊喪歸賻、　老君公御用人島津權左衛門久道宣旨、其餘　前太守綱貴公女於榮君始松平隱岐守定英侯夫人、大歸後號信解院及後夫人信證院江田五兵衛國重女・吉貴公女德姫君後配島津出雲久定及側室於坂殿近藤三左衛門嘉包女・繼豐公側室於嘉久様宗信公親母、渋谷喜左衛門貫臣女、後號妙心院、各遣代行香使賻送香奠銀、巔末具録左方、

○五〇二　松月院葬式一巻

一延享二年丑十月、松月院殿御死去ニ付、從　御三殿様御女中様方御香奠拝領御使ニ付一巻、

一　香奠銀壱枚
御使
御小納戸役

右、松月院殿中陰明日執行候付被遣候条、明日於寺佛前可相備候由、十六日九ッ時、町田郷九郎屋鋪江差越、忌不掛親類江可相渡候、

右之通申渡候、

十月　　權左衞門

追而、本行相濟候以後、親類迄左之通咄可置候、寺江御使被遣　思召候得共、彼方手挾有之、御使なと差越候而者、別而難致由、内〻相聞得候故、郷九郎屋敷迄被遣事ニ候、

一同日、於坂殿より礒奉行御使ニ而、香奠被遣筈候、右、十月十四日、嶋津權左衞門殿より内〻為心得平田平太左衞門を以被遣候、

一松月院殿江香奠被遣候儀、昨日も中陰之日、御使を以遣筋直申聞候得共、前日十六日八ツ時分、町田郷九郎宅江御使を以被遣、忌不掛親類江明日中陰執行候付而被遣候間、明日お寺ニ佛前江可相備候由申達可相渡候、右相濟候而、親類迄左之通咄置可申候、寺江御使者被遣　思召候得共、彼方狹有之、御使者被差越候而者差支由、内〻相聞得候故、右通、屋鋪江被遣候段可申達候、

右之通、御使者勤申候様、築地納殿役人江可申渡候、

但本行之趣ニ而候故、親類江平田平太左衞門より致内通置候間、別立而内通不及筈候、

十月　　權左衞門

右、十月十四日、島津權左衞門殿より内〻為心得平田平太左衞門を以被遣候、

一松月院殿御不幸ニ付、從　御両殿様御香奠拜領被仰付筈ニ而、中陰之節直寺江被差越積候得共、却而厄害茂有之筈候ニ付、石谷迄被差越候筋を以、中陰之前日、郷九郎殿屋敷江御使被下筈候間、左之通手當可有之候、日限者追而相知筈候、

一一門之内忌掛無之人両人計、不洗もの麻上下着用ニ而、郷九郎殿宅江被參居、御使入來之節、郷九郎殿名代之躰ニ而出向、拜領物頂戴之御請可被申候、

一遠見申付置御使者入來見掛候ハヽ、直ニ可相通候、

一御香奠先達而被遣候者、直書院床之前ニ備置可申候、若入來之節持せニ而候者、御使之人書院江居

付無之内ニ相備可申候、萬一先達而難備候者、居付以後相備可申候、

一用頼役人、麻上下着用ニ而、門外江可罷出候、

一一門衆之内、壱人者玄喚薄縁迄被罷出、壱人者門地ふくの邊迄被出向、直ニ書院江案内有之、御使者より拝領之段被申聞候節、難有次第奉存候、則石谷へ差越、中陰之節、佛前江相手向可申候、右之段者郷九郎江も可申聞旨、御請可有之候、

一玄喚薄へりへ家來壱両人召置、御使者入來之節、刀相請取、書院刀掛ニ相懸可申候、

一茶・たはこ盆出可申候、宮仕之士麻上下着用、

一御使被立候節、一門衆被罷出候次第并用頼役人罷出候儀、最前之通可有之候、

一右、御香奠之儀何そ麁抹無之物入付士宰領ニ而、則石谷へ差越、御中陰之節、御佛前へ相備可申候、

一右御香奠之儀者、郷九郎殿江對し被下物ニ而者無之、御亡者へ御拝領之儀候故、直ニ寺江被遣、御心入之御事候間、常式香奠之様有之候而者難成候、菩提所祠堂銀被附置、往々右之趣取失無之様慥可被申付候、

一右、御香奠拝領御禮之儀者、追而沙汰可有之候、

十月十四日

右次第書、嶋津玄蕃殿・嶋津弥市郎殿御相談之上被相調、弥市郎殿より島津彦太夫江被相渡候、

於坂殿より之御使入來之節、挨拶諸事致様如何可仕哉之旨、弥市郎殿へ彦太夫より御尋申入候處、此段者玄蕃殿江得御差圖、追而何分ニも可申達旨被仰、同十五日八ッ後、弥市郎殿御出、左之通書付被相渡候、

一總州様より之御使昼九ッ時、

一薩州様より之御使右同断八ッ時、御使長瀬伴右衛門殿、

一徳姫様より之御使右同断八ッ時、御使野津安右衛門殿、

一於坂殿より茂御香奠被遣筈候、

一徳姫様御使入來之節、御親類之内壱人玄喚薄縁迄

御出迎、直ニ書院へ御案内、　御意之段被成承知候儀、　御両殿様御使同断ニ而、茶・煙草盆出し被立候節も、薄縁迄御送可被成候、尤用頼役人之儀者、玄喚庭江罷出可然候、

一於坂殿御使入來之節者、御親類之内壱人、玄喚板之間迄御出迎、直ニ書院江御案内ニ而、諸事之儀徳姫様御使同前ニ而、被立候節も最前之所迄御送可被成候、用頼役人之儀者、薄縁迄可罷出候、

十月十五日

一明十六日夜五ツ時、於石谷松月院殿御葬礼有之由、先日被申上置候、右ニ付、御焼香為御見立、納殿渋谷甚八并宰領足軽壱人相付、明四ツ時分爰元罷立、石谷之様被差越筈候、甚八差越候、付而者、上下拾壱人差越筈候間、右之見合を以立宿一間可被申付置候、御葬禮相濟候得者、早速罷帰筈候間、左様被承置、右之段石谷江茂可被申越候、以上、

十月十五日　　内山勘左衛門

町田郷九郎殿
用頼

右之通申來候付、則石谷江用頼代児玉彦兵衛江申越候様ニと申付、本文之通爲申越候、

一右段〻之儀付而、肝付弾正殿・嶋津彦大夫罷出相詰居申候處、左之通候、

御香奠　　白銀十両

右、從　總州様御使

御小納戸役
郷田安左衛門殿

右者、今十六日九ツ時被爲越候付、御自分様爲御名代私共相勤、島津彦太夫門外地幅迄罷出、致案内奥書院江請待仕候処、　御意之由ニ而、奉承知候者松月院殿中陰執行仕由候間、拝領被仰付候条、明日於寺佛前可相備旨承知仕候付、難有仕合奉存候、郷九郎儀領地江罷越居候、早速右之趣申越、佛前ニ可相備旨御請申上候處、引次石谷江御使被遣　思召候得共、彼地手狭有之、御使抔被差越候而者難致由、御内〻被　聞召上候故、郷九郎屋敷迄被遣事候、此段親類中迄可咄置旨、　御意之段承知仕候故、重畳難有次第奉存候旨、御請申上置

候、御口上彦太夫承知仕候、

御香奠　白銀十両

右、從　薩州様御使　御小納戸役　二階堂五郎太夫殿

右、被爲越候節、前条同前彦太夫罷出、　御意之趣奉承知候處、　總州様御使同断御座候、御請同前申上候、

御香奠　金子弐百疋

右、從　徳姫様御使　納殿役　野津安右衞門殿

右、被爲越候節、前条同前肝付弾正罷出、　御意之趣奉承知候處、　總州様御使同断ニ而御座候、御請同前申上候、

御香奠　青銅百疋

右、於坂殿より御使　礒奉行　山口九右衞門殿

右、入來ニ付、奥書院江致請待、口上之趣承候者、松月院殿中陰御執行有之候付、被差上候旨致承知候付、則石谷江差越、明日於寺佛前可相備旨申達候、

一薩州様より之御使、長瀬伴右衞門殿と昨日弥市郎殿より御渡被成候、次第書へハ有之候得共、二階堂五郎太夫殿被相越候、

右之通、御香奠御拜領、御使被爲越候付而、別紙次第書之通、無間違相濟申候間、此段申越候、

以上、

島津彦太夫
肝付弾正

町田郷九郎殿

一門外江罷出候人數

用頼代　児玉彦兵衞
役人代　原勘左衞門

一御香奠請取　松下良右衞門
一御香奠備　町田清右衞門
一刀請取　橋口善左衞門
一茶・煙草請込　前田武右衞門

一茶給仕　藤崎金次郎
一煙草盆給仕　町田清右衞門
右之通申付、無滞相濟申候、尤赤松甚右衞門・町田長兵衞・阿多源之丞儀、御使被爲越候節者、鑓之間末ニ相詰居申候、御使奥書院江着座之節、右三人共ニ末席相詰居申候、
一御番所番人之儀者、鑓之間後ニ五人申付相詰申候、此段爲御納得申上候、

十月十六日　島津彦太夫

郷九郎様

右段〻之儀付而、弥市郎殿及御世話候故、私罷出御禮申上可然と申談、左之通、口上書相調致持參候、

口上

松月院殿死去ニ付、其涯より毎度宅江御出被下、昨日　御両殿様・御女性様方御使等御座候付而も御引請御差圖被成、段〻御世話候故を以、諸事無滞相濟、至私共忝奉存候、郷九郎罷歸御禮申上候迄者及延引候条、此等之段爲可申上伺公仕候、以上、

十月十七日　嶋津彦太夫

右口上書、嶋津弥市郎殿宅江彦太夫致持參候、

口上

一松月院殿不幸ニ付、從　總州様以御使、町田郷九郎宅迄御香奠拜領被仰付、　御意之趣奉承知、重畳難有次第奉存候、郷九郎忌晴御禮申上候迄者延引御座候故、先私より御禮申上置候様郷九郎申聞、參上仕候、

十月廿日　肝付弾正

右口上書、嶋津權左衞門殿宅江肝付彈正殿被致持參候、

口上

一松月院殿不幸ニ付、從　薩州様以御使、町田郷九郎宅迄御香奠拜領被仰付、　御意之趣奉承知、段〻難有次第奉存候、郷九郎忌明御禮申上候迄者延引御座候故、先私より御禮申上置候様ニと、郷九

郎申聞參上仕候、以上、

十月廿日　　嶋津彦太夫

右口上書、樺山主計殿宅江彦太夫持參いたし候、

口上

一松月院殿不幸ニ付而者、從　信證院様以御使、蒙仰、遺躰領地之様被差越候節も御使被成下、且亦葬禮中陰執行仕候付而も、領地迄御焼香爲御見立御使、其上御香奠拝領被仰付、重畳難有次第奉存候、郷九郎忌明御禮申上候迄者延引御座候故、先私より御礼申上置候様ニと、郷九郎申聞、御宅迄致伺公候、以上、

十月廿日　　島津彦太夫

右口上書、　信證院様御方納殿役人冨山傳内左衛門殿宅江、彦太夫致持參候、

口上

一松月院殿不幸ニ付而者、從　於栄様以御使蒙　仰、遺躰領地之様被差越候節も御使被成下、且亦葬礼中陰執行仕候付而ハ、領地迄御焼香爲御見立御使、其上御香奠拝領被　仰付、重畳難有次第奉存候、郷九郎忌明御礼申上候迄者延引御座候故、先私より御礼申上置候様ニと、郷九郎申聞、致伺公候、以上、

十月廿日　　島津彦太夫

右口上書、　於栄様御方納殿役人内山勘左衛門殿宅江、彦太夫致持參候、

口上

一松月院殿不幸ニ付、從　於嘉久様以御使御香奠被成下、難有次第奉存候、郷九郎忌明御礼申上候迄者延引御座候故、先私より御礼申上置候様ニと、郷九郎申聞、御宅迄致伺公候、以上、

十月廿日　　島津彦太夫

右口上書、　於嘉久様御方納殿役人西田嘉左衛門殿宅江、彦太夫致持參候、

口上

一松月院殿不幸ニ付、於坂殿より貴様御使を以、町田郷九郎宅迄御香奠被下置、忝奉存候、郷九郎忌

明御礼申上候迄者延引御座候故、先私より御禮申上置候様ニと郷九郎申聞候付、貴様迄郷九郎用頼町田正左衞門を以申達置候、以上、

十月廿日　　島津彦太夫

右口上書、礒奉行山口九右衞門宅江町田正左衞門致持參候、

一松月院殿不幸ニ付、於領地中陰執行仕候付而者、從　總州様町田郷九郎宅迄御香奠拜領被仰付候、爲御使郷九郎宅江御出、御苦労之儀存候、郷九郎忌明御挨拶申入候迄ハ及延引候条、先爲拙者此旨申進候、以上、

十月廿二日　　島津彦太夫

郷田安左衞門様

右之通、手紙相認遣候事、

一松月院殿不幸ニ付、於領地中陰執行仕候付而者、從　薩州様町田郷九郎宅迄御香奠拜領被仰付候、爲御使郷九郎宅江御出、御苦労之儀存候、郷九郎忌明御挨拶申入候迄者及延引候条、先爲拙者此旨申進候、以上、

十月廿二日　　島津彦太夫

二階堂五郎太夫様

右之通、手紙相認遣候事、

一松月院殿不幸ニ付、於領地中陰執行仕候付而者、從　徳姫様町田郷九郎宅迄御香奠拜領被仰付候、爲御使郷九郎宅江御出、御苦労之儀存候、郷九郎忌明御挨拶申入候迄者及延引候条、先爲拙者此旨申進候、以上、

十月廿二日　　島津彦太夫

野津安右衞門様

右之通、手紙相認遣候事、

一松月院殿不幸ニ付、遺躰領地江被差越候節、從信證院様之爲御使御出、其上葬禮之節茂領地迄御見立御香奠拜領之爲御使御越、至遠所御苦労之儀存候、郷九郎忌明御挨拶申入候迄者及延引候条、先爲拙者此旨申進候、以上、

十月廿二日　　島津彦太夫

大原十兵衛様

右之通、手紙相認遣候事、

一松月院殿不幸ニ付、遺躰領地江被差越候節、従於栄様之為御使御出、御苦労之儀存候、郷九郎忌明御挨拶申入候迄者及延引候条、先為拙者此旨申進候、以上、

十月廿二日　　島津彦太夫

内山勘左衛門様

右之通、手紙相認遣候事、

一松月院殿葬礼之節、従　於栄様御見立御香奠拝領之為御使、領地迄至遠所御苦労之儀存候、町田郷九郎忌明御挨拶申入候迄者及延引候条、先為拙者此旨申進候、以上、

十月廿二日　　嶋津彦太夫

渋谷甚八様

右之通、手紙相認遣候事、

口上

一松月院殿不幸ニ付而者、其砌町田郷九郎宅江御出、諸事御差圖被遊被下候故を以無滞相済、忝仕合奉存候、且亦従　御両殿・御女中方様御香奠拝領被仰付候ニ付而も、旁御差圖被遊候由、重畳忝奉存候、郷九郎忌明御礼申上候迄者及延引候条、先私より御礼申上置候様ニと郷九郎申聞、参上仕候、以上、

十月廿三日　　肝付弾正

右口上書、玄蕃様御宅江肝付弾正殿被致持参候、

口上

一町田郷九郎儀忌中ニ付、昨日者従　於栄様両種拝領被仰付、難有次第奉存候、郷九郎忌明御礼申上候迄者及延引候条、先為私御礼申上置候様郷九郎申聞、御宅迄致伺公候、以上、

十一月廿五日　　島津彦太夫

右口上書、内山勘左衛門殿宅江彦太夫致持参候、

口上

一町田郷九郎忌中ニ付、昨日者従　信證院様両種拝領被仰付、難有次第奉存候、郷九郎忌明御礼申上

候迄者及延引候条、先爲私御礼申上置候様ニと、郷九郎申聞、御宅迄致伺公候、以上、

十二月朔日　　島津彦太夫

右口上書、冨山傳内左衞門殿宅江彦太夫致持參候、

口上

一松月院病中、從　總州様御使被成下、相果於領地中陰執行仕候付、以御使私宅迄御香奠拜領被仰付、御意之趣奉承知、段々難有次第奉存候、忌明申候ニ付、右之御礼可申上參上仕候、以上、

十二月三日　　町田郷九郎

右口上書、島津權左衞門殿宅江致持參候、

口上

一松月院相果、於領地中陰執行仕候ニ付、從　薩州様以御使私宅迄御香奠拜領被仰付、　御意之趣奉承知、段々難有次第奉存候、忌明申候付、右之御礼申上候、以上、

十二月三日　　町田郷九郎

右口上書、御側御用人座江罷出、御礼申上候、

口上

一松月院病中、從　信證様折々御使被成下、毎度拜領物等被仰付、相果候砌且亦遺躰領地江差越候節、御使被成下、葬礼中陰執行仕候付而茂、彼地迄御使被成下、其上御香奠拜領被仰付、私忌中ニ茂拜領物等被仰付、重畳難有仕合奉存候、忌明申候付、右之御礼爲可申上參上仕候、以上、

十二月三日　　町田郷九郎

右口上書、武御屋敷江參上、御礼申上候、

口上

一松月院病中、從　於栄様折々御使被成下、毎度拜領物等被仰付、相果候砌且亦遺躰領地差越候節も御使被成下、葬礼中陰仕候付而者、彼地迄御使被成下、其上御香奠拜領被仰付、私忌中ニ茂節々拜領物被仰付、重畳難有仕合奉存候、忌明申候付、右之御礼爲可申上參上仕候、以上、

十二月三日　　町田郷九郎

右口上書、西田御屋敷江參上御礼申上候、

一松月院病中、從　徳姫様御使被成下、其上拝領物等被仰付、相果中陰執行仕候ニ付、以御使御香奠拝領被仰付、重畳難有次第奉存候、忌明申候付、右之御礼申上度、御宅迄致伺公、何分ニ茂御取成頼存候、以上、

十二月三日　　町田郷九郎

右口上書、　徳姫様御方納殿役人児玉利左衛門殿宅江致持参候、

口上

一松月院病中、從　於嘉久様毎度御使被成下、其上拝領物等被仰付、相果候砌御使被成下、中陰執行仕候付、御香奠拝領被仰付、重畳難有次第奉存候、忌明申候付、右之御礼申上度、御宅迄致伺公候、何分ニ茂御取成頼存候、以上、

十二月三日　　町田郷九郎

右口上書、西田嘉左衛門殿宅江致持参候、

口上

一松月院相果、中陰執行仕候付、於坂殿より御香奠被成下、忝奉存候、忌明申候付、右之御礼申上度御宅迄致伺公候、何分ニ茂御取成頼存候、以上、

十二月三日　　町田郷九郎

右口上書、山口九右衛門殿宅江致持参候、

口上

松月院相果、於御領地中陰執行仕候ニ付而、從
總州様　薩州様　徳姫様爲御使私宅江御出、御苦
労之儀存候、忌明候間、右之御礼爲可申入如斯御
座候、以上、

十二月五日　　町田郷九郎

郷田安左衛門様

二階堂五郎太夫様

野津安右衛門様

右、手紙ニ相認同案ニ而、右三人江銘々使ニ而遣
候、從　太守様明十二日、御香奠拝領被　仰付筈
之由、御使番より問合有之候付、左之通次第書相
調候、十二月十二日四ッ時、從　太守様御香奠拝
領、爲御使諏方甚兵衛殿入來ニ付、次第書、

一前以遠見付置可申候、
一御使入來之節、郷九郎并親類之内壱人、門外地幅迄出迎、書院江案内可申候、
　但郷九郎支度熨斗目麻上下、親類支度不洗物麻上下、
一親類之内壱人者、玄喚薄縁迄出向可申候、
一御使入來之節、用頼役人麻上下着用ニ而門外江可罷出候、
一取次番三人程玄喚庭江可罷出候、
一玄喚薄縁江、家來之内両人罷出、御使刀請取、直書院刀掛ニ掛可申候、
一御香奠前以參候者相請取、直ニ書院床前可相備候、若御使入來之節參候者、御使書院江居付無之内可相備候、
一御使より拝領之段被申聞候節、郷九郎頂戴仕、御請御礼申上箸候、
一茶・煙草盆出可申候、
一御使被爲立候節、郷九郎并親類・用頼役人取次番最前之通罷出可申候、
一御香奠　白銀三十両
　御目録　但請臺白木
右者、松月院不幸ニ付、從　太守様爲御香奠拝領被仰付之旨、御使諏方甚兵衛殿より奉承知候付、御請御礼申上候、
一御香奠拝領被仰付候付而、嶋津彦太夫・町田源左衛門相詰候、尤阿多源之丞・町田孫兵衛勝手江相詰させ候、
一當日致登　城月番御用人戸田傳五郎殿御取次を以御礼申上候、且亦諏方甚兵衛殿宅江茂爲御礼見舞候事、
一拝領之御香奠、當日石谷永福寺江差越、宰領岩下軍右衛門、
一御三殿様・御女中様方より拝領之御香奠之儀者、都而永福寺祠堂銀ニ致奇附候事、

○延享二年十二月、松月院之生母永照院出吾之第、

而徙島津主水久命宅、永照院　前大守綱貴公側室二階堂氏女既出、而松月院同胞之淑弟曰島津仁十郎久福、出後於島津主水久輔、久福之男曰島津主水久命、即永照院女孫也、而久福之資魁岸輪張、使廢居其私邑市成、於是松月院之歿、久命因山岡齋宮久澄謀吾、以迎入永照院于己之宅也、吾辭曰、松月院下嫁吾養父久儔也、永照院從而就吾第者廿七年于玆矣、而今猝出去吾第、無乃不似于厚其存時而薄其没後乎也、吾雖不敏猶願供養以終其身而已矣、然而久命不可自來而對會強之、乃不得已從其所請、既而久甫新作永照院之室于久命第、至是永照院出徙新造宅也、

○五〇三　永照院引取一件

丑十一月朔日

一嶋津主水殿より町田正左衞門御用之儀候間、寺社奉行所江罷出候様ニと御手紙被差越候ニ付、罷出候處、山岡齋殿・主水殿御同席ニ而、齋殿より致承知候ハ、松月院殿御不幸ニ付、永照院殿儀主水宅江引取申度候、此旨郷九郎殿江可被申達候、左候而明日中何分ニ茂御返答可承候、右返答之儀者齋江可被仰聞旨、致承知候事、

一右、引次齋殿より被仰聞候者、永照院殿主水殿方江被引移候ニ付而者、家作之儀者郷九郎殿より被相調被遣候様ニ有之度旨致承知候、

口上

松月院不幸ニ付而、永照院殿儀其御方江被引取度旨、昨日町田正左衞門被召呼、被仰聞趣致承知候、依之拙者存候ハ、最早及多年、此方江被爲居事ニ候得者、何そ此内ニ相替儀も無御座筈ニ候、同ハ此方江御居留り被成候様ニ御座有度存候、若又永照院殿思召之程も有之被仰聞儀ニ候ハヽ、乍其上幾度も御相談可仕候、先私存寄之趣右之通申達候、以上、

『延享二年』
十一月二日　　町田郷九郎

嶋津主水様

右返答書、町田正左衛門致持参、齋殿江差上置候、一十一月三日、嶋津主水殿御書被仰聞候者、永照院殿儀、此節私宅江引取申度旨、一昨日申達候処、昨日爲御返答御書付を以段々被仰聞趣、委曲致承知候、然共右ニ付而者、何ヶ度被仰聞候而も、主水宅江引取申内存ニ御座候、得御内意申方も御座候間、内々先左様御心得可被成候、

十二月六日
寫

嶋津主水

右者、當分永照院江被下置候、御扶持米御心附銀外ニ此節より米弐石ツヽ年々被下置候、

右之通申渡、町田郷九郎ニも申聞、首尾懸江も可申渡候、

十二月　（伊勢貞起）兵部

寫

永照院事、嶋津主水方江引取度旨被申出趣有之候、勝手次第被致候様被仰付候、此旨主水江申渡、町田郷九郎江も可申聞候、

十二月　（伊勢貞起）兵部

右之通、御用人有川孝右衛門御取次ニ而、主水殿承知被成、引次郷九郎江茂被仰聞致承知候事、

○延享三年丙寅三月廿七日、先是元文二年九月、吾庶町田七右衛門俊勝自請、為重富領主島津壯之助忠紀（後稱周防）之家臣、至是　朝廷降内旨於忠紀、使定俊勝之家秩、且嫡子世獻太刀焉、因俊勝以此呈示於吾、其狀如後、

○五〇四　町田俊勝等格式治定一件

一於大城　御内沙汰之上、小番町田七右衛門・緒方伊右衛門并中村助左衛門二男中村鉄五郎別立被申付候付而者、右両家同前ニ鉄五郎ニ茂小番ニ被召入、三人之家格ハ別府・中村・肥後三家差次之家格ニ被　仰出、嫡子代々太刀進上可致旨、『鎌田』隼人様より山沢十太夫様御取次ニ而被仰渡候、

一島津周防殿江

町田七右衞門
緒方伊右衞門
中村鉄五郎

右者、家來三人充家格式被仰付置、其差次右家來之人数手札帳面無年付、　御城下士互ニ縁與御免無俗生付、三人充家格式被仰付置候者共同前ニ被仰付候、領主何そニ付、御禮被仰上候節、　御目見被仰付候ハヽ、脇指を不帶　御目見被仰付候、此外之儀者家來三人充格式被仰付置候通、其外同前ニ被仰付候、

四月　『北條』織部（時成）

一御目見仕候節者、嫡子迄主人より拜受十文字御紋之侭着用御免被仰付候、左候而、衣服被下候節之儀ニ付、『島津貴儒』備中様より島津『久』仲様江被仰渡趣有之候由ニ而、其段　礒御方江仲様より御伺被成候處、右ニ茂被仰渡置候通、衣服其外三家同前ニ被仰付候旨、　御意之趣候段、寅十月六日、山沢十太夫様御取次ニ而被仰渡候、尤三次郎様・兵庫様御家中之儀茂、此節同様ニ格式御治定被仰渡、衣服等之儀茂同様ニ被仰渡候由、被仰渡候事、

○延享四年丁卯六月十四日、入白尾四郎兵衞國芳之門、學大島流鎗術、

○延享五年戊辰正月十一日、為御番頭兼奏者番、御家老島津主鈴久郷降命、

○延享五年二月十五日、見　太守宗信公於御書院、獻太刀・馬代、拜御番頭也、禰寢孫左衞門清香為奏者、是日遷二番組頭、御番頭・奏者番並如故、御家老樺山主計久初降命、　今日領馬関田郡諸縣地頭職、樺山久初宣旨馬関馬把之訛云、

○延享五年五月朔日、見　太守宗信公於御書院、獻太刀・馬代、拜地頭職也、島津求馬久教為奏者、

○寛延二年己巳七月十日、前中將宗信公薨於麗城、春秋廿二、慈德院殿、

○寛延二年十一月十日、　太守重年公即位時久門是月廿八日公元服奉稱薩摩守重年、

○寛延三年庚午三月十一日、嚮有訟、御家老樺山久初降命曰、久甫庶子及支族實名、宜以實字為通字、初庶族用俊字、於是更賜之、避　太守重年公之偏諱也、

○五〇五　島津重年一字状

町田郷九郎

寛延三年　實
三月十一日

（本文書ハ「旧記雑録追録五」七二二号文書ト同文ナリ）

○五〇六　樺山久初副状

町田郷九郎

右者、先年庶流實名俊之字被下置候處、差支候付、此節別紙之通實之字被下候、

三月十一日　『樺山久初』主計

（本文書ハ「旧記雑録追録五」七二三号文書ト同文ナリ）

○寛延三年十月十八日、久甫室肝付氏病卒（肝付典膳、兼隆女）享年廿三、法名法心院殿圓室慈光大姉、葬石谷永福寺、置牌於同寺、

○寛延四年辛未五月廿九日、創岩清水八幡祠于里第中、以歳久八幡為相殿、乃令本府諏方神主本田親盈招禱神霊焉、事見親盈之祝詞（天明元年辛丑五月、重祔長松霊神云）

○五〇七　石清水八幡宮造立祝詞

神力　神通
奉造立八幡宮社頭
神變　妙壇

抑大日本最上神祇齋場者、乃皇孫降化之濫觴下界勸請之根本也、神武之創草是華夏之芳躅皇統無疆之基元也、然則奉安神代之霊寶、受天照大神之詔命、修天兒屋命之大業、誠是神國第一之王法本朝无雙之祭政也、玆仁奉勸請垂跡八幡宮波、日神乃所生三女田心姫（マシマセルミツノヒメカミタコリ）・湍津姫（タキツ）・市杵島姫（イチキシマ）神也、相殿乃右仁祭神於歳久八幡登奉號掛毛畏幾太神達乃宇豆

乃廣前仁恐美恐美毛申佐久、殊乃由波施主藤原久張深久此神遠崇敬之天、新仁新殿造立之神寶御裝束乎飾調、吉日良辰乎撰定、正一位諏方之神主出羽守藤原親盈乎以神霊乎新殿仁遷鎮奉稱辭竟、神波因人之敬貴、人波依神之助安、伏請尊神幸垂照鑑、齋加擁護賜仁以慶福、祐以壽考、縱有疾病即愈、縱有患難即除、佳運天長、令孫地久、政治億斯、家領萬年、與神之位共安平、與神之霊共永存、夜守日守受守幸賜止、恐美惶美毛申壽、

寛延四年辛未正月廿九日

施主　町田郷九郎藤原久張

役人　河野藤右衛門通春

右同　折田慶左衛門盛隆

右同　松下良右衛門春陽

大工　上原源藤

（表紙）

廿五代
久甫第三
寶暦二至
明和二

町田氏正統系譜　卅六

藤原姓町田氏正統系譜卷第卅六久甫三

○寶暦二年壬申二月十一日、為兼御用人、組頭・奏者番如故、御家老鎌田典膳政昌降命、

○寶暦二年三月九日、見　重年公於御書院、輸太刀・馬代拜御用人也、島津小平太久金為奏者、

○寶暦四年甲戌十一月、啓請九條内大臣尚實公、書氏神之神號也（氏神字初見舊事紀、字彙、先靈西陵氏神云云）、町田氏姓藤原氏者、昉乎　大祖公嘗爲近衛字假子、而近衛家出自神別天兒屋命、兒屋命其廟號春日、是藤原姓所以春日為氏神也、按皇國之制皇子諸王賜姓、則別諸臣列、乃如皇別源氏、以岩清水八幡宮為氏神、八幡宮奉祀三女神、三女神、天照太神之皇兒、而降諸宇佐、為道中貴、乃所以皇別人臣之爲氏神也、久甫住時戸祝岩清水八幡祠者為是已、神號之來由詳于久甫自記、故不復言、

○五〇八　町田久甫神号真翰来由記

録神號真翰之來由

予祖元來藤原姓、春日大明神者家世之氏神也、故覬覦於　神孫九條内大臣尚實公神號之染筆年尚矣、然無途達其事於上都、幸今薩府諏方神社神主本田出羽守親盈曾習神學於京師松岡下総之日、公亦爲下総門人、以故親盈拜謁公于　九條殿下、遇知頗渥、其老臣芝越中守亦荆識焉、親盈者予師也、以是熟談於事、今玆甲戌三月、親盈投具狀於越中守、奉請神號之染筆於公、雖然堂上之尊貴容易不事成、屢以越中守吹嘘　公許諾焉、見染天兒屋根命五大

字之真翰、同年十月二十五日、徵大龍玄察長老依事東福勤番京師寺中常樂庵、於殿下被附之、同十一月、長老歸國附之於予、嗚呼神孫之真翰直是可爲神體也、多歲之願望相愜、氏神亦豈無感格耶、敬尊無窮欣歡有餘、於是進呈唐物五品於　殿下、奉謝潤筆、親盈復投書翰於越中守、傳達之於京師也、乃裝潢幅焉、造新篋藏之、以爲家珍、仍聊録其事、以貽于將來、

（時）皆寶曆四年歲次甲戌仲冬日　町田主計藤原久連謹識

（天児屋根命ノ真翰省略ス）

○五〇九　芝越中守書狀

一筆令啓達候、然者御門人町田郷九郎方被希候付、天児屋根命神號九條内大臣殿御染筆之御儀、以御願書御願被成候旨致承知、及披露候之處、今度御染毫被成被下候、仍如此御座候、恐々謹言、

芝越中守（花押）

九月廿四日

本田出羽守様

○寶曆五年乙亥六月十一日、　前少將重年公薨於江戸、春秋廿七、圓德院殿、

○寶曆五年七月廿七日、　太守重豪公即位時忠洪、寶曆八年六月十三日、公元服、奉稱薩摩守重豪

○寶曆六年丙子八月、命吾庶町田孫七實純次子町田安右衞門實阜諏方神事社役、時實純不肯曰、先祖爾來未曽務社役、請辭矣、久甫詰問之、實純固執泥不可以諭也、於是將上狀訟於朝以拆辨其非議、實純聞之襲服陳謝曰、不復敢拒命矣、乃雖未至于上狀、然而恁輩（カクノゴトキ）或恐貽後患、因認其事情、而懲忿傚實純之嚬者、夫諏方神事社役權輿乎九代　太守公、而若夫居頭役特為貴役、那則頭殿擬勅使、居頭擬上使（將軍家使臣、俗稱上使）、是故不唯吾家然也、凡預社役公族他家之八大姓（八大姓見上高久譜）、必以直別門命居頭、而弊役以下亞（ツク）之、昔人是爲門地規模也、而今吾庶町田實純其祖久門・忠堯相繼欲對本宗久幸・忠尚而爭奪嫡統者、業已両般其僭偷之己泰（ハナハダシキ）、譬諸惡沈而猶抱石者、寧雖溺不能悟也、抑實純父祖以來妾自

稱嫡流、且不務社役、云爾乃若辨于忠尚譜中、凡
爭嫡庶是職由其出自未審者、今如實純則遙々遐胄
不容與本宗同年而論其出處甲乙矣、猶且自稱嫡、
且不務社役、其瞽説欺天乎、將天奪其魄者乎、恃
可怪矣、因不厭費紙筆、收録其舊案以供其詳、

○五一〇　諏方神事社役辞退一件

寶暦六年子八月、諏方御祭禮ニ付、當年社役勤前
之由被仰渡候故、町田孫七二男町田安右衞門江幣
之役申渡候處、書付を以御請之旨首尾申出候、右
ニ付、孫七より別紙を以申出候者、自家之儀者出
羽様御代社役御免被仰付置候間、此段被聞召達御
免可被下旨申出候付、此方江者社役被差免置候書
留も不相見得候、相糺追而何分ニ茂可申渡候得共、
此節者神事も爲差懸事ニ候間、餘方江申渡、安右
衞門事者此節者先可被差免旨、用頼押川嘉平太よ
り書付を以申遣候、左候而社役被差免置候、證書
等も所持可有之候間、書写可被差出旨申遣候付、
左之通書付被差出候、

覚

私二男町田安右衞門事、此節諏方神事ニ付、幣之
役被仰付候得共、私家代々社役相勤候儀無御座候
ニ付、其段申上候処、此節迄者先安右衞門事幣之
役被成御免、難有奉存候、依之私家社役相勤不申
訳書留等も御座候者、可申上旨承知仕候、寛文六
年午正月、私曽祖父町田八右衞門忠堯代御先祖出
羽様御事、町田家御惣領被成御究候節、八右衞門
より家筋之儀ニ付申上候趣有之、其砌御勉之御家
老衆依御差圖、新納大藏殿・大嶋勘右衞門殿・新
納縫殿殿・大山三郎右衞門殿・喜入五郎兵衞殿よ
り八右衞門江段々被仰聞候旨有之、八右衞門より
書付を以申上置候、其内ニ祖父駿河國分江罷移候
以來、一度も社役不勤來候間、向後可爲其通候、
此旨各被聞召置、御老中御前可然様奉頼候、出羽
様御方江も各より其段被仰入可被下旨、右五人之
衆宛書ニ而申出置、右次第ニ御座候故、駿河より

私祖父八右衞門俊方迄四代、凡及百年、庶流職分諏方御神事社役等相勤不申候、若從嫡家社役等之勤被仰付候者、寛文六年、八右衞門忠堯申出置候趣を以、御断申上候様可仕旨、祖父八右衞門書記置申候書付可差上旨承知仕候付、此段申上候、以上、

六月廿五日　　町田孫七

押川嘉平太殿

右之通、書付差出候ニ付、舊記段々相糺候得共、孫七家ニ社役被差免置候書留茂、此方江者無之候故、此上者得御差圖、何分ニ茂申渡外無之候付、御屋形江申出候趣段々致吟味、口上書相調候、依之町田十左衞門を以孫七方江其旨申達可然と、是又申談、十左衞門より相達候處、對御嫡家御断申上候儀も如何候、先祖共書留置候迄を以、其趣爲申上事ニ候間、向後者御庶流之面々相勤候同前ニ、諸事可相勤旨孫七申上候由、十左衞門承達候故、最早不及得御差圖候方ニ罷成候、然者以來爲證書ニ候、左之通相認、十左衞門を以孫七方江相渡候、

覚

諏訪御祭禮ニ付、五ヶ年一度當家より社役勤來候故、人柄見合、庶流之面々江勤方申渡事候、御方先祖町田駿河久門代ニも両度社役爲被相勤事候ニ付、其例を以幸左衞門久東代爲申渡事共候、然處御方家之儀、出羽忠尚代社役爲差免置由、此節被申聞趣有之、御方江茂忠尚遺置候證書も所持無之由、右躰之儀者嫡庶相互ニ證書有之、致符合筈之処、無其儀候、御方家筋と當家六男則久一流之段者、此以前及両度御糺之上、古系図之面明白ニ而、屹爲被仰渡置事候、然者當家二男家を初、庶流一統ニ社役相勤事候処、御方家之書留迄を以、以來不被相勤儀と、餘家ニ不相齊候間、向後社役可被相勤候、以上、

八月二日　　町田郷九郎

町田孫七殿

一孫七より社役差免候様申出候儀ニ付而者、得御差

圖候筋申談、口上書相調候得共、不及其儀事罷成候、然者此口上書無用相成候得共、向年爲見合ニ候間、此一帳ニ留置者也、

口上覚

當年諏方御神事ニ付、町田家社役勤所候間、銘〻申渡名書可差出旨被仰渡候付、町田孫七二男町田安右衞門江茂社役申付候、然處ニ孫七より申出候者、自家之儀者代〻庶流職分、諏方御神事之社役等相勤不申候、若從嫡家社役之勤申渡有之候者、寛文六年、町田八右衞門忠堯申出置候趣を以、御断申出候様ニ可仕旨、祖父八右衞門俊方書記置申候ニ付、此段申出候由ニ而、此節申出候、依之申上候、私先祖町田圖書久幸代孫七先祖町田駿河より先年申出候者、自家之儀者最初町田氏嫡家ニ而候旨、爲申出由候處、嶋津圖書頭忠長入道紹益老被聞達、町田氏嫡家之儀者町田圖書頭久幸ニ而候旨被仰渡候、然處、其後右駿河嫡孫八右衞門忠堯・同氏五郎右衞門久寛より、私高祖父町田出羽忠尚代又〻同断之趣申出、鎌田藏人殿被爲聞、再御糺之上弥以出羽忠尚嫡家ニ而候旨被仰渡置候、右之次第ニ而、孫七家筋之儀者、元來私家之六男家ニ而、庶流無紛段者、系圖之面明白候処、嫡流筋之趣を以、社役等相勤候儀、出羽忠尚差免置候段、此節孫七より申出候ニ付、當家舊記等段〻相糺候得共、社役差免置候儀相見得不申、孫七先祖共社役相勤候儀者書留有之候、當家二男家三男家を初、庶流一統ニ勤來候社家ニ而、孫七家迚も不相勤候而不叶事御座候處、庶流勤方之儀差免候様可仕旨申出候儀者、存外之事ニ存申候、然共右ニ茂申上候通、最初町田氏嫡家ニ而、寛文四年、新ニ私家嫡被仰付候筋之申分ニ而、不輕儀御座候、孫七并孫七家より相分れ候庶流面〻も、以來社役相勤候様申付度候得共、私計迄ニ而者不致納得筈候故、御繁多之砌候得共、御しらへの上何分ニ茂被仰渡置被下度奉存候、爲御見合孫七より申出候、別紙書付相添差上申候、此等之趣被仰上可被下儀奉頼

候、以上、

七月　　町田郷九郎

一町田孫七より社役其外庶流職分之勤方不仕候由之書付、町田十郎左衛門致披見書写持參候由、為見合左ニ記也、

口上覚写

一出羽様町田之家督ニ相究候由被仰渡候處ニ、私御請延引仕候ニ付、御老中様爲御下知、各御吳見忝奉存候、三ヶ年前出羽様御惣領之由、藏人様より被仰出候時分、御先代ニ先祖より申達候、有躰細ミ可申上置候處、去ミ年極月、御老中様より被仰渡候ハ、出羽様弥御惣領ニ相究候間、其段被仰渡候、此上者八右衛門申分有間敷候、縦申分候共、御取上ヶ被成間敷由被仰聞、我等申分被聞召通候上、如右之被仰渡候儀、定而御尤之儀ニ而社可有御座候条、可爲御差圖次第由、追付御請申上度存候得共、如何様成所を以先祖申置候趣、非分罷成候通不被仰聞候得者、同名親類中へも可承せ様も無之候、依之我等家之筋目爲被存、同名遠所江被罷居候彼方江も相談仕候處、左様成衆も難落着由被申候故、乍恐右之分ヶ被仰聞候様申上度候得共、申分候共御取上ヶも有之間敷と御座候付、不能分別行迫延引仕候、我等系圖證文其外巨細之書付共、此程各江も懸御目候通ニ而候、此上如何様之分ニ而出羽様御惣領相究候段、同者被仰聞度候得共、公儀之儀ニ候得者、此上を可申上様も無御座候、出羽様御事者御連枝様と申、御家督職之儀如何様ニも御差圖次第候、私よりも其首尾可申入候、社役之儀者駿河幼少ニ而、伊集院江罷居候中、若輩故一両度も相勤候、其後國分江罷移候而より、系圖證文等見合申ニ付、次第ニ家之儀を存、有筋申出候、以來一度も社役不相勤來候間、向後可爲其通候、此旨各被聞置、御老中御前可然様奉頼候、出羽様御方江茂各より其段被仰入可被下候、以上、

午正月十日　　町田八右衛門

新納大藏殿

大嶋勘右衞門殿
新納縫殿殿
大山三郎右衞門殿
喜入五郎兵衞殿

右口上書、寛文六年午正月十九日、喜入五郎兵衞殿ニ而差出置也、

一出羽久倍・駿河久門両家混乱之節、駿河依申分御三殿公達　上聞、両家互之格式御定ニ而候、以來當八右衞門俊方迄四代、凡及百年候、其間庶流之職分諏方御神事社役等、絶而不相勤候、若及末世、宗領家不案内ニ而、社役類之勤被申渡候者、寛文六年午正月、出羽忠尚宗領定之御請、忠堯より申出候節、口上書を以御届申上、被聞召置候次第、前条記置候間、右之旨を相断相勤間敷事、諏方御祭祀ニ付、五ヶ年一度其御方様御家より庶流之面々江人柄御見合之上、社役勤方被仰渡事ニ御座候、依之去年諏方御神事之節、右勤方之儀、私二男町田安右衞門江被仰渡候、然者私家先祖共代出羽様より社役被成御免置候段、書留有之候ニ付、右之次第を以御断申上候処、御舊記等御糺方被仰付候得者、被成御免置候訳、御證書茂無之、私家書留迄を以社役御免被成候而者、餘家ニ茂不相齊儀候故、向後社役可相勤旨被仰渡趣承知仕、畏奉存候、弥以後年共御見合を以社役被仰渡候ハヽ、相勤可申候、此段申上置候、以上、

丑正月十八日　　町田孫七印

○寶暦七年丁丑二月十一日、上願狀、啓禀嫡子元服及獻贄依例、同三月廿日、御家老島津主殿久馮報可、

○五一一　町田久甫口上覚留

口上覚留

私嫡子町田龜袈裟當年拾一歳罷成候間、御席を以元服被仰付被下度奉頼候、私家之儀者御太刀銀・馬代・折六合・御樽三荷進上仕來候間、不相替被

仰付被下度奉頼候、此等之趣を以被仰上可被下儀奉頼候、以上、

丑二月十一日　　町田郷九郎

○五一二　島津久馮申渡書写

写

町田郷九郎

右、嫡子町田龜袈裟元服之願被申出候、來ル廿八日　御直元服　御名代ニ而被仰付、折六合・御樽三荷・御太刀銀・馬代進上被仰付候、

右之通申渡、首尾係江茂可申渡候、

三月廿日　　（島津久馮）主殿

○寶暦七年三月廿八日、改名主計、由承内旨也、島津主殿久馮令御用人川田彦七國起宣旨、是日獻太刀・馬代於　太守重豪公、拝男久孚元服也、時公尚幼在江戸邸、島津周防忠紀代　公受拝、喜入主馬久福為奏者、

○寶暦十一年辛巳二月、使重富家臣町田七右衞門俊勝改姓梅元氏、七右衞門之父町田七郎右衞門俊香者、吾之庶飯牟禮紀伊介光家之昆孫（イツコノ）也、光家嘗事義久公、鎮督牛根屢被恩寵、寛永二年十一月、家久公許光家復町田氏、元文二年九月、町田七右衞門俊勝自請為島津壯之助忠紀之臣、而律有之曰、公族下為陪臣者、不得稱本氏、如町田氏則當稱梅元也、而是時久甫猶幼沖不省之、到于今玆劾彈其違格、使七右衞門俊勝速改梅元家號（梅元字重富家家臣作元、垂水家臣作本、蓋私為識別也）

○五一三　町田久甫口上覚

口上覚

私庶流町田七郎右衞門弟町田七右衞門事、去年組方御暇申上、嶋津周防殿家來罷成候處、其後周防殿同家中別家ニ養子罷成、七右衞門家跡當分町田七右衞門と申者候、然者　御氏族之庶流倍臣者爲差立由緒無之者者、嫡家之家号名乗候儀、先年被

差留、町田之庶流倍臣者者、一統梅元ニ相改申候、右次第御座候故、七右衛門事依願倍臣爲罷成者候得者、何そ由緒も無之候ニ付、御格之通、梅元之家號ニ相改候様、嫡家より可申渡事御座候得共、七右衛門事周防殿家來罷成候砌、私事幼少有之、右躰之辨も無之、當分迄其儘ニ而罷在候、去年被仰渡趣も御座候付而者、梅元之家號相改候様可申渡候得共、及数年町田之家號名乗爲罷在儀候故、私計迄ニ而申渡候様ニも難仕候ニ付、此段奉得御差圖候、右之趣、被仰上可被下儀奉頼候、以上、

巳二月七日　　町田主計

一右ニ付、鎌田隼人様より川上弥五太夫様御取次を以、嶋津周防殿家來町田七右衛門事、梅元之家號ニ相改候様可申渡旨被仰渡候事、

○五一四　鎌田正芳申渡書写

町田主計より庶流町田七郎左衛門弟町田七右衛門事、先年與方御暇申上、周防殿家來罷成、其後同家中別家養子罷成、當諸當分町田七右衛門と申者候、御氏族之庶流倍臣者由緒無之者者、嫡家之家號名乗候儀被差留置候ニ付、梅元之家號ニ相改候様可申渡哉之旨、被申出趣有之、本文梅元之家號ニ相改候様可被申渡旨、如例可申渡候、

二月　　（鎌田正芳）隼人

右之通、被仰渡候ニ付而、町田七郎左衛門殿江被仰渡筈候處、七郎左衛門殿事、當分江戸詰故、名代親類安岡爲兵衛殿江、左之通御用頼衆より被仰遣候事、

○五一五　林筑兵衛申渡書

一町田七郎左衛門殿江家筋庶流之儀ニ付而御用候處ニ、當分江戸詰之由候間、爲名代御自分明廿七日八ツ後、主計殿宅江被罷出候様、私より可申達旨

被申付候、以上、

二月廿六日　　町田主計用類代
　　林筑兵衛

町田七郎左衛門殿親類
安岡爲兵衛殿

○五一六　町田久甫申渡書

嶋津周防殿家來
梅元七右衛門

一右、七右衛門亡養父町田七右衛門事、當家庶流町田七郎左衛門弟ニ而候處、先年嶋津周防殿家來罷成候、然者　御氏族之庶流倍臣者爲差立由緒等無之者者、嫡家之家號爲名乗間敷旨、先年屹被仰渡候趣有之、當家之庶流倍臣者者、一統梅元家號ニ爲相改候、付而者、七右衛門事家來罷成候節、御格之通梅元名字江可相改旨申渡筈候處、無其儀及數年、町田之家號名乗罷在候付、今度得御差圖候處、梅元名字相改候樣可申渡旨被仰渡候間、此旨七右衛門江可被申渡候、

巳二月廿七日　　町田主計

一右ニ付、安岡爲兵衛殿事、廿七日八後、御出被成候ニ付、右之通、御直ニ被仰渡候事、

一右ニ付、爲兵衛殿より被申渡候旨、首尾被申出候事、

○五一七　町田久甫口上覚

口上覚

私庶流町田七郎左衛門弟町田七郎右衛門事、先年與方御暇申上、嶋津周防殿家來罷成申候、然者御氏族嫡家之家號爲名乗間敷旨、被仰渡置候趣有之候ニ付、七右衛門儀家來罷成候砌、梅元名字江爲相改申筈候處、其節者私事幼年ニ而、右躰之辨茂無御座候得共、當分迄氣相付不申、町田之家號爲名乗召置申候段、大形至極奉存候、右ニ付而者何分ニも御差圖次第御断申上度奉存候間、此等之趣被仰上可被下儀奉頼候、以上、

巳二月十日　　町田主計

一右ニ付、鎌田隼人様「正芳」より川上弥五太夫様御取次を以、左之通、被仰渡候事、

○五一八　鎌田正芳申渡書写

写

御目通遠慮格　　町田主計

右、庶流町田七郎左衛門（右カ）弟町田七右衛門事、依願先年島津周防殿家來罷成候處、倍臣者御氏族嫡家之家號爲名乗間敷旨、一統被仰渡置趣有之候、付而者、七右衛門家來入之節、梅元名字ニ爲相改申筈候處、其砌幼年ニ而、右躰辨茂無之候得共、當時迄不氣付、町田之家號爲名乗置候段、大形之旨御断被申出候、依之、右之通、被仰付候、

右、如例可申渡候、

二月廿六日　　（鎌田正芳）隼人

○寶暦十一年十一月廿五日、　重豪公親賜久甫般若面一掛（般若面即能舞之鬼女假面）、御近習役福山平太夫安都授之證狀（今日、久甫直表御用人署、左右人來曰急宣喚、趨至後宮、久甫便起舞、畢公手自賞給是假面也、然證狀、公命曰、即今舞源氏供養、顧舞墓謳者鼓工既就坐、曰、於御休息所者、踵為故事耳、因細注云）

○五一九　福山安都証状

證文

般若面

右、於御休息所、從　重豪公御手自拝領被　仰付候、其節拙者　御前江相詰候、仍證狀如件、

寶暦十一年巳十一月廿五日　　福山平太夫（花押）○（黒印）

町田主計殿

○寶暦十一年十一月廿九日、　公賜久甫御鷹之鶩一雙（御鷹之鶩謂放鷹所獲之鶩）、御近習役二階堂蔀行寧傳之、

○寶暦十二年壬午正月十一日、遷為寺社奉行、御家老島津若狹久定降命（是時兼知二番組、頭・奏者番両加役）

○同月十五日、見　重豪公於御書院獻太刀・馬代、拝寺社奉行也、北郷民部久傳（スケ）為奏者、

○寶暦十二年正月十八日、　公使御側御小姓相良權

太夫長儔於鳴子之間賜久甫能仕舞御扇子二握、

○同月廿九日、使御近習役四元正藏堯安於御休息所賜久甫島紬絹二端、

○寶暦十二年二月四日、　公將如江戸發麗城、命久甫扈從於阿久根受旨、獵於大島射斃鹿一頭、同十日、抵出水舍別館、　今宵　公賜久甫縮緬纏(ツタイレ)御衣一領、翌十一日、　公就駕、乃自是辭去(此佗有扈從公如江戸、或抵阿久根、或抵伊集院而、歸者、紀年不詳、則無書)

○同月廿一日、　公行至豐前大里、自江戸飛報曰、本月十六日、芝邸延燒、

○寶暦十二年三月九日、　公行次安藝州廿日市、幕府奉書到來曰、宜緩參觀之期、為火故也、於是公自廿日市浦引回向國、三月廿七日至本府、

○寶暦十二年閏四月朔日、轉領東郷(薩摩郡)地頭職、御家老鎌田藏人正芳降命、

○寶暦十二年五月三日、　重豪公使御側御用人福山平太夫安都宣恩旨曰、　公近日復將東行、故賜茶宴會以寵別也、今夕當造朝、於是晡後登城、就御近習役二階堂蔀行寧献酒殽若干品、乃召於麒麟之間、若年寄小林式部清香・御記録方添役兒玉早之丞實門同吾侍宴、盛膳供具、　公手自行炙(サカナ)、既而御納戸奉行木脇祐純・茶道頭竹下清香傳命、更進入御茶寮、　公親酌賜末茶、宴畢出寮移席復坐、仍賜御觴、時拜領釋隱元禪師書大道透長安五字直(タツ)幅(モノ)一軸及綺鏽(アヤサヒ)布二端、二階堂行寧將命至人定、而後拜辭退朝、今夕御飾設具書於次、

御牀掛表

後西天皇御諱良仁(ナカ)御製宸翰是今日小松清香所獻也・御花瓶四方花石竹・御釜葦屋・御茶盒唐文琳・御茶杓粟田御殿山産竹千宗守製・御茶碗唐判事・御滌方鈔(ミズコホシ)羅・御水注海門物・御炭斗菜籃・御香合堆朱・御拂末白羽・御茶祝白

○寶暦十二年五月六日、　重豪公復如江戸、

○寶暦十三年癸未六月廿一日、　公至自江戸、同月、公出獵於隅之櫻島、久甫奉倍、於此拜受鹿子一疋・雉子一隻、是時還自櫻島過臨垂水第(第主靜山貴儔、公之外祖也)賜飲有命、授久甫大杯飲中山酒、左右人曰、恐不

勝請分飲、久甫曰、　公之賜也、不敢辭、滿酌擧白、於是酩酊發顔、沈頓不省、前此久甫大戸、至是自戒曰、酒雖合禮致情之美禄、飲則必失于過、却爲枉藥、寧不如不飲也、自是雖巵酒不向口、遂爲小戸、其資性謹嚴率如此（人能飲不能飲、有大小、戸之稱、見于餘冬録）、同月於大礒館、賜櫻檜裳一領・竹笠一蓋、

○同月七日、　公内宴久甫於杜丹之間、賜唐料理十二碗之麗食、此時拝受御飾具霊鏡一面、

○寶暦十三年六月廿三日、　公賜久甫御裏物及煙袋數件・御煙管一對、

○同月廿九日、　公於御休息所手自賜木村探元畫・近衞左大臣内前公書直幅一軸、畫墨竹、探元八十四歳筆、讃（右歌）、しくれする音はすれともくれ竹のなとよとゝもにいろもかはらぬ、

○寶暦十三年七月、　公賜久甫沖永良部島布二端・貯花露缶一陶、

○同月、於尾畔離亭、　公賜親筆番篆（オランダモン）春夏秋冬字三枚・石印材一塊・朱印色一盆・唐大筆・唐紙及風前燭（チンダイマツ）一帶・高脚勸盃（コツフサカツキ）一口・煙筒一管之數件、（夏・秋・冬・春ノオランダ文字省略ス）

○同月、　公賜花橘薫香（タキモノ）錫盒入及瑪瑙石盒（香餅入）之數器、

○同月、　公又貺和蘭拂林（チンケン）狗雌雄（メヲ）両頭及和蘭茶入錫盒及華印布（サラサヌノ）・今絹織之切類等、

○同月十四日、　公再賜唐料理、時拝受和蘭蠟燭（ロウソク）二挺、

○同月十五日、於大礒館　公召久甫、拝受簦仔飯一組及蘇州扇子三握、

○寶暦十三年八月四日、　重豪公使御近習役伊地知新太夫季周降　内旨、命久甫以鳴弦曰、　公在本藩、則毎月八日、各二次修諸御休息所及後宮、若夫在江戸、則毎月各一次共一日一夜修諸後宮、自今而後久甫終身莫敢怠矣、按鳴弦即虚發也、雄略紀曰、空彈弓弦於海濱（ワタハタ）上、是所謂鳴弦術事而、鳴弦字見舒明紀也、産屋鳴弦・湯殿鳴弦見禁秘御鈔・東鑑・源氏談・榮花談等、源氏談曰、隨身も弦（ツル）打

して不絶古和都久礼、萬葉集曰、梓弓爪引夜音之遠音尓毛君之御幸乎聞之好毛、久甫學射于横山新右衛門安道、既熟傳授鳴弦術、其道要弦聲清實云、

○五二〇　伊地知季周覚

覚

思有之候間、毎月射術鳴弦執行之事、在國之節者、表休息所ニ而一日一夜、奥ニ而一日一夜、一月ニ二度ッヽ執行可有之候、在府之節者、奥ニ而一日一夜、毎月一度ッヽ、両方兼執行可有之候、

右之通、主計一生相勤候様可致候、

御取次　伊地知新太夫（季周）

八月四日

○寶暦十三年九月、　公賜綾綺書栞二枚　挾葉子間者　望風旗一本・石敢當一基、

○寶暦十三年十月、　公賜手爐一口・唐筆四枚、

○寶暦十三年十一月三日、　公開宴後宮召久甫、是時賜烏丸大納言光廣卿冨士山詠歌眞迹短冊一枚光按廣卿、斯佳作載在東海道名所圖會冨士山處、可以為家珍、又卿冨士山詩曰、毎見士峰慰口號、九天霞霧仰彌高、莊周曽曰、泰山北一箇比、倫秋免毫、

○五二一　烏丸光広短冊

きさらきなる比にや

やへかすミ立もえさらてふしの山

雪のよそめのさくら咲ころ

光廣

○寶暦十三年十一月廿九日、　公賜十文字織文御上下一具、

○寶暦十三年十二月廿六日、於御休息所　公召久甫、賜唐料理之筵宴、是時拝受加藤伊豫守文麗畫對軸二幅　左大黒即大國玉命、蓋淡海石山寺有眞影像云、右惠毗壽即事代主命、

○同月廿八日、　公賜丹後島織絹一疋及煙袋二筒・提煙袋一筒、

○寶暦十三年十二月廿九日、　公賜久甫手書、　日

本府元持山壽國寺本堂每楹設桂聯、須相同于宇治黄檗山萬福寺前堂、御小納戸愛甲彌藏兵衛廉盛有副帖、

○五二二　愛甲廉盛副状

あとハきつと〳〵火中候へく候、

一寸申候、先年より存候へ共、何にやかや致し忘候、壽國寺之本堂ニ桂ことに黄檗山同前聯ヲ掛候様ニ有之度そんし候、此事きつと申候事ニて者無之、御手前はからいにて、宜き様ニと存候、

右申度、此一筆早ミ、以上、

十二月廿九日

二白、出勤有之候ハヽ、宜しく尚久へ可申承候、

左様ニ心得、何も宜く〳〵、

主計江

用事

○寶暦十四年甲申（即明和元年）正月十三日、　重豪公睨錦織之小條鼠烟盆、

○同月廿六日、　公賜久甫唐料理、時睨煙袋七件、

○寶暦十四年二月三日夜、　公召久甫於便殿、睨桑材揩鉢（非擂鉢而掛壁柱者象形呼之）及硝子（ビイトロクリツ、ラデノカケハナイケ）製氷柱様懸瓶各一掛、

○寶暦十四年三月、　公手自賜親筆富士山圖直幅一軸（銘曰、南山主人寫）、

○同月十七日、使御茶道頭竹下辰阿彌清名下賚樂琴書以消憂之六字御石印一顆、

○寶暦十四年三月廿二日、　公發駕如江戸、四月廿四日、到于大坂、於此贈賜久甫酒杯三口、五月十三日、　公至江戸、

○明和元年甲申閏十二月、久甫奉　重豪公命、書御外庭之神祠稲荷大明神直圖（タッガク）二枚也（一稱五社稲荷、初在鼓川亭、元文五年六月、有邦公側室於嘉久君遷于原良亭、寛保二年四月廿六日、再遷外御庭也、一稱戰死稲荷、寛永十四年四月、琴月公創建于護摩所、今歲閏十二月廿八日、重豪公勸、請同靈于玆、是祠祀殁朝鮮泗川陳赤白狐也）

（稲荷大明神ノ事省略ス）

○明和二年乙酉六月廿二日、　重豪公於御近習、使御側御用人山岡齋宮久澄賜久甫和蘭製御提道具（表紅革、裏蜀江錦、其鈕叩純金鷹）

○明和二年七月、於御休息所、　公賜御煙筒三本一本銀鎖、二、本紫竹管、

○明和二年八月二日、於御休息所、　公賜釋木菴禪師自畫讃直副一軸畫墨梅、讃分明月在、梅看々花不同之十字

○同月十二日夜、於御座之間拝受十文字織文御帷子一襲越後曝布、染水色

○明和二年九月十五日、於御休息所、　公貺茶宇島織絹一端、

○同月十七日夜、於御休息所、　貺鐵十手一柄長尺五寸、十手輕卒所執之鐵、樋近本施片鉤者

○明和二年十二月廿日夜、　貺御煙袋・御煙筒各一及小蘭一盆・鶉鳥五翼、

○同月廿六日夜、　公賜久甫富士・吉野・龍田圖三配幅掛表（フクヅイカケモノ）、中冨士歌九條道前公書、左吉野歌醍醐兼潔公書、右龍田歌圓滿院祐常書、三圖共京師官畫工探索所寫也、

○五二三　富士吉野龍田の図三配幅掛表写

三幅對筆者

左　おしなへて花のさかりに成にけり
　　やまのはことにかゝるしらくも
　　醍醐　前内大臣兼潔公

中　田子の浦にうちいでゝみれハ白妙の
　　ふしの高ねに雪は降つゝ
　　九條　内大臣道前公

右　いとはやもそめていろこき紅葉かな
　　この一もとやまつしくるらむ
　　前大僧正祐常

画（画ハナシ）　法橋探索

（表紙）

廿五代
久甫第四
明和三至
天明七

町田氏正統系譜　卅七

藤原姓町田氏正統系譜巻第卅七久甫四

○明和三年丙戌正月九日、　重豪公光降於御側御用人山岡齋宮久澄之宅、久甫承命陪侍焉、是時賜久甫親筆之墨竹一枚（是公自出懷中疊紙所寫、銘曰南山）、

○同月十一日、陪扈　公于市來、今夜給五匁銀一塊（長寸許、横五分許、有波紋及五匁銀字）、

○同月廿三日、　公發國如江戸、前此　公命使久甫從行江戸、雖拜命之辱、以有痰疾時發故敢辭、至是復蒙奬挹、竟不能奉其德意、越二月廿八日、公税駕（オロシ）伏見、時送賜久甫扇子廿本（匣入）、三月拜受之、是月十九日、　公至于江戸、久甫嘗言不得躬踐三都之地親覽名山勝區者、終身遺憾矣、為是道、

○明和三年九月七日、　公自江戸送賜煙袋十三・煙筒一對（並納文匣）、御側御小姓鎌田強平政吉傳致之、

○明和四年丁亥三月朔日、　重豪公使御近習役川上龍衛親方自江戸贈賜久甫煙袋九筒、

○明和四年四月、　公發江戸經歷日州細島道、六月六日入于麑城、同月八日夜、　公手自賜久甫木如意一秉、

○明和四年八月九日、　公使御側御小姓高崎崎（マヽ）納右衛門直香賜久甫素木（シラキ）弓一張、

○明和四年九月廿七日、改名監物、御家老高橋此面種壽令御用人大野多宮久冨宣旨、

○明和四年九月、伊地知季周重宣　重豪公之旨曰、久甫修鳴弦、以每月八日・廿五日定為式日、　公在藩則八日御休息所、廿五日後宮、若夫在府、則止八日於後宮修之可矣、其日自當朝達明旦者並如

故、

○五二四　伊地知季周申渡書

八日　廿五日

右者、先達而被仰付置候射術鳴弦執行之儀、當月より毎月一日一夜ッヽ、　御在國中朝五時より翌朝六時迄、初日御休息所、後日於御奥執行式日ニ被仰付候、御在府中者、初日・八日刻限同断、於御奥一日一夜相勤候様被仰付候、

九月　御取次　伊地知新太夫（季周）

○是年九月廿日、　公賜久甫手書曰、過刻約汝、來廿五日修鳴弦、既而追念、當日將命駕出遊、須易以廿六日、儻廿六日非令日、則以廿八日、而至于後宮則宜以廿九日或晦日也、書不悉、餘尚明日面罄、

○五二五　島津重豪書状

あとハ書付火中候へく候、

先承り候鳴弦之事、廿五日と申置候へ共、廿五日ハ脇方へ參り候ゆへ、廿六日ニ致し度候、もし六日日から不宜候ハヽ、表ヲ廿八日ニして、奥ヲ廿九日か晦日ニして宜敷存候、

右段、先日ハ氣不付安し出候まゝ、此旨一寸申候、尚明日ニもくわしき事ハ可申候、以上、

廿日

○明和四年十月八日夜、於御休息所、　公賜御煙袋、

○明和四年十一月二日夜、於後宮於綾様（重豪公後夫人　甘露寺前大納言長郷女、安永四年十月廿六日掩粧、號玉貌院）賜久甫近江八景歌色紙八枚、

其書人名録左方、

三井　花山院右大將常雅卿

粟津　烏丸前大納言光栄（ナカ）卿

勢田　高倉中納言永房卿

石山　武者小路前宰相公野卿

唐崎　千種前宰相有敬卿
矢橋　五条中納言爲範卿
堅田　日野前大納言資時卿
比良　徳大寺大納言實憲卿

○同月四日夜、　公賜香裹紙大小五枚、翌五日夜、於後宮　公賜御煙筒一管、

○明和四年十一月十一日、　公於後宮手自賜久甫八幡大菩薩摩利支天之親筆二枚、陪席御近習役伊地知新太夫季周授之證狀、

（文字ハ省略ス）

○五二六　伊地知季周証狀

證文

御筆二枚

内一枚　八幡大菩薩

一枚　摩利支天

右、於　御本丸御奥、從　太守重豪公御手自拝領被仰付、其節　御前江拙者相詰候条、仍證狀如件、

明和四亥十一月十一日　伊地知新太夫（花押）○（印）

町田監物殿

○明和四年十二月、　公使伊地知季周復宣旨曰、前命久甫鳴弦、其　公在府、則毎月八日一次修諸後宮、雖然至于來歳戊子在江戸、則雖毎月八日以外、亦當涓吉不辰執行也矣、因逆命之矣、越明和五年二月六日、　公發麗城如江戸、

○五二七　伊地知季周申渡書

町田監物江

右、射術鳴弦執行勤被仰付、　御在府中者於　御奥毎月八日、一日一夜一度之勤、先達而被仰付置候得共、來子之　御在府中者、右式日、八日外ニ茂日限日數等之儀計を以不時致執行候様被仰付

候、

十二月　　御取次　伊地知新太夫（季周）

○明和五年戊子二月朔日夜、　重豪公賜日咎（ヒトケイ）一筒象牙大方寸許及和蘭小刀一刃、

○明和五年六月十九日、遷為大御目附格、職如故、

御家老樺山左京久智降命、

○明和五年十一月廿二日、轉領大口伊佐郡地頭職、御

家老島津久健降命、

○明和六年己丑十月十八日夜、　重豪公賜酒杯一口、

○明和七年庚寅正月廿日夜、　重豪公賜親墨虎之番（オラン）字横幅（ダモン）一軸及袱二、御近習役伊地知季周授之證狀、

○五二八　伊地知季周証状

重豪公御筆

紅毛字虎之字　一幅

右、於御休息所、從　太守重豪公拝領被仰付候、

其節　御前江相詰候条、爲後證如件、

明和七寅正月廿日　　伊地知新太夫（花押）○（印）

町田監物殿

（文字ハ省略ス）

（貼紙）

○明和七年十二月廿六日、久甫贖得麑島郡吉

田村田税三十五石七斗餘于肱岡條右衞門仕

明持留（謂私新墾田地）、此地係佐多浦村中諸木（モロキバヘ）八重・

同米山（コメヤマ）及本城村中前牟禮（マヘムレ）、其周囲凡三十七

町三十八間餘（東西長六百八十七間又東向出百二十五間）、文化十三年

郡吏打丈（ケンチ）増税則壹石餘（地図別藏之）、

○明和八年辛卯八月廿三日、　重豪公貺御香盆一槃、

○明和八年十月十六日、　公貺御烟筒大小三管、

○明和八年十二月、　公明春將如江戸、賜久甫親墨

内書、使行求子（モラシコ）之祈、斯書登時將石筆朱書疊紙（タトウガミ）也、

求子法即祈　公有兒息、俗祈求生兒、謂之申兒是

也、繼體紀曰、

清寧天皇無子姓、使神祇伯敬祭神祇求天皇息(ミコ)、是禱祀神祇求索兒息之濫觴、其俗最久矣、

○五二九　島津重豪書状

『只今之求子之法之事者、先さし當り爰元之事ヲをもニ、早ゝ出生之有之候様、出立以後ハ江戸之事ヲ致候様ニ、是ハ自分さし知れたる事ニ候へ共、先ゝさし當り爰元之事ヲをもニ有之候様ニ、出立之上ハ又江戸之事ヲ執行有之候様ニ、』

○明和九年壬辰(即安永元年)正月二日夜、　重豪公於御休息所、賜御手拭巾及紙俵(ハリヌキニンキヤウ)二軀、

○安永元年壬辰十一月、　重豪公自江戸贈賜御煙架一具、

○安永二年癸巳二月、　重豪公自江戸贈賜木燭臺一對(各有四脚)、

○安永二年五月十五日、見　公於御座之間、獻太刀・馬代、拜大御目附格、西恰之介純房為奏者、

○同月十八日、罷兼二番組頭・奏者番之加役、御家老島津久健令御用人小笠原郷左衛門長舊宣旨、

○安永二年癸巳六月十七日、茂姫君華誕于本府(君天明元年五月入一橋宮、同七年十一月、近衛經凞公之為義女、即大將軍家齊公御臺所)、今玆十二月六日、齋宣公華誕于江戸(親母堤前中納言代長卿中女、而前夫人之為義子、嚮公命久甫求子法、故特書二公子岳降也)、

○安永三年甲午正月廿九日、御側役山田司明遠宣公命曰、許久甫家嫡世用十字織文(此云無輪十文字)、先世嘗以十字若蛇之目為家紋、近世獨用蛇之目而十字遂廢、久甫就明遠、請用十字如舊、於是報可、

吾家嘗藏軍旛一旒、其織文黒地白書十字、蓋古者公屬之紋號一如此、已而後各省略其紋様、以別諸公紋也、或謂吾家紋輪郭(ワノ)内十字、即與公紋相同、是故以止十字為本宗紋、以止輪郭(ワノ)為支族紋、又或以充代紋、遂両失之、呼其輪郭(ワノ)訛稱蛇眼也、然而

如藏旛黒地白十字紋、始無輪郭、此乃吾家古之遺紋也已、他日當以旛紋爲徵信、訟諸官而復古也、因附記、又謂吾家以無花桐臺爲代紋、或謂是自忠尚始矣、今觀忠尚所齎之鎗裝、則有無花桐臺紋、蓋爲是乎、俗或訛呼薜蘿葉者誤矣、

○安永三年、　公在江戸、附於島津兵庫久徵之歸國、而贈賜久甫煙袋・煙筒・楊枝挿及大小裏物數品、

○安永三年十二月九日、御家老島津久健使御用人大野多宮久富傳旨畜於板鼻與八郎于吾家也、始吾姪男島津彦太夫久品私通家婢東木工左衞門之女有身焉、去之擯出、時久品戒其婢教莫育、既而産男、母擧之、即與八郎也、遂携與八郎嫁山箇野金山救仁郷圓良院、其後與八郎年七歳、來告之久甫、久甫以爲、久品累年多病、豈使婢有子哉、況久品既没、莫可以證遺腹子、乃諭其母、隨其所欲而遂生焉、去歳安永二年會査點手札、其母復來白前事、久甫乃歴問板鼻氏家臣始知久品之子、然而與八郎成長乎金山游蕩中十九年于玆矣、況性頑僻不可以教焉、則訟於官、以使與八郎冒母氏東名字也、官痛繩其情由、彈劾吾失友愛、因逼塞者六閲月矣、人有不思之毀、此之謂也、予聞之、久甫爲與八郎見重文横入恥之猶容乎溝瀆、寧欲辭官自責、乃稱病不朝者數月矣、密告于二階堂行智以其志、則行智固諫而止之、久甫雖不敢拒其忠舌、然而心中齎之、終身未嘗換色也云、

○五三〇　島津久健申渡書

板鼻與八郎

右者、島津彦大夫儀自分家來亡東木工左衞門娘先年召仕置懐胎ニ而罷居候砌、暇差免候、以後右與八郎爲致出生由候得共、親類中ニも爲存者無之、彦太夫事其後間別等敷有之座敷内取拵致養生罷居候處、與八郎と名付、母致介抱、金山中宿救仁郷

圓良院方江致縁與召列居、七歳罷成候節、彦大夫實兄町田監物殿方江差越、成行申出趣有之候得共、彦大夫病身、前以爲承置訳も無之候故、勝手次第可致旨申聞被相返置候處、去年右與八郎拾九歳罷成、手札を茂不申請由、又〻申出候付、彦大夫役人共江相糺候處、彦大夫直子無別条、母方ニ而致養育候様申付、相返置候段承届、當分迄金山江罷居、下劣之稼方仕居候ニ付、往〻彦大夫家來ニ而渡世仕度旨申出、彦大夫儀外ニ男子等無之候得共、家相續之儀者親類共申談置候趣も御座候付、母方親東名字名乗せ申度候間、御免被下度旨願被申出候、右ニ付而者先年成行申出候砌、定而訳合之儀も爲申断筈候得者、未無実子彦大夫儀候得者、実ニ仕合ニ存、其砌遂吟味、弥実子無疑候ハヽ、則引取可有養育候處ニ、無其辨成行勝手次第可致旨申聞被相返候儀、甚友愛之情薄方ニ相聞得候、去年拾九歳罷成、手札之儀得差圖候節驚入、漸役人共江相糺事実相分候次第、旁以不行届候、最初致糺方を茂候ハヽ、下劣之業を茂不致内ニ而、當分首尾能致相續可罷居候處、早竟大形故、今更相成可取計様無之、家來之願被申出候儀、彦大夫心躰并與八郎ニ至而迷惑之儀ニ候、乍然於金山下劣之稼をも致居候ニ付而者、家柄之儀ニ候得者、嫡子ニ者難被仰付候、此節直子札被仰付、彦大夫家内被召入置候条、右之通板鼻名字可爲名乗置候、左候而血筋ニ付而者監物殿無據儀候間、往〻氵を付致扶助候様被仰付候、

安永三年午十二月九日　　（島津久健）仲

○安永四年乙未十月、　重豪公使御側醫師丸目元養下惠大小數件裏物、

○安永四年十二月十三日夜、令御側御用人二階堂蔀行智贈賜御鷹之鶉五翼、

○安永五年丙申正月十一日、轉領伊集院日置郡地頭職、御家老小松帯刀清香降命、

○安永六年丁酉、始楠正成遺像在于石谷熊野社内、

今玆久甫迎而奉安于本第、傳稱、元禄四年水戸侯源光國卿建楠公廟于攝津坂本村湊川醫王山廣嚴寺、納斯遺像也、其後有故在吾石谷、於是廣嚴寺所納爲素木像云文化三年秋、久視嘗過廣嚴寺啓正成廟扉、試謁之果然、但其長寸尺與家藏像相同久甫受河陽流兵學於坂本廉四郎源清東、因崇祀楠公像、扁南木大明神、仍河内之本社號也、蓋河陽流兵書五十巻、昔者豐太閤秀吉之學軍律于竹中半兵衛重治也、業成而後使眞田安房守昌幸編修之、名曰兵學大全、天正十八年九月、安国寺惠瓊作之序、實祖述楠公之遺書也、其遺書三巻名曰櫻井巻與印木櫻井巻首別、始楠公正成奉後醍醐天皇之勅、著兵略之書、公結纓于湊川、永訣男正行于櫻井宿、時授斯書、因稱櫻井巻云、遂傳在足利常徳院源義尚許、文明中命細川右京太夫源政元、使武事練習者增補軍政、其後珍襲于三河人夏目五郎兵衛・菅原忠氏之家云、今斯書則坂本清東自金澤泰庵所授、而與夫菅原氏之藏本、果爲同書否未可知也、抑楠公之用兵也卓絶古今、所向無敵者靡佗、其利專在善用鎗道矣、夫鎗矛之設既出于混沌武器之用見于天下、未有先焉者也、然以此爲戰功第一者自楠公造矣、蓋動百萬之衆、兵刃既交將決贏輸時、揮鎗以先登者不過百人許、而百人許之中殊死以テ戰者不過七八人若三四人、於是應機變進破陣頭、敵軍忽欲亂、吾不容髪乘建瓶之勢者、唯在一筒之鎗鋒者也、此乃所以一人之力以敵百萬之衆、其功於是乎爲至大矣、則公之麾下天野了願其尤者、遂呼槍稱鎗亦自是始矣、惜撰太平記者曹于軍事、而不能著公深知用鎗之兵要也矣、

○五三一　楠正成画像賛

正三位左近衛中將楠正成公贊

好學宏論、尚仁義務人才、眞國家之柱石疆場之干城、宜乎、叶熊羆之夢、應惟肖之求、用能誓心天地、立擢叛逆、以之謨謀廟堂、制勝樽俎、豈不萬邦爲憲潛消反側耶、以寡制衆、出奇無窮、不戰屈人、猶一節也、賞不酬功、位不稱才、女寵煽於内、

權臣擅于朝、大將能立功於外者鮮矣、以身殉節純臣乎、不爲敵之所喜、而反爲所惜有國者蓋思之、

明歸化人舜水朱之瑜魯璵謹譔

（画像省略ス）

○楠中將陣歿湊川時、所著之兜盔（カブト）一頭者、總州保科侯爲大坂御城代日、獲之河内州農戸云、今以或本傳寫副楠公神影而備奇觀耳、

（楠正成兜盔図省略ス）

○安永八年己亥七月、隆旱彌月不雨、邑民方憂、久甫乃詣石谷熊野神廟、齋戒信宿登壇祈雨、越翌朝細雨暨日中、滂沱如注、枯苗復興、邑民抃躍以爲、吾君隱邨斯民之應不獨感人、亦動天地神明矣、久甫因作請雨記、

○天明二年壬寅正月十二日、島津彦太夫久品以疾終于石谷之寓舍、因葬永福寺山中、法名無外院殿寛道宗心大居士、久品即久甫之實弟、中年有内病不可治禳、且以無調護之人、令導養之於私邑中者也、

○天明二年八月、新修石谷永福寺、始天正中先世久倍創永福寺、規模廣大而施捨寺産若干石、與其各靈齋用田合一百石餘、而今吾之邑入減於當初三分、而有其一、況又邑民苦徭役什倍於古時矣、於是久甫以爲、豈可以不恤邑民饑寒而致觀美於浮圖哉、乃仍久倍之舊貫者、殿堂門廡等吾修理之、其僧房食厨以下令寺僧作之、此佗毀除不急之佛堂數區而不復置矣、因命當住持良剛書之記、以爲校割、傳于永代也、

○五三二　石谷永福寺修復記

石谷修永福寺記

原夫（タヅヌレハ）、薩摩州日置郡石谷邑者、　町田本宗世封之采地也、東距　本府麑島三里許、伊集院街道緣其左、伊作鄉捷路開其右、突然秀乎其中間者爲石谷城、四方壑谷南北僅通耳、古松老杉蔚然環植、非此不能禦烈風故也、其本丸即今館地、而松尾山永福寺在城西内、實是爲二丸焉、蓋聞之、石谷邑

當主鼻祖忠光君始賜封、遂以爲私邑、昔者墳寺在城南飛松、今猶存道場門之名、其後兵燹相踵廢壞既淹矣、粤十七代主　出羽守久倍君嘗當　太守大中公時、出鎭于菱刈郡市山城、於是以其地小苗代村永福寺爲先世香華所、天正中　君領伊集院地頭、乃去市山居伊集院城、是時移市山永福寺于今地、營築結構巍巍不讓於大家巨刹、乃取寺之故名曰永福寺、山號松尾、則城之地名也、寺地周匝凡三百四十二間餘、因請玉龍山十二世代賢守仲和尚爲當山開祖、　君施捨水陸田若干以給寺産、與其寄附齋供田合一百餘石並無段米、於今緇徒競望當山住持、謂福田地者爲是也云、自是　當主世定爲墳寺、每捐館必葬于玆、又奉安神主牌位、歲奠匪敢懈、蓋前此先世一二代嘗營窀穸之地于玆、由是　久倍君就其地建永福寺也、今墓所在寺北隅、其挺隧七十二間、其圍凡三十九間、亦老樹森列實清淨不遷之佳域也、柳又聞之、　久倍君天資豪俊寛厚愛衆、事　太守貫明公、委任出納、不敢容私、　公特拜君大夫、總統國政、所建白多、天正十五年、　豐太閤親征九州、我藩危急、　君獻策　公納焉、乃與　太閤行成、　君之功於是乎莫大焉、　公嘉君之忠貞恩遇周渥、太閤班師、令　公建府城于薩之大口鄕、而鄕屬邊陲、　公固不欲居之、因使君代守大口城、益封市山・長羽之二村、以爲一所地、於是　君再立故永福寺、復以爲先世香華之所、慶長五年、　君奉職京師、有病、將西歸、秋八月歿于播州赤石、歸葬大口永福寺焉、無幾十九世圖書頭久幸移鎭薩之伊作地頭、其後大口永福寺致衰微云、今也歷年殆二百歲、易世主已五代矣、石谷永福寺亦棟宇墮壞、門堂傾圮、若夫星霜遂邁將垂零落飄發、山僧良剛雖住山日浅、憂念之者深、乃訴諸今大壇那　町田久隅君、　君曰、吾嘗以爲思矣、雖然舊制宏麗恒艱乎修葺、且夫當家之邑入減於古三分之一、而民之苦徭役者什倍于古、今役使勞民致美於寺觀、吾不忍也、寧解毀不急之佛堂、不如使有用之殿屋時加繕完也、於是下改造之令、

其書院牌殿及両門則修換梁捔之腐朽、復理楹扉之撓側(タワミソバタツ)、又撤除西佛小堂三四區、凡其費幣皆出於君之府庫財也、又玄關・僧室・食厨・浴堂則依當寺法例、山僧起造之、但舊規廣大、今乃迫小之者數間也、又視日入佛入宅之儀式既畢、今玆起役天明二年夏五月、至于秋八月落成、蓋工匠晨夜展力、所以速復就蓋搆(シュコウ)也、蓋成物之始不易、再作之亦難、久倍君前投千金發基精舍、今日　久隅君繼其志再興造之、　二君之擧相竝同歸一轍者矣、且夫　久隅君出乎島津氏入紹　當家、爾來宣揚先烈不失令名、夙服官政、至大御目附、攝行寺社奉行、加旃治石谷邑省賦税、使臣庶各得其所、石谷闔(カツリ)呈多其德、今又補葺斯墳寺、致孝乎鬼神也、可謂明獲邑民、幽感先霊矣、山僧雖無識、幸遭遇昭代之時、増長當寺之光輝、豈不　君之惠哉、後之來住斯山者、其不可以不知之也、伏願　本宗之運祚不騫不崩、猶如石谷之常磐、永福萬年猶比斯寺之嘉名、而傳于無疆也、山僧老旦朽、雖然香花洒掃諷唄齋薫勉焉、唯是務、庶幾不負　二君之惠乎、故不特以著再成之事、其亦有以警也、

天明二年乙丑秋到彼岸日

石谷永福禅寺十二世現住良剛拝譔

○天明三年癸卯正月廿八日夜半、本第之役所火、是時諸薄羅災、自元禄延燒、復遇祝融舊記等蕩盡、信可慨也(是時久甫遊温泉、幸火不及餘所)

○天明三年九月廿三日、爲大御目附、賜職田二百石、行寺社奉行事如故、御家老喜入安房久福降命、

○五三三　喜入久福申渡書

一大御目附

一御役料高弐百斛

町田監物

右之通、御役替被　仰付、座順川上久馬次被　仰付、御役料高被下置、勤方之儀者是迄之通被仰付

候、

九月　　（喜入久福）主馬

○天明三年十一月、御家老島津近江久起宣旨曰、久甫造朝之日、宜止大御番頭座之上席也（大御番頭、安永九年七月始置是官署、朝班次大御目附、而寺社奉行所在城、外、故有斯旨、大御目附・大御番頭後並除御字）

○五三四　島津久起申渡書写

近江殿より被仰渡候御書付之写

町田監物

右者、御禮日其外扣所、是迄御番頭詰所ニ而候得共、大御番頭詰所上席ニ相扣候様被仰付候、

右之通可申渡候、

十一月

○天明五年乙巳十一月廿日、御側役二階堂蔀行充與書久甫曰、明廿一日、當朝服而登城、越廿一日造朝、則行智引進於梅之間、宣旨曰、　公嚮授爾御家傳虎之巻、因今付渡初箇傳・二箇傳・三箇傳御切紙、久甫拜受謝恩、行充仍告曰、　公倘在國、則當於御座之間　公親授之之法也、而今也在江戸、故於梅之間也、

○是歳久甫自省過六十定劫也、乃使修驗者柳田大正院起吾之法名、命以即吽無動庵主、又眞言僧潮音院覺瑞書法名六梵字于木主、木主入佐一三二所造趺石上圖刻火焰象、表所謂火生三昧體也、

○天明七年丁未正月廿九日、　前中將重豪公告老傳國於　太守齊宣公、

○夫久甫嗣立年僅六歳矣、家政一出于松月院、室老唯是聽從逮夫院主卒也、當家之負債本利未清（スマ）者殆至七十貫目、久甫不知計所施、乃毀表書院及院主舊宮、而出售（ウリ）之、又絶賣田禄七百餘石、以完償舊債矣、已而以爲世禄田地皆是祖先大造之遺澤、吾結髪之幼弱受凋弊之後、沽郤之、本出于不得已、雖然不復之、無乃莫辭於後昆乎、於是勤儉禁奢、省冗費、勸農桑、悪衣服、比至五十歳左右、陸續（タンヽ）

買得田地、竟再復七百石之原額也、久甫爲人苟不欲燕居曠日、乃自少壯讀書倣字、嘗聞國學於本田親盈、又涉獵諸藝老益錬、每日鷄鳴輒盥嗽靜坐達旦、或拜神壇爲　上祝延、苟非有疾病事故、弗敢懈焉、初就横山新右衞門安道學射、又出入東郷長左衞門實貫之門、頗究其術、　重豪公嘗命使修鳴弦法、數次又學大島鎗於白尾車參士國芳、河陽流軍法於坂本廉四郎清東、前此受越後流軍律於志摩清太左衞門清宣（都城家臣）、皆悉逮奥、又演曲全弓、春則為風鳶放石谷之野、高數十丈、仰射之以比射飛禽、其精習亦如此也、又因村野喜平太實勝授御家傳虎之巻秘訣、又習能舞於中西某、百番謡曲無不該通、備　重豪公観覧者數回（曰三井寺、曰黒塚、曰葦刈、曰柏崎、曰東北、曰班女、其尤者而曲見般若、之假面二掛嘗散樂所愛重也）　公以内旨屢召掖庭、或賜宴、或賜茶、歡然稱旨、叨辱恩遇、賜賚許多不可枚記、今録其梗概止前件矣、抑吾宗中間失夷矣、洎于久甫稍振起之、今夫、家之所以盛衰者、在乎主人之賢不肖何如焉耳、於戲其可不思歟、

○天明七年二月六日、久甫以病終于本宅、享年六十四歳、法名即吽無動庵主、葬石谷永福寺、置牌于同寺、始久甫患瘧寢劇、知不自濟、前々日預爲遺言書、與之町田久輔・島津久富、託以後事焉、夫死生之際人間一大關頭也、而承襲之例以父之遺命訴于朝天下大法也、然而世間濱死多迷亂不能自書遺言、歿後族人矯書以告于官耳、久甫臨終、從容容易簀如歸、可謂有古人之風矣、因載其書于後、

○五三五　町田久甫覚

覚

拙者事、長々病氣ニ有之、草臥相増、今躰ニ而者、得快氣候儀無心元存候、若養生不相叶相果候ハヽ、跡職之儀嫡子町田郷九郎病身ニ而、家相續仕躰無御座候間、郷九郎嫡子町田五郎太郎江継目被仰付被下候様、各より御申可給候、尤持高千七百石餘、居屋敷一ヶ所致所持候、以上、

未二月四日　　町田監物

町田主馬殿
島津藤馬殿

女子
増(マス)
○延享元年甲子十月廿七日誕生、母肝付典膳兼隆女、
○嫁北郷主膳久傳、
○明和四年丁亥六月十六日、病歿、享年二十四歳、
法名凉樹院殿雲林貞清大姉、葬平佐梁月寺北郷氏
塋内、

（表紙）

久甫嫡男
久孚
二男　實詮
三男　實應
四男　實孝

町田氏正統系譜　卅八

藤原姓町田氏正統系譜巻第卅八自久孚至實孝

久孚（ヒササネ）

初久致　亀袈裟　郷九郎

延享四年丁卯四月十日、誕生千石道之邸、母同女兄増肝付兼隆女、

寶暦七年丁丑三月廿八日、造　朝元服、島津周防忠紀代　太守重豪公加冠（時公名忠洪幼在江戸邸）、御家老島津主殿久馮理髪、更名郷九郎、獻御折六合・樽三荷・太刀一腰・馬代銀一枚拝恩、喜入主馬久福爲奏者、賜御腰指（冶工谷山住安常）、又賜坐及御引渡等、如例、是日命名久致、

寶暦九年己卯七月朔日、公賜加冠之判物、

○五三六　島津重豪加冠状

加冠　町田亀袈裟

宣爲　郷九郎

寶暦九卯七月朔日　（重豪）（花押）

（本文書ハ「旧記雑録追録五」二一九九号文書ト同文ナリ）

○明和六年己丑、久孚請聘山岡齋宮久澄女、十二月十七日成昏、

○安永二年癸巳六月十五日、爲御番頭賜禄二百苞、御家老喜入主馬久福降　命、

○安永三年甲午九月六日、親族某爲久孚造朝、因奏者番輪太刀・馬代銀、充拝御番頭之禮、此日、請罷職、御家老某令御用人村橋左膳久昌宣旨、以久

乎病久不能起也、

○天明七年丁未二月、父久甫歿、久乎不以疾繼、男久視承祖、

○寛政十一年己未六月四日、病歿、享年五十三歳、法名縁樹院殿傑山覺英大居士　葬石谷永福寺、置牌于同寺、

女子

文（フミ）

○寛延二年己巳八月廿八日誕生、母同久乎、

○初久甫以長女増嫁北郷久傳、不幾増卒、又以次女文嫁之、既而久傳歿文大歸、

○安永三年甲午九月朔日、改醮飯隈山蓮光院法眼義遵、

○安永三年十二月十二日、病歿于父久甫邸、享年二十六歳、法名玉樹院殿寶山妙光大姉、葬松原山中、別建招魂墓於飯隈山、納遺髪、

實詮（サネアキラ）

袈裟五郎　助太郎　平八　二郎四郎

○寛延三年庚午十月十三日誕生、母同兄久乎、

○寶暦十四年甲申三月十五日、初見　重豪公、獻太刀・馬代、小松仙十郎清行爲奏者　二男御太刀、三男御弓、先世未為贄式、至是始為二男以下之獻品者、惜由初咨禀於朝之未能盡事也

○明和七年庚寅十月十八日、請爲名越左源太時央壻養子、御家老桂織部久中令御用人谷山角太夫純康宣旨、

○安永元年壬辰十一月廿二日、辭去名越氏復本族、爲久甫之二男如初、並咨禀於　官也、御用人種子島十郎太夫時方承御家老小松帶刀清香旨報可、

○寛政七年乙卯正月廿一日、爲御弓奉行賜禄七十三苞、御家老伊勢播摩（マヽ）貞矩降　命、

○寛政七年四月九日、請改稱二郎四郎、御家老伊勢貞矩令御用人伊集院四郎兼風宣旨、

○文化九年壬申十二月十九日、實詮妻三輪終、享年五十六、法名貞操院殿心海惠光大姉、葬松原山支院宗慶寺中、置牌于同所源舜庵　實詮將分族營立家門、故定源舜

庵爲菩提寺、宗慶寺爲墓所、三輪肝付彈正兼伯之第三女、母堂前玉仙院殿太守繼豐公女也、

○文化十年癸酉十月朔日、實詮別樹家、爲代々小番家格、又割本宗久視之私田八十餘石班給實詮、□從所請也、御家老島津安房久備使御用人桂太郎兵衞久芳宣旨久視之班田於實詮、實百石餘矣、然權告于官以八十石六斗餘云、又先是久視求居宅一區、與之實詮、比隣橋口與三次、二百九十坪之地、

實應（サネマサ）

初實裕（ヒロ）　千之丞

○寶曆三年癸酉十一月十二日誕生、母鹽津市左衞門長元女、長元以御小姓組故不許與吾連姻、朝制也、因不得稱久甫室氏、以家女房告于官、

○寶曆十四年甲申三月十五日、初見　重豪公獻弓、島津直衞久中爲奏者、

○明和七年庚寅十二月廿五日、升實應爲二男、御家老桂久中令御用人小松右近清行宣旨、當時國制凡有兄弟數人者、兄出爲他族嗣、升其弟爲兄行、玆年久甫次子實詮爲名越氏嗣、故久甫請以第三子實應爲第二子也、

○安永元年壬辰、兄實詮辭名越氏、復本族、於是同二年癸巳八月廿八日、久甫復請以實應爲第三子、如故亦國制也、御家老島津久健令御用人川田彥七國起宣旨、

○天明六年丙午三月十九日、以妻子爲大田五郎右衞門用清養子、御家老島津久健令御用人伊地知嘉右衞門季置許可、

○寬政九年丁巳、請以疾辭去大田家、五月廿七日、御家老菱刈大炊隆邑令御用人倉山作大夫季武許可、於是携妻子復本族、實應初娶三原次右衞門經典女、生一女而歿、再醮大野清太夫清純女無子、及實應卒、自號瑞光院、既而後大歸大野氏、

○寬政十二年庚申十月十六日、病歿、享年四十七、法名本光院覺了鋌心大居士、葬松原山中、置牌于石谷永福寺、

實教（サネノリ）

初實孝（サネタカ）　清次郎

○明和二年乙酉九月五日誕生、母同兄實應、初以仲兄實詮出嗣名越氏、實應爲久甫之第二子、

故實教亦升爲第三子、既而實詮復本族、實應降爲第三子、於是久甫請使實教爲第四子如故、

安永二年癸巳八月廿八日、御用人川田國起承御家老島津久健旨報可初升實教為第三子、宜請官而舊簿不書、蓋實應之為第二子、實教生僅六歲、未告朝及降為第四子、始以其事啓請而已矣

○安永四年乙未十二月三日、初見　太守重豪公、獻中紙、高橋縫殿種商爲奏者、

○實教多力、學大島鎗術、每演習能揮三十斤之竹槌、

○天明四年甲辰十一月十一日、病痘歿、享年十九、法名聖締院一空了義大居士、葬於松原山中、置牌于右谷永福寺、

女子

艶（ツヤ）

○天明三年癸卯四月晦日誕生、母三原次右衞門經典女即日以産難歿、享年廿二、法名慈芳院殿梅薫貞實大姉、葬興國寺三原氏塋内、

○嫁東郷長左衞門實友、

女子

波（ナミ）

○安永九年庚子十二月廿九日、誕生于本宗之第、母肝付主殿兼伯女、

○配本宗監物久視、

實洪（サネヒロ）

嘉太郎　嘉九郎

○天明四年甲辰十二月七日誕生、母同女兄波、

○寛政七年乙卯八月廿八日、初見　太守齊宣公、獻太刀・馬代、山岡齋宮久芳為奏者、

○文化八年辛未十月廿一日、　太守齊興公觀覽犬追物于演武館也、射者三十人、實洪預焉、

孝一郎

○文化九年壬申二月晦日生、母義岡宗次郎久郷女、

實侃（サネモト）

袈裟五郎　助五郎

○天明七年丁未十一月廿四日誕生、母同上、
○寛政七年乙卯八月廿八日、初見　太守齊宣公、獻中紙、平田掃部正純爲奏者、
○文化九年壬申二月九日、從行　齊興公、朝于江戸、爲中小姓、翌歳以母之憂故請還家、

一女子
宮（ミヤ）
○明和七年庚寅十二月廿六日、誕生千石道之第、母山岡久澄女、
○天明六年丙午六月十九日、預請以宮妻於島津典膳久富、御家老喜入安房久福使御用人市来次郎左衛門政弼報可、是日成昏、
○享和三年癸亥九月、久富不禄、宮爲未亡人、自號松壽院、長子久陸嗣亦蚤世、次清苗出後於小松氏焉、松壽院紡績之餘閑吟哦風什、以慰寂篋之情、而同胞衷曲丞告寧之次乞久視點削、其詠草留于凡案間者数首、聊編于左方、

○五三七　松寿院詠草

早春

春來てもきのふも今日もあわ雪のつもる跡なき風のはけしさ

鶯

鶯の聲うちとけて鳴なへに春の光の色ものとけき

庭樹の初て花咲けるに

こそうゑし若木の枝に咲いてゝ花も時しる初春の色

梅

春風ににほひをとめて咲花の垣ねゆかしき宿の梅かゝ

窓梅

盛なるなかめのミかは春風に香を吹おくる窓の梅か枝

柳

世も春にうちなひきつゝ風ふけは乱れかゝれる青柳の糸

春月

春雨のはれ行空も霞むより影ほのかなる朧夜の月

花

咲しより長き日あかす見るに猶花のいろかを又たくひなき

吉野山の画を見て

こゝろあてに見れは何かとよしの山花のふふきの岩根松か根

大磯の桜

春風の吹にふかせて散しくも袖さむからぬ花の白雪

山吹

なかき日を猶なくさまん庭の面になかめもあかぬ山吹の花

夏更衣

夏衣こゝろはなたに染かへてひとへに薄き袖のすゝしさ

久視の燕善堂にて月前杜鵑といへる題をもうけて歌よみける時、

澄のほる月の光りに顕れて鳴音さやけき山時鳥

又あるとき夜の杜鵑を

時鳥啼ひと聲も身にしミて枕さひしき夜半の月影

田家風

幾千町うゑし田面の若草もひとつに靡く風の涼しさ

五月五日

けふよりハ軒にあやめをことふきて千世もかゝれと家をしとおもふ

五月雨

けふいくか晴まも見へぬ五月雨に暮し侘ぬる軒の玉水

蛍

くれ竹のうら葉につもる雪とこの窓の蛍に文や学ひん

田面の蛍

にきはへる田面の蛍こそハまたおほろ月夜の陰にそひとぶ

籬瞿麦

おく露にまかきの竹の一ふしをそへて色こく咲なな

てしこ

庭の草なと取ひともなく茂りけるに
蓬生のやとハあれても夕すゝミ涼しき風なそへたて
と

折しもおもむろに風吹きてあつさ忘れけれは
しけりあひて月ハよそなる木かくれにゆふへ涼しき
風はもり來る

秋風

秋きぬと萩のうは風音たてゝ露吹こほす武藏のゝ原

秋野

ゆきかへり道もあまたの秋のゝにいとやさしくもま
ねく尾花か

野虫

秋のゝの尾花か末もおとろへる鳴むしの音そいとゝ
わひしき

夕虫

はな鳥の色音にかへて秋は猶夕さひしき虫のこゑ
〳〵

女郎花

秋風もこゝろしてふけ女郎花置露たにもこほれむハ
うし

紅葉

このころはしくれ〳〵て千入なるいろ染盡す庭のも
みち葉

村雨にいかつちのこゑはけし

見るかうちにはるゝまもなくなる神の音におきなふ
野路の村雨

松杉見雪中

うもれてもかへぬ操や山の端の雪にミせたる松すき
の色

霜月十日あまり九日の日久徴のにひむろ成りて
しに雪のふりけるを

おひしらぬなかめとそしる葺ふきに積る音なき雪の
明ほの

寄松祝といへるこゝろを

今日よりハ君にちきりてあたらしき軒はにさかふ千

世の松かえ

賀慶

みとりそふみかきの竹の一ふしに千よませとこそ君を祈らん

かせになひく御園の柳いとひきて長き春日や百代の蔭

田毛の明神に詣て

神かきを仰くもたふとみしめ縄掛てたのミや猶祈らなん

物名

雲雀

ほのかすむ野邊のやとりの床しめて飛かふ雲雀聲もものとけし

鹿

奥山の時雨に染し紅葉より鳴音いろこき小男鹿のこゑ

池上晃

ところえて松くれ竹の影深きみきはの池にうかふ鳥

晃

恋

浮名たつ涙の川の深き瀬をいかゝせくへき袖せはき身の

寄蛍恋

浦遠く海士の小舟のいさりまてもゆる思ひにとふ蛍かな

寄雨恋

五月雨のはるゝを待てけふあすと空に浮なミたゝぬ日もなし

哀傷

実うゑ置し橘のはな咲いてぬれハ

ありし世に植て今まて留めけん花橘の形見ともかな

替る世に今はむかしをたち花にしのふ涙は袖に餘れる

おくれにし子の緋百合の花をミて

すきし子の形見に咲るゆりのはなもゆる思ひの色に出けり

弥生のすゑ吾子の事をおもひ出して
過し世の跡をしたひて思ふにも散ゆく花の身ことうらみし

雑歌

久視の許より梅一枝を贈られし時
枝をわけしたよりそうれし咲梅の匂ひより猶さとるこゝろに

つりふね

こきかへる釣する海士のふね遠ミほの〳〵霞む須磨の浦波

伊作のいて湯にまゐり湯の村にて
いたつきをあらひすてゝや湯の村にきはふ宿の民の数〳〵

おなし所の吹上をなかめやりて
唐土の遠の海原吹あけの濱の真砂地雪かとそ見る

同し牧うらにて雲雀のこゑを聞て
春のゝのまつのみとりの末遠く空も遙に雲雀鳴なり

田夫せてふ田面を通りける時鶴の聲す

何事のうさも忘れて歸るさのこゝろ廣田に鳴たつの聲

雨の後の瀧

このころの雨にみかさの立そひて岩ほと見えぬ瀧つ瀬の音

きくのはなを我さとに遣すとて
馴〳〵て植にしものをみせんとて手折て送る白菊の花

春の眺望

つりふねも霞の中をこきわけて浪路しつけし春のうら〳〵

述懐のこゝろを
しき島の道しら波にかきなかすこの水莖の跡もはつかし

一為五郎

○安永元年壬辰八月廿三日、誕生西田山岡氏第、母同女兄宮、

○安永七年戊戌五月十二日夭、享年七歳、法名瓊林院殿英質幻輝大禪童子、葬本府福昌寺、置牌于石谷永福寺為五郎性健、而、食傷青梅卒亡、